

一 小村茲ニアリシニ此元來ヲ中アテシヤ北ノ民限リ土若地ハ千八百五十四年ロシヤ兵進シテ此ニ據リ其翌年ヨリ殖民ノ業ニ從事シ千八百六十七年ニ至テトルキスタン道ノ一州セミレイチانسクノ治府ト爲セシ以來農工商ノ移民陸續來リ集リ戸口年々増シテ方今幾ント二万ノ住人アル一城下トナルニ至レリ万八千四百廿九年四月ノ兵調ヘニ總計八千六百八十人ト見ヘタリト

城下新舊及土民住居ノ數區ニ分ル其中新區ハ直ニ山麓ニ接シ煉瓦構造ノ美屋並ヒ立チ稍一都城ノ形ヲ成セシト雖モ其餘ハ皆木造ノ鹿屋ニシテロシヤ内地ノ田舎ニ類セリ唯市街ノ區畫整正路亦廣クシテ處々ニ行樹ヲ植ヘシ所アリ然モ其樹猶矮小且善ク長セサルヲ見ル又高ク城頭ニ登

ヘシ、クンガイ、アラタ、ウ山ノ北面ニハ杉檜繁茂ス城北ヨリ之ヲ望メハ森林蒼鬱其山腹ヲ蔽ヒ氷雪皎品其絶頂ニ冠ス而シテ氷雪ノ水數條分飛シテ其間ニ懸リ綠白相映シテ佳景ヲ成ス此山ハ海面ヨリ高キ一萬四千尺城下ノ建シ平廣ナル土地ハ二千五百尺トス

土地ノ氣候ハ寒暑共ニ酷ク然モ四季平均五度六分ノ暖アリ居住ニハ隨分宜キ處ト稱ス近傍土地肥ヘテ麥善ク熟シ多クハ、ロシヤ農民ノ移住所ナリ

凡ソ、ロシヤ人民ノ移植地ハ北セルギチホル、ニ始マリ、バルカシ湖東ノ曠野ヲ隔テ、レプサ、アク、スウ、カラ、デル諸河水ノ上流近傍ニ散布シ、イリ河ニ近ツヒテ其村落暫ク斷ヘ、ウエルヌイ、ニ至テ又始マリ是ヨリ東南イシク、ク、ル湖方面ニ



トクマク

カラコル

連ナル凡ソ村邑隔絶セシ地方ニハ五六里間毎ニ一驛場ヲ置ク、ロシヤ領内各地皆同シ  
 ウエルヌイ、ヨリ西ノ方ニハ、トクマク、ピシペク、メルク及アウリエ、アタ等ノ諸村アリ舊ト皆コーカン、ニ属シテ城堡相固メシ所タリ  
 トクマク、ハ、チウ河邊ニ在リ戸數四百五十其四旁土地濕潤ニシテ往々泥澤ヲ成シ其中ニ無數ノ蝦蟇群息ス之ヲ土地ノ名産トス  
 是ヨリ一路チウ河ニ沿フテ東ニ向ヒ、プアム、ト稱スル谷峽ヲ貫ヒテ、イシク、ク、ル湖ニ出其北岸ニ並フテ、カラコル村ニ至ル此路凡ソ八十六里  
 カラコル、モ亦ロシヤ、ノ移住民及土民雜居ノ村ナリ、ロシヤ

アウリエ  
アタ

人ノ家三十四土人ノ家二十五人口總計四百七十一ト算ヘリ、ロシヤ、ノ兵村此ヨリ猶東方ヘ散布シテ、ムサルト嶺北ニ及フ  
 アウリエ、アタ、ハ、ウエルヌイ、ヨリ西ニ距ル百三十七八里タラス河ノ谷峽ヲ出平野ニ注ク所ニ在リ舊ハ商賣盛ンニ行ハレシ著名ナル城邑ナリシト云フ然レ今ハ人口チ四千五百ト算ヘル一大村タルニ過キス村内種々ノ店舗アリ旅中ノ需用ハ大概資給スルヲ得ヘシ古物ノ存スル者チ、カラハナノ後裔ノ墳墓トス土民之チ、アウリエ、アタ、ト稱ス靈父ノ義ナリ村名之ニ因ル  
 アウリエ、アタ、ヨリ西南アレクサンドル山及カラタタ、ウ山ノ間ヲ過キテ、チムケント、ニ出ツ此路凡三十一里然ル時ハ、



新城

セミパラチンスク、ヨリ、ナムケントニ至ルマテ都合四百四十五六里チレンブルグ、ヨリ四百八十四五里而シテ此ヨリ南ダシケント、ニ至ル又三十二三里アリ  
ダシケント塔什  
タシケント、ハ本ト、コーカン汗國ニ屬セシ一大城下ダリシニ千八百六十五年ロシア兵之ヲ畧セシ以來ロシア、ニ於テ此ニ總督府ヲ設ケテ中、アシヤ領地ノ都府トス  
初メ、ロシア、ニ於テ本國人住居ノ爲メ少シク本城ヲ離レテ別ニ一區ノ居城ヲ經營セリ其經營ノ成リシ所方今煉瓦石造ノ美屋街ヲ成シ路ノ兩傍ニハ溝渠通シ楊柳繁茂シ其間處々コ大ナル邸宅巍立シテ全ク、エフロツパ風ノ市街ヲ成セリ之ヲ新ダシケント、ト稱ス然レ其肆店ノ並列セシ邊

城舊

ハ土地ノ風相雜ハリ鹿末ナル家屋亦多シ住人ハ兵ヲ除ヒテ五千ト算フ  
土人住居ノ本城ヲ舊ダシケント、ト稱スアシヤ區ト曰フ、其立チシ所ハ地勢高起ノ平野ニシテ三方皆田園唯、東ノ一方直ニ、ロシア、ノ新城下ニ接シ二里許南ニ流ル、所ノ、ナルチク河ノ上流ヨリ二大溝渠ヲ通シ其水ヲ引テ灌溉ノ資トス舊トハ四方壁圍トナリテ十二ノ門アリ各向フ所ノ城名ヲ以テ稱號トシテ其開閉ヲ嚴ニセシモノト云フ然レ今ハ新城下ニ接セシ方ハ全ク之ヲ撤シ他方ノ猶存スル所亦門ヲ閉チス  
舊ダシケント、ノ市區甚ダ廣大ニシテ住民ハ十万以上ニモ及フヘシト思ハル、ト雖レ千八百六十八年ノ調査ニ據レ



市場

ハ人戸一万六千七十六人口七万六千九十二内男七十四万七千三百四十五ト云ヘリ施政上城内ヲ四區ニ分チ各區住民ノ重モナル職業亦稍類ヲ以テ集リシテ見ル例ヘハ其一區ニ於テハ專ラ紡績縫裁又ハ柔皮染物等ヲ以テ業トシ他區ニ於テハ鐵物馬具帽靴又ハ煉瓦陶器等ノ製造ヲ以テ業トスル類ニシテ是等營業ノ景况各區甚々盛ナリ

バザル大市場ハ凡ソ城下ノ中央ニ在リ廣キ日覆ノ下ニ商店并列シ物貨雜集ス其中最モ多ク目ニ觸ル、者ハ華ヤカナル雜色ノ毛氈或ハ彩繡ヲ施セル革及布類又ハ絹綿ノ織物ナリ其他生糸革帽靴ノ類ヨリ金銀銅鉄及木製ノ器具ニ至ルマテ店頭備ハラサルモノナクシテ恰モ、エフロツハ風ノ博覽會場ヲ見カ如シ唯善ク修整セサルノミ然レ人最モ

氣候

多ク集リ甚々賑カナル所ハ本市場ノ近傍馬駝猶能ク通スルヲ得ル二三ノ路ナリ其路ノ兩側ニ雜商店櫛比シテ稍價ノヤスキ物ヲ賣ル此處ニ府下ノ、サルト、ロシヤ人及種々様々ノ衣帽ヲ着ケタル諸方ノ野民等各馬、駝、驢、馬等ヲ率テ雜逞シ店前路頭立錐ノ地ナク人畜相排シテ過ク而シテ主客前後相呼ヒ或ハ手ヲ拍ツテ賣買ヲ決シ畜類亦種々ノ聲ヲ發シテ叫號シ其喧闐熱鬧名狀スヘカラス然レ驚クヘキハ此混雜中衝突爭鬪等ノ事アルハ甚稀ニシテ皆大平無事ニ運動シ街頭一警官アルヲ見ス唯、人畜密接ノ間ヲ迂迴シ或ハ往々路ニ臥セシ駝及驢馬ヲ踰ヘ過クルニハ亦少シク習熟ヲ要ス

タシケント、ノ氣候ハ冬ハ寒十七度夏ハ蔭ニテ暖三十三度



トブスケン

ニ及フコアリ年中平均ノ温暖チ十四度内外トス通例十月  
 ニ雨少シク降り十二月下旬ヨリ雪ニ變シ一月下旬ニ至テ  
 又雨ニ變スト云フ春ハ三月下旬ニ始マリ四月下旬ハ菓木  
 皆華サキ六月ニ至テハ草既ニ乾枯ス  
 庭樹ハ重モニカラガチヲ植ユ、ロシヤ、ノ方ニ於テハ近年日  
 本種ト稱シ桐ヲ植ヘシ所アリ其樹善ク育ス果木ハ桃、梨、石  
 榴、林檎及無花果ヲ以テ最トス  
 マシケント、ノ南ニ、ブスケント、ト稱スル大村アリ村内間、美  
 屋アリ大通リハ石ヲ以テ路ヲ布キ略、一城下ノ形ヲ成ス其  
 一時有名ナリシ、ヤクブ||ベク、ノ故郷タルヲ以テ稍、人ノ知  
 ル所トナル  
 ヘルガナ干穀田

城下

シルダリヤ河上流ノ土地ヘルガナ谷間ト稱スル地方ハ此  
 漢番ノ大宛、罽賓、之、地、多、羊、馬、石、國、ヲ、今、ノ、東、南、千  
 餘、里、有、柿、者、山、四、環、之、地、膏、腴、多、羊、馬、石、國、ヲ、今、ノ、東、南、千  
 ト、三、面、高、山、ニ、圍、マ、レ、テ、平、地、東、西、ニ、延、フ、其、長、ハ、大、約、四、十  
 五、六、里、幅、平、均、二、十、一、二、里、ア、リ、中、間、沙、磧、一、帶、東、西、ニ、横、布、シ  
 テ、曠、野、ヲ、成、ス、其、餘、ノ、山、麓、ヲ、環、繞、セ、シ、土、地、ハ、皆、膏、腴、ニ、シ、テ  
 四、方、ノ、山、ヨ、リ、溪、河、多、ク、流、レ、田、園、各、地、其、滋、澆、ニ、資、リ、雜、穀、果  
 木、桑、棉、ノ、類、皆、善、ク、生、シ、紡、績、縫、裁、ノ、業、最、モ、盛、ン、ナ、リ、ト、ス、夫  
 ノ、舊、來、富、饒、ヲ、以、テ、著、ハ、レ、シ、コ、イ、カ、ン、マ、ル、ギ、ラ、ン、ナ、マ、ン、ガ  
 ン、ア、ン、ヂ、シ、ヤ、ン、ホ、ツ、ゼ、ン、ト、等、ノ、諸、城、皆、此、谷、間、ニ、在、リ、人、情、國  
 所、謂、寇、罕、ハ、城、キ、ト、ハ、蓋、シ、右、ノ、三、城、ヲ、加、ヘ、シ、ケ、ン、ナ、リ、チ  
 ム、ケ、ン、ト、ハ、城、キ、ト、ハ、蓋、シ、右、ノ、三、城、ヲ、加、ヘ、シ、ケ、ン、ナ、リ、チ  
 コ、イ、カ、ン、ト、モ、フ、云、フ、ケ  
 コ、イ、カ、ン、ハ、即、チ、舊、ト、ヘルガナ及ダシケント地方ヲ領セシ、



コーカン國王ノ都府アリシ所ナリ千八百七十五年其國亡  
 ンテ、ロシヤ領ニ歸ス爾來ロシヤニ於テ此ニ郡長ヲ置キ一  
 郡ノ支配役所ヲ設ケテ郡城下トス  
 城下トウル、ト稱スル小河ノ三支流ニ廣カリテ立ツ其地平  
 廣高壁之ヲ圍ンテ城郭ヲ成シ十二ノ門ヲ開ヒテ内外交通  
 ノ路ヲ通ス郭内ノ區域甚々廣シ然レ庭園閑地相間ハリ家  
 屋分散セシ所亦多クシテ住民ハ三万五千餘ニ過キス市街  
 ハ、バザル邊稍修潔商店ノ布置物貨ノ陳列ニ至テモ亦善ク  
 整ヒシヲ見ル  
 城内コーカン王ノ故宮及マドアリカント稱スル、メデレセ  
 校<sup>學</sup>稍建築ノ美ヲ以テ著ハル其中コーカン王ノ故宮ハ凡ソ  
 城下ノ中央ニ在リ煉瓦ヲ以テ四方ヲ壁圍シ廣大ナル庭園

チ擁セシカ本宮殿ハ木瓦相半ハシタル構造ノ數屋ヨリ成  
 リ上下ニ長廊ヲ設ケテ之ヲ連テ其戶窓ニハ往々雜色ノ硝  
 子ヲ用ヒ浴室等ニハ白蠟石ヲ用ヒ頗ル美麗ヲ致シタル所  
 アリシモ今ハ皆ロシヤノ武器庫トナリ庭園亦荒蕪シテ別  
 ニ觀ルヘキモノナシ  
 コーカン城下ハ舊來繁華ヲ以テ中アシヤニ名アリ金玉ノ  
 美絃歌ノ妙或ハ歌妓舞童ノ伶俐ニ至テハ今ニ、コーカン、ヲ  
 以テ第一トス唯以テ奇ト爲スヘキハ此國亡ヒシヨリ僅ニ  
 五年王宮ノ如キハ當時宮女梳粧ノ處ヌリシ美室モ既ニ變  
 シテ、ロシヤノ武器庫トナリ此地彼地ニ舊砲破彈堆積シ人  
 チシテ四顧感慨ノ情ヲ起サシムト雖モ市街ノ景况ニ至テ  
 ハ曾テ變亂ノ跡ヲ留メス其繁華舊ニ依リ復タ亡國ノ恨ヲ



産物

氣候

ソマルギラ

知ル者ナシ

土地ノ名物ハ種々ノ絹綿織物及金銀細工或ハ草細工ノ類ナリ又白紙ヲ以テ名アリ此地方ニ於テ白紙ヲ製スルハ獨リ、コイカン、ニ限リ其業本ト漢土ヨリ傳ハリシト稱シテ製紙場ノ構造ヨリ抄紙方法ニ至ルマテ全ク日本ノ法ト同シ唯、紙ハ厚キ白唐紙ニ類ス

コイカン地方或ハ、ヘルガナ谷間ノ氣候ハ東西少シク寒暖ノ差アリ凡ソ、ホツセント、ヨリ、コイカン邊ハ稍、暖ニシテ果物モ、タシケント、ヨリ早ク熟スルコト凡ソ二週間ナリト云フ然レ東ノ方マルギラン、アンヂヤン、ナマンガン邊ハ大概タシケント、ト同シ蓋シ其地勢ノ高起セシニ因ル風ハ常ニ峽口ヨリ來ル曠野ノ西風ニシテ甚タ勁ク時トシテハ戸ヲ

破リ家根ヲ損スルコトアリ

コイカン城下ニハ氣候或ハ水性ニ因リ一種ノ瘰癧流行シ患者常ニ二千人ニ下ラス故ニ、ロシヤ人此ニ住スルヲ好マズ東マルギラン、ヲ以テ、ヘルガナ全部ノ治府トスマルギラン瑪魯モ、タシケント、ト同シク城下新舊ノ二ツニ分レテ立テ、ロシヤ人新ニ住居ヲ構ヘシ所ヲ新マルギラン、ト稱ス其經營ハ千八百七十八年ヨリ始マリ現今纔ニ康衢サハロウ一條ト二三ノ支街ヲ成シ市區ノ外ニ兵營環列セシノミ然レ城下ノ計畫甚タ大且方正ニシテ路廣ク行樹ヲ其兩側ニ植ヘ既ニ成リシ家屋ハ皆煉瓦構造ニシテ全ク、エフロツバ風ノ市街ヲ成ス若シ此ヨリ後モ前二年間ノ比例ヲ以テ建築ノ功ヲ成サハ今後十年ノ間ニハ一大城下ヲ成スヲ得ヘ



シ  
 舊マルギラン、ハ新城ヲ距ル一里餘人口二万許ヲ有スル古  
 城ナリ住民多クハ養蠶紡績ヲ以テ業トシ商賣亦稍繁昌ス  
 其中央ニ在ル、バザル邊市街狹窄人馬雜遝ノ景況ハ他ノ諸  
 城ト同シ  
 此ヨリ東北ニ方リ、ナマンガ<sup>干奈曼</sup>アンヂヤン<sup>延安集</sup>ノ兩  
 城アリ住民各二万餘皆生糸及絹布類ノ物産ニ富ミ古來有  
 名ナル商賣城下トス  
 ホッゼント<sup>霍蘭</sup>ハ、ヘルガナ谷間ノ峽口ニ在リ、シルダリヤ  
 河ニ臨ンテ立ッ舊コ<sup>一</sup>カン國ノ時ハ常ニ、コ<sup>一</sup>カン、ブカラ、  
 ト競争ノ地トナリ或ハ、ブカラ、ニ歸シ或ハ、コ<sup>一</sup>カン、ニ屬シ  
 テ多事ナル所タリシモ千八百六十六年遂ニ、ロシヤ、ノ扼ス

ホッゼン

ウラチユ  
ベ  
チザク

ル所トナル其城郭ノ構造ハ稍堅固ナリ住民二万五千大概  
 皆タツシク、ニシテ同シク養蠶紡績ヲ以テ其重モナル職業  
 トス城内市區稍寛シ製糸器械二十餘箇アリ其工場稍繁忙  
 ナルヲ見ル近傍ニ石炭及掘山アリ土民中其採掘ヲ以テ業  
 トスル者亦多シ  
 ホッゼント、ヨリ西南ノ方ハ、キルギス曠野ヨリ一條ノ沙  
 磧ヘルガナ谷間ニ突入セリ之ヲ飢野ト稱シテ舊コ<sup>一</sup>カン  
 及ブカラ、ノ疆界トセシ所ナリ此飢野ヲ隔テ西南トルキス  
 タン山ノ北麓ニ傍ヒ大小二百五十許ノ村邑アリ其中ウラ  
 チユベ<sup>推那</sup>及チザク<sup>哈物</sup>ニ屬シテ一方ノ重鎮タリシ所ト  
 各堡壘アリ舊ハ皆ブカラ、ニ屬シテ一方ノ重鎮タリシ所ト  
 雖<sup>ト</sup>今皆ロシヤ領ニ歸シテ其戍兵各堡ニ分屯セリ此邊亦



鐵門

カラキルギース、ノ水草ヲ逐フテ游牧スル者アリ  
 ナザク、ヨリ南ニ、トルキスタン山ノ餘脈ヌツト、ト稱スル  
 山ヲ踰ヘテ、セラ、フシヤン谷間ニ出ツ其路ニ鐵門或ハ、メ  
 ルラン門ト云フ古跡アリ是ハ、チザク、ノ方ヨリ南ニ向ヒ山  
 ニ近ツヒア一ノ溪河ニ循ヒ谷峽ニ入ル所ナリ其峽口河ト  
 與ニ五六十間ノ廣サアリ左右ハ黒紫色ヲ帯ヒシ巖嶂ニシ  
 テ左ハ高ク右ハ卑シ其卑キ方ノ巖壁ニ就テ太ク刻セシ、ア  
 ラヒヤ文字アリ其譯賊山ノ義ニシテ、アブドラ時代刻セシ  
 者ト云フ何ヲ以テ單ニ賊山ト題セシカ詳ナラス唐書ノ所  
 謂鐵門山亦或ハ是レナラフ然ルハ此鐵門ノ稱アル既ニ  
 久シ王唐西疆城故地西百五十里距那色波那二百里南康南四  
 眺百石吐色如鐵爲關以限ニ左國右

城下

サマルカンド 撒干馬  
 サマルカンドハ、セラ、フシヤン河ノ南一里半許ニ在リハ、古  
 シラ、フシヤン河ニ、マレグダ、サマド、マセド、マラカ、ノト  
 シラ、フシヤン河ニ、マレグダ、サマド、マセド、マラカ、ノト  
 民之ニ抗サシテ全ク屠シテ復テ然ルニ未ダ幾ハクナリ  
 又、トサハ砂糖カ、ニテ稱セシ糖ヲ一以テニ、サマド、マラカ、ノト  
 トナリ舊ハ、ブカラ、ニ屬シテ其國第二ノ都府ト稱スル所ナリ  
 シニ千八百六十八年ロシヤ其地方ト與ニ之ヲ兼并シテ此  
 ニ、セラ、フシヤン部ノ治府ヲ設ケ別ニ其居住所ヲ經營シテ  
 方今城下新舊ノ二區ニ分レハ、ダシケント、ト同シ其地多  
 少ノ高低ヲ成シテ樹木善ク生シ城内家屋高下相倚リ或ハ  
 少シク餘地ヲ存シテ樹木ヲ植ヘ、ロシヤ人居住ノ區域ノ如  
 キハ全ク樹林中ニ在リ復タ夫ノ中アシヤ一般平地ニ低屋



舊跡

密接ノ都府ニ似ス  
 市街ノ雜選ハ大概他所ト同シ其中最モ善キ所ヲ、レギスタ  
 ン、ト稱スル廣場近傍トス此處ニ建築ノ美ナル數メチエチ  
 院寺及メデレセ校學其塔樓ト與ニ峙立シ稍富ミシ商店亦其近  
 傍ニ並列ス市場ノ景況ハ雜穀菜果ノ販賣殊ニ殷賑ナルヲ  
 見ル  
 サマルカンド、ハ中アシヤ、ニ有名ナル、ダノルラン、ノ舊都ニ  
 シテ其盛ンナリシ時ハ百五十餘ノ住民アリ工商技藝皆  
 此ニ聚マリシト云フ故ニ其遺跡ノ存スル者亦甚々多シ  
 城西ノ小高キ處ニ故城アリ土壁之ヲ圍ム周廻凡一里其内  
 ニ王宮寺院其他ノ舊屋及墓地存シテ別ニ一城郭ヲ成ス此  
 王宮中ニ、タメルラン座ト稱スル有名ノ石アリ此ハ堅石ヲ

四角形ニ平截シテ煉瓦敷ノ中壇ニ建テシモノニテ其高サ  
 凡四尺周圍ニ種々ノ彫刻ヲ施ス然レ其石灰色ニシテ黒筋  
 斑布シ且處々磨滅シテ其紋様明カナラス當時タメルラン  
 此ニ坐シテ號令ヲ四方ニ傳ヘシト云フ  
 舊寺院中最モ珍奇ナル者ハ、ビビハヌイム、ト稱シテ、タメ  
 ルラン、ノ漢土ヨリ迎ヘシ、ハヌイム、ト云フ公主ノ建立セシ  
 寺ナリ其之ヲ建ツル時ハ漢土諸方ヨリ技術ニ練達セシ職  
 工ヲ招集セシトテ構造ノ風亦少シク異ナリシカ其寺四角  
 形ノ三大棟宇ヲ成シ中間學校等ノ家屋アリテ之ヲ連ヌ寺  
 内規制精巧四壁ノ修飾ハ或ハ黃碧ノ琉璃瓦ヲ用ヒ或ハ泥  
 金ヲ用ヒテ花草ヲ畫ク其彩色爛斑トシテ人目ヲ奪フ本堂  
 ノ中央ニ白蠟石ヲ以テ製シタル大卓アリ此卓嘗テ、ハヌイ



ム公主ノ窓前ニ在リ其上ニ皮製ノ、コラシ經文横ハリ公主  
 常ニ窓内ヨリ之ヲ讀ミシトノ古傳アリ又舊ハ此寺ノ本門  
 ハ種々ノ模様アル青銅ノ鑄物ニテ立チ居シニ、ブカラ、ノ一  
 領主之ヲ用ヒテ錢ヲ鑄シト云フ  
 又グルエミル、ト稱シテ、ダメルラン、ノ墓石アル寺アリ其寺  
 内ハ白蠟石ヲ敷テ床トシ八角形ノ壁ニ泥金ヲ以テ書シタ  
 ル經文及碧藍ヲ以テ書キシ花草相混シ燦然光輝アリ、ダメ  
 ルラン、ノ墓石ハ其次ノ室ニ在リ白蠟石ノ牆ヲ以テ之ヲ圍  
 ム其墓石ハ六尺許ノ長サト三尺許ノ幅ニ四角ニ磨キタル  
 青石ニシテ一方ニ、マホメツト宗ノ祭文ヲ刻セリ此石青黒  
 色ノ光澤アリ質甚ダ堅フシテ清國人ノ小細工物ニ用ユル  
 青玉ト同シ是等ノ石ハ此地方ニ於テ出ル所ナシ蓋シ、ヤル

人口及職

ケンド地方ヨリ運ヒ來リシモノナリ墓石ノ床下ニ又一室  
 アリ、ダメルラン并ニ其教師及妻子等ノ棺ヲ安置ス  
 又城外西北ノ方ニ、ハズレナシヤシシンド、ト稱スル、ダメ  
 ルラン離宮ノ跡アリ今ハ二三ノ舊寺院ヲ存スルノミ其寺  
 院中幽暗ナル一室アル所アリ前後左右ニ種々ノ旗槍獸毛  
 獸角等ヲ陳列シテ威儀稍嚴ナリ土人云フ此ニ一神靈アリ  
 既ニ千二百年間居住シテ外寇ヲ防キ、サマルカンド、ヲ守ル  
 ト其之ヲ信スルノ甚シキハ、サマルカンド、ハ既ニ、ロシヤ、ノ  
 押領スル所トナリシモ猶外寇ナキヲ説クニ至ル  
 サマルカンド、モ他城ト同シク壁圍ノ中ニ在リ其戸數ヲ四  
 千四百十一、人口ヲ三萬五千九百十トス住民ノ重モナル職  
 業ハ城中左ノ諸製造戸ノ數ニ由リ其一班ヲ知ルヘシ但シ



物産

其數ノ十以上ニ上レル者ノミチ擧ク  
 紡績戸百八十八 絹綿機織戸五十八 靴師百六十二  
 鐵工五十六 染屋四十二 建具屋及木細工師四十二  
 陶器屋三十七 菓子屋三十三 脂烹所三十四 製皮所  
 三十 鞍所二十五 金銀細工師二十三 胡麻搾所二十  
 三 製車所二十三 仕立屋二十 毛繩製所十七 器具  
 塗師十五 鑄鐵所十二  
 土地物産ノ中其大ナル商賣品ハ棉ヲ、ロシヤ、ニ出シ米麥及  
 生糸ヲ、ブカラ、ニ出ス而シテ、ブカラ、ノ南部ヨリ果物、染具及  
 蠶ヲ輸入スルト云フ  
 此地方農産物多ク旁近ノ村々皆富饒ニシテ、ロシヤ、ノ中  
 ア  
 シヤ領地中土地ノ租稅以テ吏治ノ費用ヲ償フニ足ルハ唯、

新城

此セラ、フシヤ、ノ一州ニ限リ向後經濟上ニ於テ大ニ望チ属  
 スル所トス故ニ、ロシヤ、ニ於テモ特ニ心ヲ此ニ用ヒ諸産物  
 チ改良スル爲メ早ク種々ノ試験場ヲ設ケ米、棉、果木等ノ種  
 子ヲ諸方ヨリ集メテ之ヲ試ミ其地質ニ適スル者ハ之ヲ土  
 民ニ勸メ來リシニ近來其勸業ノ功漸々著ハレ、アメリカ棉  
 ペルシヤ米其他新奇ナル野菜果物等モ市場ニ出テ來リ今  
 ハ、エフロッパ人ノ需用品ニ至テモ殆ト缺クル者ナシ又絹  
 布類モ漸々諸方ノ嗜好ニ應シテ織ル風トナリ既ニ、エフロ  
 ッパ向キノ廣幅反物ヲモ織リ出シ、ロシヤ、ニ於テハ之ヲ、サ  
 マルカンド絹ト稱シ稍賞用スルニ至レリ  
 サマルカンド、ノ地東南北ハ山ニ蔽ハレ帷、西ノ一方開ケテ、  
 ブガラ、キワ、ノ平地ニ接シ且南方ノ山路ブカラ領内ノ一帯



植物

地ヲ貫ヒテ、アムールヤ河上流ノ平地ニ出テ直ニ、アムールガ  
 ニスタン領地ニ通スルヲ以テ軍務上亦重要ナル所ニシテ  
 若シ、ロシア、イギリス、ト隙チ生シ事申アシヤ、ニ起ルキハ、ロ  
 シヤ第一ノ根據トナルヘキ所ハ此ニ在リ故ニ一昨年ロシア  
 ヤ、トルコ、ト戦争ノ結末ニ、イギリス、ト不和チ生セシ時ヨリ  
 城西ノ高ミ古來要害ノ城址前ニ記セシ、タル所ニ就テ木法  
 ナル、エフロッツパ流ノ城ヲ建築シ方今其大ナル工事ハ大概  
 既ニ成就セリ舊城濠及壁圍ノ周廻ハ甚々廣シト雖モ新ニ  
 築ク所ノ經費ハ稍小ニシテ古壁ハ都テ之ヲ毀テ郭内ノ地  
 チ盛メテ二千五百ノ兵ヲ以テ守ルヲ得ル者トス之ヲ、ロシ  
 ヤ中アシヤ領地第一ノ堅城トス  
 此處夏ハ暑フシテ冬亦甚々寒シ故ニ植物ハ大概コーカン

地方ト同シ唯、桑ポプリエ、カラガチ、ノ類殊ニ善ク繁茂セシ  
 チ見ル、ロシア人住居ノ區域ニ設ケシ植物園ニハ、エフロッツ  
 パ、ノ南方ヨリ、アルヲリヤ、アフストラリヤ及日本地方ニ産  
 スル種々ノ樹木ヲ集メシカ其中國中自然ノ空氣ニ生スル  
 種類亦多シ就中日本種トテ山漆ニ類セシ樹最モ善ク生シ  
 テ既ニ多ク之ヲ路傍ニ植ユ此園ヲ主宰スル人ノ言ニ曰ク  
 從來ノ試験ニ因リ唯、此樹善ク水氣ノ乏シキ所ニ生長スル  
 チ得ルヲ以テ多ク苗木ヲ培養シ此地方ノ秃山ニ毛スルノ  
 計畫ヲナシ昨年ヨリ試ミニニ之ヲ處々ノ山上ニ植ヘシニ各  
 所皆善ク生育セシト後其一ヶ所ニ就テ之ヲ見シニカサマド、  
 ニヨリ、キタ山ニ出ル路ニカサマド、ノ生シタル山ノ北麓果  
 シテ數百株ノ小樹秃山頭ノ疎毛ヲ成シ嫩葉モ亦善ク發達



セリ右ハ栽植ノ時モ一滴ノ水ヲ與ヘサリシト云フ  
 サマルカンド、ヨリ西ニ相距ル凡ソ十八里セラ、フシヤン河  
 邊ニ、カテイ||クルガン、ト稱シテ人口四千四百餘ノ村アリ  
 之ヲ、ロシヤ領最末ノ村トス其少シ西ノ方ニ於テ、ブカラ、ト  
 ノ境界分カル

此ヨリ以西ハ、ブカラ領ニ属シ其都府ブカラ、ニ至ルマテ、セ  
 ラ、フシヤン河邊ノ土地一帶植物ノ被フ所トナリ其青帶或  
 ハ斷ヘ或ハ續ク中ニ、シヤ、ウエゲン、ケルミチ等ノ諸城アリ  
 ブカラ布哈

ブカラ、ハ舊ト盛大ナル國ニシテ其王エミル尊ノ向フ所  
 天下敵ナシト稱スルノ威勢アリシモ千八百六十八年ロシ  
 ヤ、ト戰フテ敗テ取リ四百方里ノ土地ヲ割キサドマル地方カ之ト

與ニ二十餘萬ノ國民ヲ失ヒ許多ノ償金ヲ出シテ僅ニ其國  
 ヲ保ツコトヲ得タリ爾來國力衰微シ内亂之ニ乘シテ起リ東  
 南ヒサル、シリヤブ、ノ諸州雜叛シ附庸ノ、カラテギン、タルワ  
 ズ諸國モ相尋イテ獨立ヲ圖リ國事一時ハ困難ヲ極メシト  
 雖モ國王銳意恢復ニ從事シテ遂ニ盡ク之ヲ平定シ方今南  
 ハ、アムーダリヤ河ニ由テ、ア、フガニスダン、ニ界ヒシ西ハ、キ  
 ヲ、北ハ、ロシヤ東ハ、清國領地ニ界ヒシ大約五千方里ノ疆土  
 ト三百四五十萬許ノ人民トチ有シ猶獨立ノ國體ヲ保ツ然  
 レハ實ハ既ニ、ロシヤ、ノ屬國同様ニシテ國王自ラ其國運ノ  
 關スル所ヲ知リ、ロシヤ、ノ氣息ヲ伺フテ百事其意ニ從フ  
 國ニ七八千ノ常備兵アリ其中少許ノ親兵ヲ府下ニ留メ餘  
 ハ皆内地諸州ノ鎮撫及西南トルクマン馳突ノ防禦ニ備フル



城下

プカラ國內物産ニ富ミ商賈盛ニ行ハシ富商家農甚々多  
 シ故ニ若シ、ロシヤ此國ヲ兼併セハ其中アシヤ領地トルキ  
 スダン道ノ歲出入平均スルヲ得ヘシト云フ、プカラ、ニ於テ  
 ハ、ロシヤ帝其國ヲ滅サ、ル約束ヲ與ヘシトテ固ク之ヲ信  
 シテ復タ備禦ヲ設ケス亦自ラ能ク爲ス、アルナキヲ知ル  
 ナリ故ニ若シ他日此國內或ハ其近鄰ニ事起リ、ロシヤ帝中  
 アシヤ政略上黙止スヘカラサル事情アリト認メ其兵ヲシ  
 テ國境ヲ越ヘシムルノ日至ラハ、プカラ復タ方今ノ、プカラ  
 國タルヲ得ヌ  
 プカラ或ハ、プハラ、トハ、インド語ノ、ウヒハラ、ヨリ來リ佛僧  
 住居ノ義ニシテ初メ此地方ニ佛教行ハレシ時ノ名ナリト  
 云フ其プカラ府ハ、アムーダリヤ河ノ下流ニ方リシ平潤ナ

王宮

ル沃野ニ在リ齒形ノ壁ヲ環ラシテ城郭トス城門十一アリ  
 内外交通ノ路之ニ由ル城内或ハ土造ノ平屋密布シ或ハ土  
 壁相隔タリ又或ハ煉瓦構造ノ大厦其間ニ突起シ狹路縱横  
 ニ通シ店舗並列シテ廣大ナル市區ヲ成ス其中王宮アル處  
 市街稍寛ク美屋亦多クシテ頗ル一都府ノ形ヲ成ス  
 王宮ハ、レギスタント稱スル廣場ノ一方ニ在リ其地廣場ヨ  
 リ高キ、五六間高壁之ヲ環リテ別ニ一小城郭ヲ成ス其正  
 面ハ廣場ニ臨ミ此ヨリ石ヲ用ヒテ斜メニ築キ上ケタル一  
 條ノ大路城門ニ通シ門上ニハ大ナル時計ヲ懸ケテ外觀稍、  
 壯ナリ此門内又數重ノ門アリ行ク、五六町始メテ王宮ニ  
 達ス其間ニ寺アリ兵營アリ大臣ノ家アリ王ノ腹心ノ人多  
 クハ此郭内ニ住ス



此地方ニ於テハ戶籍ノ調査ヲ以テ事トセサルニ因リ之或ハ  
 秘ノストモ云フ余試アリニ然ル全一ノ戸數ヲ調査シタルハ  
 其要領ヲ答得ステア府下住民ノ數ハ詳ナラス或ハ十万人アリト  
 云ヒ或ハ十二三万ト云フ若シ市區ノ廣大及路上來往ノ人  
 多キヲ以テ之ヲ考フレハ或ハ十四五万ニモ達スヘシ大ナ  
 ル建築物ノ數ニ至テハ土人容易ニ問ヒニ應ス蓋シ其調査  
 アルナリ其數フル所メチエチ院寺三百六十メデレセ大  
 百カラワシサライハ商館或二十五六其中千五百頭ノ駱駝  
 ナ容ル、大ナル、カラワシサライ二三アリト云フ水ハ、セ  
 ラ、フシヤン河ヨリ溝渠ヲ通シテ之ヲ各區ニ分ツ其溜池凡  
 ツ八十アリ皆石ヲ以テ之ヲ築ム  
 バザル市場ノ盛大ナル莫ニ、コーカン、タシケント、ノ上ニ出

商賈ノ景況亦一層繁劇ナルヲ見ル此處中アシヤ、ノ大都會  
 ニシテ四方商賈ノ關係最モ廣シ凡ソ外國通商ノ方向ハ、ロ  
 シヤ、カシガル新滿國カプルアフガニメセツドシヤルキワ、ノ四  
 道ニ歸ス而シテ、エフロツパ諸國トハ、ロシヤ及ベルシヤ、ニ  
 由リ、インド、トハ、アフガニスタン、ニ由リ清國トハ、カシガル、  
 ニ由テ通ス輸出品ノ大ナル者ハ棉、生絲種々ノ絹布、毛皮、鹽、  
 乾果物ノ類ニシテ輸入品ハ茶、砂糖、綿布、鐵具、陶器ノ類ヲ以  
 テ重モナルモノトス  
 通例カシガル地方ヨリハ重モニ清國ノ茶ヲ輸入スト雖モ  
 近年彼地方ノ騷亂ニ因リ通商幾ント絶ヘ又インド地方ヨ  
 リハ茶及綿布ノ類ヲ輸入シ年々三千駱駝ノ荷物駱駝ノ凡七  
 日ト六日ト雖モ此方亦アフガニスタン、ノ騷擾ニ因テ昨



氣候

年ヨリ商隊通セス目下外國トノ通商ハ唯、ロシヤ及ベルシヤ、ノ兩方ニ限リ、インド、トノ交通ハ、ベルシヤ、ニ由ルト云ヘリ

余ノカラ、ニ在リシ時ハ九月ナリシカ日中ハ煩熱堪ヘ難ク家ニ居ルキハ常ニ樹蔭ニ就テ之ヲ避ケタリ此ニハ他邦ニ比類ナキ美味ノ葡萄及甜瓜アリ樹下之ヲ用ヒテ渴ヲ解クノ快亦忘ルヘカラス然モ冬ハ甚タ寒フシテ綿衣二枚或ハ三枚ヲ重テ猶室内脚爐ヲ用ヒサルヲ得スト聞ケリ

城内處々ニ樹園アリ其樹木或ハ白壁上ニ榮ヘ或ハ寺樓ノ際ニ隱見シテ美觀ヲナス又此地ニ一種ノ小鶴アリ多ク寺塔或ハ古宅ノ屋宇ニ巢クフヲ見ル城外或ハ二三里或ハ四五里ノ間沃野四方ニ廣布シ渠水流通シテ田園村落相接ス

カルシ

其外ハ皆草斑ヲニ生セシ沙土ノ曠野ナリ

フガラ、ノ東南ニ方リ、カシカダリヤ、ト云フ河アリ、ヒサル山ノ西北ヨリ出テ西ニ流レテ沙漠ニ乾涸ス此河水灌溉ノ及フ所カルシ、ミアール、キタブ等ノ土著地方ヲ成ス

カルシ、ハ方今フカラ領内其都府ニ次テノ盛ナル城下トス人口ハ二萬七八千ニ過キスト雖モ其諸方通商ノ要衝ニ當ルヲ以テ商賈多ク集マリ市場ノ繁盛ハ稍、大都府ノ概アリ凡ソ、ヒサル、バダクシヤン及ハルク地方ヨリ出ル物産ハ初メ皆此ニ集リ此ヨリ或ハ、フカラ或ハ、サマルカンド、ニ向ヒ又或ハ土地ノ需用スル所トナルト云フ、カラワソ、ハサライ十二三アリ其庭邊皆貨物堆積シテ種々ノ商民輻湊シ中ニ、イソ、ゾ人及ア、フガ、ゾ人等ノ多ク混セシヲ見タリ



離宮

此城ハ壁ヲ設ケス唯西北ノ小高キ所ニ就テ堡ヲ構フ溝渠  
 城北ヲ繞クリ其兩岸樹木深林ヲ成ス王ノ離宮此ヨアリ毎  
 年夏秋ハ避暑ノ爲メ王此ニ來リテ二三ヶ月ヲ過スト云フ  
 余亦此ニ於テ王ニ謁セリ其離宮ハ平常ナル家屋ノ建築ニ  
 シテ謁見ノ室及饗宴ノ室モ美麗ナル敷物ヲ除クノ外復タ  
 裝飾ノ見ルヘキモノナシ  
 プカラ王ムザヘル、ハ年五十七八ハカリ身ノ長ケハ中等ニ  
 シア色白ク又目深ク鼻高ク鬚多クシア其顔相ハ、ウズベク、  
 ヨリモ、ダツシク、ニ近ク温和コシテ善ク人ニ接ス此王即位  
 以來數、兵ヲ諸方ニ用ヒ、コーガン、ヲ破リ、トルクマン、ヲ制シ  
 内亂ヲ鎮定シテ其威名近隣ニ震ヒ十餘年間稍、中アジャ覇  
 王ノ勢ヲ有セシト雖モ竟ニ、ロシヤ兵ノ爲ニ挫カレ其威名

プカラ王

シアール  
及キタル

地ニ墜チテ今ハ、ロシヤ、トルキスタン道總督ノ左右スル所  
 トナリ惟命是從フニ至リシモ亦王ノ運命ト謂フヘキヤ間  
 ニハ往事ヲ追憶シテ快カラサル時日ヲ送ラル、トモアル  
 ヘシト思ヒ謁見後多少ノ感ナキヲ得サリシ  
 カルシ、ノ西ニ方リ、シアール及キヌブ、ノ兩城並立ス此邊  
 土地膏腴ニシテ物産ニ富ミ豐饒ナル一地方ヲ成ス土人慄  
 慄チ以テ著ハレ且ツ善ク團結シテ屢、プカラ、ヲ離レ別ニ獨  
 立ノ一小國ヲ成セシトアリ然モ今ハ復タ、プカラ王ノ管轄  
 ニ屬ス右兩城邑ノ間田園人家相接續シ其四方溪水支流シ  
 樹木之ヲ蔽ヒ到ル所菜果園青々トシテ眼ニ觸レ旅人ヲシ  
 テ大ニ快チ覺ヘシム  
 余ノ經歷セシ所此ニ止マル故ニ此ヨリ以下キリ地方ニ



至ルマテハ皆當日ノ傳聞及諸家ノ記録ヲ參考シテ之ヲ記載ス

グザル

カルシー、ノ東南ヒサル山脈ノ盡クル所ニ、グザル城アリ、ブカラ東南ノ一重鎮ニシテ城堡ノ守備稍嚴ナリ此處ニ毎週一回ノ市アリ、ブカラ、カルシー邊ノ商民之ニ赴ク其市ニ、ヒサル地方ノ諸物産皆集リ又遊牧民等山手ヨリ毎回三四千頭ノ牛羊ヲ驅リ來テ物品ノ交易盛ニ行ハレ市場ノ景況亦繁華ナリト云フ

ヒサル地

ヒサル地方ノ城邑ハ概テ、スルハン及カヒリンガン河上流ノ谷間ニ集マル其稍大ナル者テ、デナ、ウ、エルチ、サルツシユイ、カラタグ河スル上流ヒサル、ツシヤンベ、カヒリンガン、ヘイザ、パツド、ンカ河ヒル上流ガノ諸城トス其他東ニ、バルヂウアン、ク、

リヤナブク河ノ上流ハ南ニ、グルガン川チエベ河カバヤ、ア、ンカ河ヒル下流ガシル川アパツド此河ト同名ナ西ニ、ヂエルベト、バイスン等ノ諸城アリ其中ヒサル、ハ全地方總轄ノ所ニシテ別ニ堅固ナル城アリ、ブカラ王ノ子代官ノ任ヲ帶ヒ兵ヲ督シテ此ニ駐劄ス城下ノ布置甚タ好ク美屋亦多ク夏ハ避暑ノ爲メ貴客諸方ヨリ來リ集リ日ヲ愉快ニ送ル因テ、シヤツマンキノモ城ノ稱アルト云フ

ヒサル山南面ノ谷間ハ樹木繁茂シ水草優美ニシテ最モ牧畜ニ宜シ又其諸河水ニ瀕セシ卑濕ノ地ニハ米善ク熟ス故ニ、ブカラ領内牛、羊、米、木材、木質其他粗重貨物ノ多ク出ル所ハ、ヒサル地方ヲ以テ第一トス此他山中ニ鉛鐵及石鹽ノ產物アリ其石鹽ハ透明ニシテ淡紅色ヲ帶ヒ苦味甚タ強シ之



チ、ヒサル紅搥ト稱<sub>レ</sub>テ中アシヤ名物ノ一トス  
アムーダリヤ河上流ノ地方

アムーダリヤ河上流ノ地方中北ハ、アライ山東ハ、パミル高  
ミ或ハ葱嶺南ハ、ヒンドクシ大山脈ヲ以テ限リシ中間山谷  
ノ土地ニ左ノ數小部アリ

カラテギ  
ン

カラテギン提略錦粒ワクシ或ハ、スルハフ河上流ノ谷間ニ在リ、  
ガルム、チ以テ其都城トス

ダルウス

ダルウス<sub>瓦達爾</sub>カラテギン、ノ南アムーダリヤ河本流ノ谷間  
ニ在リ、キラ<sub>瓦達爾</sub>フンブ、チ以テ其都城トス

シウグナ  
ン

シウグナン<sub>什克</sub>ダルウス、ノ東南ムルハフ河ノ谷間ヨリ、ヒ  
ヤンチシ河下流ノ土地ヲ領シ、バル<sub>什克</sub>ビヤンチシ、チ以テ其  
都城トス

ワクカン

ワクカン<sub>瓦達爾</sub>シウグナン、ノ東南ニ在リ、ビヤンチシ河上流ノ

バダクシ  
ヤン

谷間ヲ領シ、キラ<sub>瓦達爾</sub>ビヤンチシ、チ以テ其都城トス

バダクシヤン<sub>克巴達</sub>ダルウス、ノ南シウグナン及ワクカン、ノ  
西クチヤ或ハ、コクナ河ノ谷間ニ在リ、ヘイザパツド、チ以テ  
其都城トス

此中アムーダリヤ河以北ニ在ル者ハ近世ニ至ルマテ猶ア  
カラ、ノ威勢ニ服シテ其附庸タリシモ千八百六十年代ノ末  
カラテギン及ダルウス獨立チ圖リ其事成ラスシテ兩部共  
ニ、ブカラ、ノ兼併スル所トナル因テ、イギリス、ニ於テ、ブカラ  
王ノ猶其領地ヲ他方ヘ廣メン<sub>ト</sub>チ慮カリ、ア、フガニスメン  
及ブカラ兩國ノ、アムーダリヤ河上流ニ於ケル領地境界ノ  
論ヲ起シ長ク、ロシヤ、ト之ヲ争ヒシ後遂ニ、ワクカン及バダ



シヤン、ハ、ア、フ、ガ、ニ、ス、タ、ン、ノ、附、庸、ト、ス、ル、コ、ト、ニ、決、セ、リ、事、第  
 三、編、ニ、詳、ナ、リ  
 此、地、方、皆、邊、鄙、ノ、山、谷、ニ、シ、テ、其、事、情、詳、ナ、ラ、ス、土、民、ハ、多、ク、ハ、  
 タ、ツ、チ、ク、ニ、シ、テ、耕、收、相、半、ス、其、中、或、ハ、寶、石、錐、鑿、又、或、ハ、沙、金、  
 淘、取、チ、以、テ、業、ト、ス、ル、者、ア、リ、商、民、亦、多、シ、ト、云、フ  
 バ、タ、ク、シ、ヤ、ン、ハ、同、シ、ク、山、谷、ノ、地、方、タ、リ、ト、雖、モ、稍、美、地、チ、以、  
 テ、著、ハ、レ、其、都、城、ヘ、イ、ザ、バ、ツ、ド、ハ、コ、ク、チ、河、ノ、右、岸、ニ、在、リ、其、  
 谷、間、甚、ダ、狭、ク、家、屋、ノ、立、チ、ソ、所、長、サ、二、十、二、三、町、ア、リ、ト、雖、モ、  
 廣、サ、ハ、五、六、町、ニ、過、キ、ス、其、中、ニ、市、場、ア、リ、絹、綿、布、毛、氈、雜、穀、及、  
 木、鐵、製、ノ、器、具、皆、需、ム、ヘ、シ、奴、隸、ノ、商、賣、亦、行、ハ、レ、幼、女、ノ、賣、買、  
 殊、ニ、多、シ、ト、云、フ、土、民、最、モ、製、鐵、ノ、事、ニ、精、シ、ク、シ、テ、多、ク、農、具、  
 斧、刀、ノ、類、チ、製、シ、又、鍋、釜、ノ、類、チ、鑄、テ、廣、ク、諸、方、ニ、販、賣、ス、

バ、ダ、ク、シ、ヤ、ン、ノ、近、傍、土、地、肥、沃、穀、類、果、物、皆、善、ク、熟、ス、山、中、礦、  
 山、ニ、富、ミ、金、銀、銅、鐵、鉛、皆、有、リ、又、ラ、ピ、ス、石、光、及、チ、エ  
ル、コ、ア、ズ、石、鐵、寶、等、ノ、寶、石、チ、以、テ、此、地、方、ノ、名、産、ト、ス、  
 バ、ダ、ク、シ、ヤ、ン、亦、嘗、テ、ブ、カ、ラ、ニ、屬、セ、シ、ト、雖、モ、早、ク、既、ニ、獨、立、  
 シ、テ、一、國、チ、成、セ、リ、其、國、王、ス、ル、ダ、ン、シ、ヤ、、ノ、時、ニ、當、リ、千、七、  
 百、六、十、年、カ、シ、ガ、ル、領、主、ブ、ラ、ニ、ト、布、尼、特、羅、兄、弟、清、國、ノ、逼、ル、所  
 ト、ナ、リ、奔、テ、バ、ダ、ク、シ、ヤ、ン、ニ、投、ス、清、兵、追、フ、テ、ワ、ク、カ、ン、ニ、至、  
 リ、之、チ、索、ム、ス、ル、タ、ン、シ、ヤ、、始、メ、カ、シ、ガ、ル、王、ノ、已、ト、門、地、チ、  
 同、フ、ス、ル、チ、以、テ、之、チ、出、ス、ハ、宗、旨、ノ、許、サ、ル、所、ト、テ、其、索、ニ、  
 應、セ、サ、リ、シ、ニ、後、ブ、ラ、ニ、ト、、ト、、隙、チ、生、シ、テ、主、客、互、ニ、相、争、ヒ、  
 遂、ニ、之、チ、殺、シ、テ、其、尸、チ、清、國、ニ、送、ル、ア、フ、ガ、ニ、ス、タ、ン、王、チ、ム、  
 ル、シ、ヤ、、之、チ、聞、テ、大、ニ、怒、リ、其、不、義、チ、嗚、ラ、シ、兵、チ、率、テ、バ、ダ、



クシヤン、チ攻メ國王スルタン、チ罰シテ其城ヲ屠ル千八百二十年クンツース、ノ汗又バダクシヤン、チ侵暴シテ多ク其八民、チ驅リ去ル後又ア、フガニスマン王ドスト||マホメツト北征シテ之ニ逼ル然レ此時ハ、バダクシヤン王早ク降伏シテ其兵鋒ヲ避ケリ

バダクシヤン以西アムーダリヤ河左岸ノ土地ハ南ヒンドクシ山ヨリ、セリ、フ、ト稱スル、ブカラ、ノ一小城アル所ニ至ルマテ皆ア、フガニスマン、ノ領分トス其間ヒンドクシ山ノ北麓ニ傍フテ、クンツース、クルム、バルク、ノ諸城アリ地方亦各其城名ヲ以テ稱トス

クンツース、ハ舊ト一汗國タリシニ千八百五十九年ア、フガニスマン、ノ兼併スル所トナリシカ昨年復タ獨立セシトモ

クンツース

云フ其地方クンツース及ハナバツト兩河水ノ注ク所甚ダ卑濕ニシテ道路ハ往々木杭ヲ樹テ土ヲ盛テ之ヲ築ク土民其濕地ニ就テ米ヲ播キ稍乾キシ所ニ麥黍ノ類ヲ種ユト云フ

クンツース城ハ氣候ノ惡キヲ以テ著ハレ近隣中若シ死セント欲セハ、クンツース、ニ行クヘシトノ語アルニ至リ其住民凡ソ二千四百皆ウズベク、ナリ

此ヨリ南ヒンドクシ山ヲ踰ヘテ、カブル、ニ出ル路アリ之ヲ、キツシヤク或ハ、クシヤン越<sup>ズ</sup>千<sup>一</sup>尺<sup>万</sup>四<sup>ト</sup>稱シテ最モ近キ路トス然レ其路甚ダ險ナリ

クルム、ハ一<sup>ニ</sup>、タシ||クルガ<sup>ン</sup>、トモ稱ス、クルム河邊ニ在リ城下ノ住民八九千其地樹木善ク生シ家屋ハ概テ樹園中ニ

クルム



散布ス河ノ峡口ニ堡アリ、アフガニスタン、ノ兵之ヲ守ル  
古來アムーダリヤ河方面ノ、インド地方ト重モナル交通ノ  
路ハ、バルク、ヨリ此ニ至リ、グルム河ニ循フテ南ニ轉シ、パミ  
ヤン及カブル、ヲ經テ、インド河邊ニ出ツ千八百七十八年ロ  
シヤ、ノ、カブル、ニ派セン使節ストレイト、フ、ノ一行亦此路ニ  
由レリ

バルク

バルク、ハ上古有名ナリシ、バクトラ、ノ舊跡ニシテ漢ノ張騫  
ノ所謂大夏ノ都府ナリ、アラビヤ人ノ侵入以前ハ、ペルシヤ、  
コラサン州ノ一部ヲ成シ土民ハ皆佛教ヲ奉セシト云フ後  
マホメット宗ニ變シ中古以來其宗徒ノ巢窟トナリ之ヲ其  
教堂或ハ覆蓋イクスラ、ム、エリ、ト稱スルニ至ル其宗徒ノ保護ス  
ブカラ、ノ盛ナリシ時ハ、バルク亦其所領ナリシト雖モ後遂

マザルセ

ニ、アフガニスタン、ノ扼スル所トナリ今ハ其トルキスタン  
領地中最モ重要ナル所トス  
此處夏秋暑熱甚クシ氣候亦好ラス故ニ、アフガン人等其治  
府ヲ東ニ距ル五六里マザルニセリ、フ、ニ移シ居民亦多クハ  
移住シテ方今バルク城ノ住民ハ五六千ニ過キスト云フ  
マザルニセリ、フ、ハ舊ト、マホメット、ノ親族アリ、ノ墳墓ア  
ルヲ以テ著ハレシ一小村ナリシニ、アフガニスタン、ニ於テ  
其トルキスタン治府ヲ此ニ設ケシ以來一大城下トナリテ  
方今三萬許ノ住民アリ、アフガニスタン、ノ鎮將兵ヲ總ヘテ  
此ニ駐劄ス兵營及城壘ハ其西北ノ方ニ距ル小一里ノ所ニ  
在リ之ヲ、トプアブル、ト稱ス、アフガン人多クハ此ニ住ス其  
中ニ兵器局アリ銃砲刀劍ノ類ヲ製ス



ガルツ以西サ、トルクマン地方トス而シテ其東部ニ猶ウズ  
 ベク、ノ土著セシ、アクチア、シベルガン、シリアル、アンツカイ、  
 マイメチ等ノ數小部アリ舊ハ皆ブカラ、ノ威勢ニ服セリ然  
 此千八百三十四年代ア、フガニスタン王ヤル及ドスト||マ  
 ホメツト前後大ニ兵ヲ用ヒテ此地方ヲ略シ諸部盡ク其率  
 制スル所トナル其中マイメチ偏強ニシテ善ク防キ長ク其  
 獨立ヲ保チシモ千八百七十五年ニ至テ亦遂ニ、ア、フガニス  
 タン、ノ羈靡ニ就キ方今皆其藩屏ニ列ス  
 右ノ諸部各曠野中ノ沃土ニ據リ城郭ヲ構ヘ古來別ニ酋長  
 ヲ奉シテ分立ス其衆各二三萬人アリカイ、ハ舊ト以テ、  
 代シ、ア、フ、ト通商シ稍盛、ノン兵ト戰フテタリシニ七千八百三  
 イメチ稍大ニシテ遊牧民共ニ十萬餘ノ人員アリ其沃野ノ

マイメチ

メル、フ

長サ十一二里廣サ八九里城下ハ山上ニ在リ最後ア、フガン  
 兵ノ攻撃ニ因リ半ハ破壞ス住民二千四百其四方ニ十數  
 ノ村落散布ス  
 トルクマン地方  
 トルクマン地方中ヤバルク以南ヘラアムド以北トルクマン、ノ多  
 ク土著セシ所ハ、マイメチ以西メルハブ河邊ヲ以テ最トシ、  
 メル、フ、ヲ以テ其一大都城トス  
 メル、フ、ハ、メルハブ河ノ下流ニ在リ昔ハ別ニ一種ノ人民土  
 着シ耕作ハ勿論夙ニ養蠶紡績ノ業ヲ起シテ富饒ナル生計  
 ヲ保チ其昌盛世界ノ都ト稱スルニ至リシカ其富饒常ニ四  
 方姦雄ノ彙願スル所トナリ侵暴ノ禍ヲ蒙ル亦甚シカリ  
 ント云フ千七百年代ノ末フガラ王大舉シテ之ヲ侵シ四萬



餘ノ人民ヲ驅リ去ル此授ケメル、フテ人其始テ、ブカラ、ニ養蠶ノ業ニヲ  
 區別ヲ做シテ住居トス專爾來メル、フ大ニ衰微シテ復タ獨立  
 スル能ハス或ハ、キワ、ニ屬シ或ハ、ブカラ、ニ屬シテ暫ク兩國  
 ノ競争スル所タリシモ後竟ニ、トルクマン、ノ押嶺ニ歸シ昔  
 日ノ開化ハ、地ヲ拂フテ盡クルニ至レリ  
 方今メル、フ城ノ住民ハ三千内外アリ猶多クハ紡績ヲ以テ  
 業トシ又一種ノ毛氈ヲ製ス其氈緻密ニシテ聲價頗ル高シ、  
 トルクマン、ハ城外ニ分散シ專ラ耕牧ヲ以テ業トス  
 ムルハフ河ノ上流及ヘリルード河邊ニ沿フテ、トルクマン、  
 ソ、サリ、ソ、ソ、ロ、ル、ヤ、エ、ム、シ、ド、ノ諸部土著ス其中ペンヂエ  
 上及サラク、ス、等ノ諸村稍著ハル  
 サラク、ス、邊ヨリ、コベツダク、ト稱スル不毛ノ石山起リ遠ク

西北ニ綿亘ス其北麓ノ土地トルクマン沙漠ノ間長サ百二  
 三十里幅二三里ヨリ八九里ノ廣狹アル一帶ノ沃野ヲ成シ  
 山ヨリ多少ノ溪水奔流シテ其地ニ灌ク之ヲ、アハル或ハ、テ  
 ケ沃野ト稱シテ、トルクマン、テケ部衆ノ耕牧スル所トス其  
 根據チ、ゲチク、テベク、ト謂フ  
 ゲチク、テベク、アハル沃野ノ中央ニ在リ、カスピ海岸チ距  
 ル、七八十里一方ハ、コベツダク、ノ巖障ニ近シキ凡ソ五相  
 町他方ハ無邊ノ曠野ニ接シ土壁ヲ繞ラシ濠ヲ堀テ城郭ヲ  
 設ク住民四五千アリ半ハ土屋ヲ構ヘ半ハ氈幕ヲ張テ郭内  
 ニ住ス其土穀物果物ニ宜シクシテ近傍田園相連ナリ、トル  
 クマン曠野中メル、フ、ト相對シテ豐饒ナル所ト稱ス  
 住民ヲケ最モ慄悍ヲ以テ著ハル千八百七十九年ロヂヤ兵



カスピ海岸ヨリ來リ侵シ終日城ヲ攻撃セシト雖昨之ニ  
 克ツコ能ハスシテ退ケリ然昨午ニ至テ又大舉シテ來リ  
 攻メ遂ニ之ヲ陷ル爾來ロシヤ兵入テ此ニ據ル  
 余ブカラ、ニ滞在ノ時此決戰ノ報始テ達シ種々ノ評説ア  
 リシニ因リ之ヲ一權官ニ問ヒシニ此ハ、メル、フ、ヨリ傳ハ  
 リシモノニテ其大舉テケ大ニ敗レ其名將多ク死シ、ゲチ  
 ク||テハ、ハ盡ク、ロシヤ兵ノ毀ツ所トナリ、トルクマン、ノ  
 威勢全ク挫ケシトノ事タリ其事大ニ、ブカラ人ノ心ニ關  
 シテ上下之ヲ惜ムノ情感甚タ多カリシヲ見レリ、  
 コペツダク山ノ南面ヨリ出ル水ハ西南ニ流レ後稍大ナル  
 河ヲ成ス即チ、ロシヤ領及ベルシヤ領地ノ界タル、アツレク  
 河是ナリ此河ヨリ南ヒユルヘン河邊ニ連ナリ、ホクラン、デ

ヤハルハイ、アマバ、フ等ノ諸部土著セリ其中アツレク河以  
 南及カスピ海岸ニ居ル者ハ、ロシヤ、ニ屬シ餘ハ皆ベルシ  
 ヤ、ニ屬スルモノトス

キウ法基

キウ、ハ北アラル海ヲ抱キ他ノ三方大沙漠ニ接セシ、アム  
 ダリヤ河下流ノ沃野ニ居リ舊來コーカン、ブカラ、ト相對峙  
 シテ一方ニ雄視セシ國タリシニ近鄰ノ諸國漸々ロシヤ、ノ  
 羈縻ニ就キ孤立ノ勢自ラ保チ難キニ至ル千八百七十三年  
 キウ亦遂ニ、ロシヤ、ノ挫ク所トナリ國王自ラ、ロシヤ帝ヘ臣  
 ト稱シテ全ク其屬國ノ約束ニ就ケリ事次編ニ詳ナリ  
 方今國王猶汗號ヲ保テ國政ヲ行ヒ雜稅合シテ百五十六万  
 圓ノ歲入ヲ有シ四五千ノ兵ヲ備ヘテ其國ヲ護ス然昨其威



勢ノ衰ヘシハ左ノ一事ヲ以テ之ヲ知ルヘシ  
舊來キルギース、カラカルバク及トルクマン、ノ中キワ國王  
ニ臣服シテ其地ニ牧シ稅ヲ納ムル者都合十萬餘人アリ此  
人々既ニ、キワ國王ノ與ミシ易キヲ知リ各獨立セント欲シ  
テ數々王ノ命ニ抗ス王其制馭ニ苦シミ、ロシヤ兵ノ應援ニ  
頼テ僅ニ之ヲ羈縻ス

キワ或ハ、ヒワ、ハ、トルキ文字ニテ、ヒワク、ト書シ土人ハ自ラ、  
ウルゲンチ或ハ、カリズミ、ト稱スハ、ベリズミ或ハ、ハ、  
ナリ、其疆土チ二千六百四十餘方里岸此ノ内アム、  
屬ス額ニ人口チ六十五萬ト算フ其地平廣數箇ノ堀割アリ、ア  
ム、イダリヤ河ノ水之ニ入ル其大ナル者ハ河ノ如シ此ヨリ  
支渠分派シテ各地方ニ灌ク其開墾田園凡ソ四百餘方里南

物産

城下

方ノ土地最モ肥ヘテ人戸亦稠密ナリ

土地物産ノ大ナル者ハ小麥、米、棉、稗、胡麻ノ類ナリ果物ハ林  
檉、桃及甜瓜畜類ハ馬及大ナル赤毛ノ一峯駱駝ヲ以テ名産  
トス其外國ト通商ノ大略ハ、ロシヤ、ニ棉、綿絹布、牛皮ノ類ヲ  
輸出シ、駝ノ行季ヲ出ス、而シテ鍋、釜、鐵具、羅紗、砂糖ノ諸物  
品ヲ輸入ス又ペルシヤ、ニ絹布及胡麻ブカラ、ニ生絲、胡麻、林  
檉、牛皮ノ類ヲ出シテ絹布、烟草及種々ノ毛皮類ヲ輸入ス  
城邑ハ、キワ、ヘザラツト、ウルゲンチ、クンガラツド、ヲ以テ稍、  
大ナル者トス

キワ、ハ即チ、キワ汗國ノ首府ナリ人口二万餘アリ高サ一丈  
許ノ土壁之ヲ圍ミ中ニ土造ノ家屋列布シ間、煉瓦造リノ寺  
院、學校、商館、市場等ノ大屋立チ王宮亦別ニ一郭ヲ成シタル



光景へ他ノ諸城ト大同小異唯舊ハ大市場ノ傍ニ別ニ、キツ  
 ナク || カラワフン || サライ、ト稱スル奴隸市場アリ此ニ奴隸  
 ナ陣列シテ賣買セシト雖近近年之ヲ廢セシト云フ

ヨ	リ	チ	ニ	至	ル
タシケント	カザリンズク	チレンブルグ	百十一半里數		
全	ウエルヌイ	セミパラチンスク	五一八半車		
全	アルテン    エミル	クリツシヤリイ	四七六車		
クリツシヤ	マナス	ウルムチ	三四一車		
タシケント	ホツゼント	コーカン	一七〇		
コーカン	マスギル	ナマンガ	七二半車		
全	マルギラン	アンチシヤン	二二半車		
全	チシ車、グリチヤ、 イルケシタム	カンガル	四一車		
タシケント	デザク	サマルカンド	一二八		
			七七車		

里程表  
 止ル里  
 ト止ル里  
 スマ驛數  
 ル路ノ下  
 ラナリニ  
 ス又車ト  
 其地アル  
 餘名ノハ  
 ハ唯下ニシ  
 馬駝アヤ  
 通行ノハ  
 ノ、カ車馬  
 ラ道其ノ  
 ヲン處通  
 道ニス



サマルカンド	カテイ  クルガン車	ブカラ	六五
全	カラチユベ	シアール	二〇半
ヌシケント	チサツ車 タムデイ	キワ	一九〇
キワ	チエシマ サチシヤ	メルンフ	二〇〇
メルンフ	チャルツ  シユイ	ブカラ	一一五
ブカラ	カルシー	グザル	五一半
グザル	チエルメント、 デナ、ウ	ヒサル	五〇
ヒサル	ヘイザバツト ラブカ	クリヤブ	五四
クリヤブ	ルスダク	ヘイザバツト シヤク	五三半
ヘイザバツト シヤク	セバク	キラ  ビヤンヂシ	六五
キラ  ビヤンヂシ	ガス  クル湖	タシ  クルガンサルイ	八五
ヘイザバツト シヤク	ウラシヤル	バル  ビヤンヂシ	三四半

バル  ビヤンヂシ	タシ  クルガンシウダ	カラ  クル湖 フキ河口	七七半
ヘイザバツト シヤク	クンツース クルム	マザル  セリ、フ	九七
マザル  セリ、フ	シル  アバツド	グザル	七六
全	クルム バミヤン	カブル	一四二半
全	マイメチ ムルハブ  バラ	ヘラツド	一六六

右ハ、ロシヤ、ノ驛路表及コスチエンコ、ノ集メシ諸家ノ實地經歷又ハ土民ヨリ聞取ノ調書中ヨリ抜萃シ或ハ彼ヲ斷テ此ニ續キ又或ハ余ノ、ブカラ、ニ於テ質問ヒシ所ヲ加ヘテ製スル者トス其一地ヨリ他處ニ至ル一路里程ノ分數ニ至テハ九町以下ハ之ヲ省キ以上ハ凡テ之ヲ半里トシテ算セリ



雜 穀

物 産

凡ソ中アシヤ、ニ於テ耕種スル所ノ者ハ前ニモ畧記シタル  
 如ク各地方多少同シカラスト雖モ先ツ麥、米、稗、黍、胡麻、粟、粟  
 丹參、具染棉、麻、烟草、大小豆、苜蓿ルンユセノ類ヲ以テ一般田野ノ  
 産物トス

田野ハ各地灌溉ノ利善ク通シ溝渠ノ修繕掃除ヨリ各區分  
 配ノ水量ニ至ルマテ古來一定ノ制立チ土民之ヲ重シ且  
 嚴ニ其制ヲ守ルヲ以テ旱魃ノ患ナク又降雨稀ニシテ洪水  
 ノ害ナキニヨリ作物ノ收穫天時ニ關スル復々他邦ノ如ク  
 甚シキヲナシ凡ソ、ヌシケント及サマルガンド邊ニ於テ善  
 シ肥料ヲ用ユル田地ハ一タナブ三反ヨリ大小麥ハ五バツ  
 マン四反ハ百八、ハ三、十、米ハ六ヨリ八バツマン三反稗ハ三バツ



果

菜

マン胡麻ハ一バツマン罌粟ハ二バツマン、ノ收穫ヲ以テ常  
 トス  
 梨、林檎、桃、李、葡萄類ノ果物ハ各地皆善ク熟ス其中キワ、ノ林  
 檎ブカラ、ノ葡萄ヒシグシ、コイカン、ノ桃李ハ各其地方有名  
 ナル物産ニシテ李及葡萄ハ土地需用ノ外之ヲ乾カシテ諸  
 方ニ販賣シ最モ利アル商品トス故ニ、コイカン邊ニ於テハ  
 果園ヲ以テ上等ノ地トス  
 野菜物ハ葱、大根、蕪菁、胡椒、胡蘿蔔、黃瓜、東瓜、西瓜、甜瓜ノ類ナ  
 リ其中最モ利アルモノヲ甜瓜トス甜瓜ハ其培養ヲ善クス  
 レハ凡ソ一タナブ、ノ地面ヨリ五六千シマル地方カ或ハ一萬瓜  
 地カヲ出スト云フ若シ一瓜ノ價ヲ二錢トセハ、キハ、マ於テカ  
瓜ノ價許トスカ一タナブ或ハ凡ソ三反六畝ノ收穫百圓ヨリ

二百圓ノ價トナルノ比例アリ右ノ甜瓜ハ味甚タ美ニシテ  
 此地方ニ於テハ重要ナル食物トス土民ハ年中之ヲ貯フ天  
 ルニ吊

諸物産中最モ多ク外ニ輸出スルモノヲ棉、生絲及畜類トス  
 左ニ掲クル所ノ中アシヤ、ヨリ、ロシヤ、ニ輸入品價ノ比較表  
 ハ近年ノ物ニ非スト雖モ、ロシヤ、セヤ、ニ於テ、ラ之、チ審ニスル  
 ナニ由亦土地物産ノ一斑ヲ窺フニ足ルヘシ



竹園子家

Handwritten text in vertical columns, likely bleed-through from the reverse side of the page.

70







棉

方今中アジャ、ニ於テ製造スル所ノ棉ハ凡ソ三百万アード  
 一四、四百凡ニ達ス其内ブカラ二百万キワ五十万ロシヤ  
 領及他ノ小諸國ニ於テ其餘ノ五十万アード、チ製出スル比  
 例ヌリト云フ棉ハ、ロシヤ、ニ於テ經濟上大ニ關係アル物産  
 ナルニ因リシ千八百七十一年、エフロシヤ、ニ、境ヲカ、イ  
 ノ八百零二、五、千七百五十、九、百、三、タ、リ、シ、ト、見、ユ、  
 千八百零二、五、千七百五十、九、百、三、タ、リ、シ、ト、見、ユ、  
 七、十、五、錢、ソ、其政府特ニ中アジャ棉ニ注意シテ早ク其品質  
 ナ試験セシニ、キワ物産ヲ除クノ外絮織短クシテ上等ノ細  
 絲ヲ製スルニ適セス故ニ之ヲ以テ、アメリカ棉ニ代ルヲ得  
 ストノ事タリ、因テ、トルキスタン總督府ヨリ上等ノ、アメリ  
 カ棉種ヲ購求シテ試ニ之ヲ諸方ヘ植ヘシニ好結果ヲ得爾  
 來許多ノ種子ヲ土民ニ分與シテ之ヲ廣メ棉種改良ノ業大



生絲

ニ進ミシト云フ | 棉ノ價ハ、タシケント、ヨリ於六ルニ因リ半ニ至  
 養蠶ノ最モ盛ナルハ、ブカラ及コーカン地方ニテ、サマ  
 カンド、キワ之ニ次シ、ヌシケント、ナムケント地方ニ至テモ  
 其業行ハル然レ既ニ之ヲ以テ生計トスルニ至ラス凡生絲  
 ノ製造額ハ、ブカラ六萬キワ三萬ロシヤ領六萬五千アード都  
 合十五萬五千アード、ヲ製出スル計算タリ生絲ノ市價ハ、タシ  
 ロテ品ニ因リ輸出スル上等ノ品ハ百五十ルニ至リ、ヨリ百九  
 ル、トル  
 初メ、ロシヤ、ノ、トルキスタン道ヲ設クルニ當テ、ロシヤ商人  
 等養蠶ノ大利ヲ得ント欲シテ此地方ニ來リ製絲器械等ヲ  
 齎シ許多ノ資本ヲ投シテ其業ニ就ク者多カリシニ新領ノ

畜類

土地自ラ經濟上ノ變革ヲ致シ物價騰貴シ工匠ノ雇賃及運  
 送賃亦増シ營業ノ利損益相償ハスンテ前後皆破産シ政府  
 ノ保護ヲ仰ク者ニ至テモ亦之ヲ免カレサリシト云フ因テ  
 方今ロシヤ人ノ製絲場ハ一モ存スルモノナシ唯タシケン  
 ト、ニ官立ノ養蠶學校一アリ廣ク試驗場ヲ設ケテ其方法ヲ  
 研究ス是レ善良ノ工人ヲ教育シテ漸次ニ製絲等ノ改良ヲ  
 行フノ目的ナリ  
 牧畜ハ重モニ野民ノ業トスル所ナリ其物産ノ大ナルハ中  
 アシヤ曠漠ノ原野中凡ソ水草ノ逐フヘキ所野民ノ牧場ヲ  
 ラサルハナキ以テ推知スハキナリ土著農民亦多クハ牧畜  
 ナ兼ヌ其畜ハ則チ牛、羊、馬、駱駝、驢馬、山羊ノ類ナリ此畜類ノ  
 各地方ニ於ケル頭數ニ至テハ之ヲ知ルニ由ナシ然レ、ロシ



ヤ領内トルキスマン道五州ノ分ハ左ノ統計表アリ據テ其  
概略ヲ案スヘシ唯野民所有ノ財産調査ハ彼等常ニ危ンテ  
之ヲ秘スルニ因リ其實數ヲ得難クシテ統計常ニ少ナキニ  
失スト云フ

20/5



畜類統計表  
トルボスタ  
道總督府ノ調

畜類	セミレーチンク		シルダリヤ		セラフ、シヤン		ヘルガナ		アムーダリヤ		合計
	名	價	名	價	名	價	名	價	名	價	
駱駝	九七、四二二		二四二、一三〇		一、二五八		三八、二九四		一一、二六七		三九〇、三六一
馬	八九二、八〇七		三九五、五六三		五一、九九一		二二三、七六〇		四七、九九五		一、六〇二、一一六
牛	五二三、二二二		二九三、五三九		八四、四六三		二二〇、七一七		三八、〇七〇		一、一六〇、〇〇〇
羊	六、二九五、七六七		三、一八二、七六七		二八、三〇〇		一、二六〇、一三八		三二九、六〇六		二、三五一、二七八
駱駝	三、八九六、四八〇		九、六八五、二〇〇		五〇、三二〇		一、五三一、七六〇		四五〇、六八〇		一五、六一四、四四〇
馬	一七、八五六、一四〇		七、九一一、二六〇		一、〇三九、八二〇		四、二七五、二〇〇		九五九、九〇〇		三三、〇四二、三二〇
牛	七、八四八、三三〇		四、四〇三、〇八五		一、二六六、九四五		三、三一〇、七五五		五七一、〇五〇		一七、四〇〇、〇〇〇
羊	一八、八八七、三〇一		九、五四八、三〇一		八四九、〇〇〇		三、七八〇、四一四		九八八、八一八		三四、〇五三、八三四
合計	四八、四八八、二五一		三一、五四七、八六四		三、二六〇、〇八五		一二、八一八、一二九		二、九七〇、四四八		九九、〇三〇、七五九

70%



駱駝

駱駝ハ背上一峯アル者ト二峯アルモノトノ兩種アリ二峯  
駱駝ハ稍寒ニ堪ユ皆善ク飢渴ヲ忍ヒ重キ負フテ沙漠ヲ渡  
ル所謂沙漠ノ船是レナリ  
駱駝ノ性飲食物ヲ撰ハス凡ソ曠野ニ生スル草ハ大概皆之  
ヲ食ヒ亦鹹水ヲ飲ム故ニ之ヲ養フ甚々易シ其遊牧民生活  
ニ於テ必要ナル獸物タルハ彼等其肉ヲ食ヒ其乳ヲ飲ミ其  
皮ヲ用ヒテ器具トシ其毛ヲ以テ帳幕ノ毛氈敷物ヨリ衣物  
繩具ニ至ル迄一切之ヲ製スルニ由テ知ルヘシ又其沙漠跋  
渉ニ便ナルハ三日食ハス或ハ四日飲マスシテ行クヲ得  
ルニ在リ故ニ此地方ノ運送物ハ皆駱駝ノ背ニ由ル駱駝ノ  
擔量ハ其初生ノ年ヨリ少々、負ヒ習ハシメ漸次ニ之ヲ  
増シ三年ニ至テ四十四五貫目ノ重キヲ負ハシム五年ニ至



羊

二百四十四

リ全ク成長ノ年トシテ既ニ定量ノ行李ヲ負ハシム其量ヲ七十貫目ヨリ八十貫目マテトス此重量ヲ負ヒシ者ハ凡ソ一時間ニ一里二三町ヲ行ク然レ其行李ヲ減スルニ從テ稍々早クナリ概シテ十二三町マテノ歩行ヲ増ヌ又其善ク習ハシムル者ハ重サ二百二十三十貫目ヨリ二百五六十貫目マテノ輜車ヲ率ク

凡ソ駱駝ハ二十年ヲ以テ極盛ノ年トス此ヨリ漸々ニ衰フ唯、甚シキ困苦ヲ經サルモノ稀ニ四十ヨリ四十五年ノ生ヲ保ツト云フ一駱駝ノ價ハ、タシケント邊ニ於テ二三十圓ヨリ四五十圓ト爲ス他方之ニ準ス

羊ノ最モ多キ種類ハ身長大耳垂レ鼻曲リ尾太ク豐大ニシテ其尾重サ二貫四五百目ニ及フモノアリ或ハ漢人ノ所謂

馬

二百四十五

大尾羊行クトハ之ヲ車ニ載スルト傳フルモノ是レナラン其種類ニ又キルギースコイツクウズベククウコイベノ別アリ其キルギース羊ト稱スル者毛善ク肉柔ニシテ一般人ノ貴フ所ナリ土人羊ヲ、コイ、ト稱ス一頭ノ價一圓七八十錢ヨリ二圓五六十錢ニ至ル

馬ハ、トルクマン、ウズベク及キルギース等ノ數種アリ、トルクマン馬ハトモゾラマキ、アラビヤ種類コシテ高サ七八寸或ハ九寸ニ達シ脊梁正平項長フシテ高ク頭骨圓ク目大ク脚細ク尾根高クシテ其形甚ク美ナリ鞍亦甚ク平カニシテ厥ク、コナシ驪ケニ至テ最モ駛レ然レ力ヲ弱クシテ遠乗ニ堪ヘス又車用ニ適セス故ニ唯、富貴ナル者之ヲ養フ

ウズベク馬ハ、トルクマン馬ヨリ小サク且容貌ノ美亦之ニ



及ハス然ニカフ強フシテ平常ノ乗馬ニ宜シ  
 キルギース馬ハ高サ四五寸ニ上ラス身長ク腰曲リ項短ク  
 鬣多ク胸濶ク肉滿テテ容貌美ナラス然ニ脚輕ク力強フシ  
 テ舉動甚々活潑其艱苦ヲ忍ヒ遠乗ニ堪ユルニ至テハ他種  
 ノ馬能ク及フ所ニ非ス例ヘハ其長馬ヲ得ルキハ毎日二十  
 七八里ヲ旅行シ七日或ハ十日ヲ連ヌルモ其大ニ羸ル、チ  
 見ス又土人ノ一晝夜ヲ徹シテ七十六七里ヲ騎行セシ例尠  
 カラス野民等數百里ノ山河跋涉ヲ以テ意トセサルハ蓋シ  
 亦是等ノ善馬アルニ由レリ漢張騫ノ所謂大宛ノ汗血馬ト  
 ハ或ハトルクマン馬又或ハ此キルギース馬ノ祖先ヲ謂ヒ  
 シモノカ然ニ又別ニ、コイカン馬アリ  
 コイカン馬ハ、ウズベク及キルギース馬ノ雜種ナリカラ最

最モ強クシテ車ニ宜シ中アシヤ各地輜車ノ運搬ニハ大概  
 皆此馬ヲ用ユ  
 此他カラバイル、ト稱シテ、トルクマン及キルギース馬ノ雜  
 種アリ容貌稍美ニシテカラ亦強ク都府ノ住民等之ヲ賞用  
 シテ其價稍高シ  
 拔群善馬ノ價ハ定メ難シト雖ニ通例賣買スル所ノ者ハ凡  
 ヲ一頭五六圓ヨリ十五六圓内外タリ  
 牛ハ尋常中等ノ牛ニシテ其形異ナル者アルヲ見ス山羊及  
 驢馬亦然リ、ヘルガナ地方ノ山野ニ牧スル、カラギース、ハ此  
 諸畜ノ外亦長毛長角アル犛牛ヲ養フ



漢土諸史西域傳ノ參考

前文記スル所中アツヤ、ノ一半或ハ西トルキスタン、ハ古來漢人ノ所謂西域葱嶺以西ノ一部ナリ夫レ漢土ノ史家此地方ノ事ヲ傳フルヤ既ニ久シ唯其說太々簡短且古今人民ノ興廢ニ從ヒ土地ノ名稱亦大ニ變シテ其跡詳ニ考フ可ラサル者多シ然レ歷史上ノ關係甚々大ナルヲ以テ今試ミニ其大略ヲ案シ古今諸國ノ位置及地名ヲ比較スルヲ左ノ如シト通鑑ノ漢記ニ曰ク初メ張騫月氏ヨリ還リ具ニ天子ノ爲ニ西域諸國ノ風俗ヲ言フ大宛ハ漢ノ正西萬里ハカリニ在リ其俗土著シテ田ヲ耕ス善馬多シ馬汗血城郭室屋アルヲ中國ノ如シ其東北ハ則チ烏孫東ハ則チ于寘于寘ノ西ハ則チ水皆西ニ流レテ西海ニ注シ烏孫、康居、奄蔡、大月氏皆行國畜



ニ隨テ牧ヲ匈奴ト俗ヲ同フス大夏ハ大宛ノ西南ニ在リ大宛ト俗ヲ同フス臣大夏ニ在シ時邛竹杖蜀布ヲ見問フテ曰ク安クニ此ヲ得シヤ大夏國人曰ク吾買人身毒ニ往テ之ヲ市ヘリト身毒ハ大夏ノ東南數千里ハカリニ在リ其俗土著スルヲ大夏ト同シ竊テ以テ之ヲ度ルニ大夏ハ漢ヲ去ルヲ萬二千里漢ノ西南ニ居ル今身毒國又大夏ノ東南數千里ニ居テ蜀物アリ此其蜀ヲ去ルヲ遠カラス又漢書西域傳ニ曰ク玉門陽關ヨリ西域ニ出ルニ兩道アリ鄯善今ノ、ビヨリ南山ニ傍ヒ北河ニ波シカヒ西行シテ莎車今ノ、ドナルニ至ルチ南道トス南道西葱嶺ヲ踰レハ則チ大月氏安息ニ出ツ車師前王庭今ノ、トヨリ北山ニ隨ヒ河ニ波ヒ西行シテ疏勒今ノ、カニ至ルチ北道トス北道西葱嶺ヲ踰レハ則チ大宛、康居、奄蔡、焉

者ニ出ツト右ノ大略ニ據リ前後兩漢書ノ西域傳ヲ參考シテ諸國ノ跡ヲ搜索スルハ凡ソ北道ノ方大宛ハ今ノ、ヘルガナ地方ニ當リ其所謂別邑七十餘城トハ蓋シ、コーカン諸城或ハ其前此地方ニ在リシ城邑ヲ數ヘシモノナラン善馬汗血ノ傳ヘニ至テハ夫ノ、トルクマン馬或ハ、キルギース馬種ノ稍考フヘキ者アリ西海ノ、アラル海タルハ天山以西ノ水多クハ之ニ注キ且今ニ土人ノ大澤ヲ海ト稱スルニ由テ知ルヘシ烏孫ハ大宛ノ西北ニ在リ山ニ松栂多シト見ヘ且イシクル湖邊ウス孫人民ノ古傳猶存スルヲ以テ之ヲ今ノ、ロシヤ領内セミレ此州類多シイリ地方ニ當テ、可ナリ其西或ハ大宛ノ北千五百里許ニ康居ノ卑闐城



アリトニ據レハ康居ハ、セルダリヤ河ノ中流ヨリ、アラル海  
 岸ニ連ナリテ國セシ者カ其畜ニ隨テ移徙シ夏冬居所ヲ異  
 ニセシヲ以テ之ヲ觀レハ全ク方今ノ、キルギース全機ナル  
 遊牧民ヨリシ者ト知ルヘシ奄蔡ハ康居ノ西北二千里ハカ  
 リニ在リ大澤ニ臨ミテ崖ナシ蓋シ北海ト云フトアルニ據  
 レハ奄蔡ハ、カスピ海ノ北岸ヨリ、ウラル及ウチルガ河  
 邊ニ連ナリテ牧セシ者トセサルヲ得ス然ラサレハ西北ノ  
 地方數千里内復タ以テ北海ト稱スヘキノ大澤アルヲナシ  
 南道ノ方ハ凡葱嶺ノ西ニ烏秣、難兜等ノ諸國並列シ谿谷通  
 セス繩索ヲ以テ相引テ度ル所ノ縣度アリ等ノ事ヲ以テ之  
 ヲ案スレハ此諸國ハ方今アムールダリヤ河上流ノ、ウケカン、  
 バダクシヤン及カラテギン地方ニ當ルヘシ大月氏ハ媯水

ダアリヤノ北ニ都シテ王庭トストアルニ因リ諸家之ヲ、サマ  
 ルカンド、ニ當ツグ當時ノ、マ其一封彙駝ヲ出ストアルハ、キワ  
 地方ヲ指ス者ノ如シノ一峯駝ハ、キワ地方ノ名産タリ然  
 名産數百年前既ニ定名産トカスラサルハ、數十年前亦或ハ、アムール  
 リヤ河邊ハ、キワ地方マテ一面月氏ノ所領タリシモノカ大  
 夏ヲ、バルク當時ラバニ當テ身毒ヲ、インド、ニ當ツルハ其土  
 地風俗ノ稍徴スヘキモノアリ安息ハ當時ノ、バルク國方今  
 ノ、ベルシヤ、トス然レ其北康居ト接シ媯水ニ臨ムトアルニ  
 至テハ疑惑ナキ能ハス或ハ、キワ地方ハ月氏ニ屬セスシテ  
 安息ニ屬セシモノカ條支ハ國西海ニ臨ムトアリ都護班超  
 大秦抵條支臨大風三月乃得安息西海人謂有日海水廣此西海  
 ハ蓋シ地中海ニシテ條支ハ當時ノ、セルキード領方今トル



コ領ノ、エ、フ、ラ、ト河上流ノ地方ナリ其海西ニ在ル大秦國  
 或ハ鞏鞏トハ記スル所ノ風俗ヲ以テ之ヲ考フルニ石城ヲ以  
 スト食器亦然リ宮アリ常相去アルヲ各十里皆宮者皆水簡立  
 銀奇海多ニシ交市銀ヲ利十倍アリシ其銀十直金市ニ二價  
 常ニ賤云國蓋シ、ローマ帝國ヲ云ヒシモノナリ又屬賓國ハ  
 東烏秣ニ至リ西南烏弋山離ト接シ其地平カコシテ溫和ト  
 アリ然ルルハ屬賓ハ今ノ、ブカラ烏弋山離ハ、バルク或ハ、  
 フツド地方ニモ當ルヘシ此諸國ノ俗金銀ヲ以テ錢ト爲シ  
 文ヲ騎馬トシ幕ヲ人面トスト云フニ至テハ全ク、グレク  
 パクトリヤ風トセサルヲ得スノ上移住所タリシト云ク人  
 再ヒ案スルニ屬賓ハ象ヲ出ストノ事アリ又大唐西域記  
 中迦濕彌羅國ノ註ニ舊曰屬賓訛也北印度境トノ事見ヘ

シニ因リ或ハ屬賓ハ遠ク東ニ離レテ、インドノ北部ニ在  
 リ烏弋山離ハ、カンダハル邊ニモ居リシモノカ然ル時ハ  
 漢書ノ所謂烏弋山離ニ至テ南道極マリ北ニ轉シテ東セ  
 ハ實ハカラス安息ヲ得ル者稍考フヘシ  
 南北朝時代ノ西域記傳ハ解シ難キ者多シ北史ヲ案スルニ  
 初メ魏董璠等ヲ遣シテ西域ノ諸國ヲ招撫セシム璠等京師  
 ニ還ヘリ具ニ經見及傳聞スル所ノ傍國ヲ言ヘリ曰ク西域  
 漢武ノ時ヨリ五十餘國後稍相併セ太延中ニ至テ十六國ト  
 ナル其地ヲ分ケテ四域トス葱嶺以東流沙以西ヲ一域トス  
 葱嶺以西海曲以東ヲ一域トス者舌居國以南月氏以北ヲ一  
 域トス阿海ノ間水澤以南ヲ一域トス内諸渠長蓋シ百ヲ以  
 テ數フトノ簡短ナル説アリ其中第一域ハ今ノ東トルキス



マン或ハ清國新疆ノ天山南路ヲルヤ明カナリ然レ其餘ハ  
 全ク考フヘカラス若シ其所謂海曲トハ地中海ヲ指シタル  
 者トセハ兩海トハ此ト黒海トヲ謂ヒ水澤トハ、アラル或ハ、  
 カスビ一海ヲ謂ヒシ者カ北史ニ就テ其辨解ヲ求ムルニ由  
 ナシ又其葱嶺外ノ諸國ヲ記スルニ至テハ大宛ヲ洛那國ト  
 シ康居ヲ康國トシ奄蔡ヲ粟特國トシ烏秣ヲ權於摩國トス  
 ル類ニテ其名ハ稍變セシト雖レ別ニ新聞ノ加ハリシヲ見  
 ス其葱嶺ノ北ニ在ル漕國ヲ漢時ノ罽賓國トシテ又別ニ罽  
 賓國ヲ説キ波斯ハ古ノ條支國トシテ又別ニ安息條支ヲ記  
 スルカ如キハ右ノ諸國當時猶並ヒ存セシモノカ語其沿革  
 ニ及ハス唯、稍考フヘキ者ハ烏孫蠕々ノ侵ス所トナリテ西  
 葱嶺山中ニ徙リ康國北方ニ勃起シテ諸部多クハ之ニ歸附

シ月氏南ニ進ンテ、インドノ北部ヲ押領シ此地方ノ形勢一  
 變セシ大略トス  
 隋書吐火羅悒怛ヲ記ス然レ其地詳ナラス唐書稍之ヲ明カ  
 ニス曰ク吐火羅悒怛ト雜處シ葱嶺ノ西烏澹河ノ南古大夏  
 ノ地ニ居ルト然ルルハ吐火羅悒怛亦ハルシ地方ニ居リシ  
 モノト見ユ

唐書又康、安、曹、石、米、何、火、尋、戊、地、史ノ九國ヲ昭武氏ノ枝葉分  
 王トシ昭武國ノ傳ニ曰ク其王本姓温月氏人也蓋居祁連  
 山北昭武城國被匈奴所破西徙葱嶺逕有其國交廣各  
昭武爲姓亦不忘本也並以其中康チ一ニ薩末鞬亦颯秣建北  
 昭武爲姓亦不忘本也  
 萬斤悉ト曰ヒ那密水ノ南ニ在リ安チ布豁亦捕喝ト曰ヒ烏澹  
 河ニ瀕ス火尋チ貨利習彌或ハ過利ト曰ヒ烏澹水ノ陽ニ在  
 リ西南波斯ニ接ストス又其旁行書チ習ヒ商賈チ善クシ丈



夫年二十傍國ニ去リ利ノ在ル所至ラサルナシ等ノ習俗ヲ  
 記スルニ至テハ稍、マツシク||サルト、ノ概アリ因テ其那密  
 水トハ方今ノ、セラ、フシヤン河薩末鞑トハ、サマルカンド布  
 豁トハ、ブカラ貨利習爾トハ、カリズミノキワノ事ヌルヲ知ル  
 ヘシ

元此地方ヲ兼并シ蒙古語音ヲ以テ地名ヲ書セシ以來漢人  
 ノ舊稱一變シテ其沿革復々詳ナラス明史撒馬兒罕ヲ以テ  
 漢ノ屬賓隋ノ漕國ノ地トシ又五十三王アリトシテ三十餘  
 國ヲ記ス其記スル所多クハ、マシケント以東ノ諸城ト見ユ  
 ルモ其地名及位置方向ニ至テハ半ハ考フヘカラス之ヲ諸  
 史西域傳參考ノ大畧トス

中アシヤ紀事第一編終

中アシヤ紀事第二編卷之一

中アシヤ沿革

中アシヤ、ハ古來四方ノ豪族交、押領シテ治世ノ變遷最モ多  
 カリシ所ナリ至地方ノ事ハ詳カナラスト雖正上古東南ノ  
 大半ハ、ベルシヤ、ニ屬シ後アレクサンドル||マセドニー、ノ  
 略スル所トナリ、ヤクサルト河<sup>今ノ、シル</sup>ノ左岸ニ、アレクサ  
 ンドリヤ府立テ<sup>今ノ、ホ</sup>マラカンダ<sup>今ノ、サ</sup>マ<sup>今ノ、カ</sup>ノ都府ハ  
 クトラ<sup>府</sup>バ<sup>今ノ、バ</sup>リ<sup>ノ、バ</sup>ル<sup>ノ、バ</sup>ク<sup>ノ、バ</sup>ノ都<sup>ノ、バ</sup>等久ク有名ナル城下ナリシ西曆前  
 凡ソ百年代ニ、ユエチ<sup>即、フ</sup>タ<sup>月</sup>氏<sup>ナ</sup>アリ<sup>後</sup>ビ<sup>ザ</sup>人<sup>ハ</sup>チ<sup>ハ</sup>、<sup>ヘ</sup>ヤ<sup>テ</sup>ハ<sup>之</sup>、<sup>ト</sup>  
 稱<sup>ユ</sup>シ<sup>東</sup>方<sup>ヨ</sup>リ<sup>徙</sup>リ<sup>來</sup>リ、<sup>チ</sup>ク<sup>ス</sup>ダ<sup>リ</sup>ム<sup>ヤ</sup>及<sup>ヤ</sup>ク<sup>サ</sup>ルト<sup>兩</sup>河  
 ノ間ニ住セシ同族ノ、マサヘー<sup>ト</sup>、ト共ニ此地方ヲ略シテ君  
 長トナル<sup>漢</sup>移<sup>西</sup>徙<sup>城</sup>傳<sup>奴</sup>ニ<sup>曰</sup>俗<sup>ヲ</sup>大<sup>同</sup>フ<sup>氏</sup>ス<sup>ハ</sup>本<sup>弦</sup>十<sup>行</sup>餘<sup>万</sup>ナ<sup>リ</sup>故<sup>ニ</sup>密<sup>共</sup>ニ<sup>強</sup>隨



于ニ特至リテ月氏奴ヲ攻テ之ヲ殺シ其頭ヲ以テ居レリ  
 氏乃クチ去リテ大宛今ノ水ノ西方大宛今ノ部  
 シテ王庭トス其餘ト小君長ナル者南山羌チ保テ弱  
 月氏ト稱ス大宛ト小君長ナル者南山羌チ保テ弱  
 徙ク來テ之ヲ臣ル故ト月氏其後ノ事暫ク詳ナラス北史チ案  
 スルニ大月氏國ハ臙監氏ニ都ス城弗敵ノ西ニ在リ北蠕々  
 ト接シ數其侵ス所トナリ遂ニ西ニ徙テ薄羅城ニ都スト又  
 隋書チ案スルニ曰ク突厥木杆勇ニシテ智多シ遂ニ茹々  
 ノ蠕々チ繫テ之ヲ滅シ西掘但チ破リ東契丹チ走ラシ北方ノ  
 戒狄悉ク之ニ歸スト或ハ右ノ諸豪酋亦交入テ君長タリシ  
 モノカ  
 西曆六百七十年代ニ至テ、アラビヤ、ノ名將クチエイバ、マホ  
 ムツト宗旗チ掲ケテ北征シ遂ニ、マ、ウヘレンチナルヤラハビ

當時チナクガスルハ、アセムリ因テア史家此チ以テ地方今ノ總  
 コレニカン等ガルニ地方ノ總稱ト云フ然レ後世チ加  
 著多シ此編亦チ平定シテ、マホメツト宗教チ弘ム此チマ  
 民トハ佛教或チハ、ゾセリア  
 八百六十七十年ノ頃ヨリ九百年代マテハ、ベルシヤ、サマニ氏  
 ノ一統ニ歸シテ各地農商業大ニ起リ此地方未曾有ノ盛世  
 ヲリ當時チ土人ノ息遂ク於テ多クサマニハ近世ノ銀錢チ及  
 スアル以テエトス、ア、此間アラビ、ア、今ノキニハ文名チ大ニ  
 出ス然ルニ九百年代ノ末カルルウクハトルキ種イ族ノ一部  
 トイセリク、東方ヨリ來リ侵シ遂ニ、サマニ氏チ滅シテ自立ス  
 カル、ルウク、サマルカンド、ニ據テ、マ、ウヘレンチナルチ領ス  
 ル、百餘年後セリチウ、キード及サンチヤル交、起リ俱ニ勢



威ヲ争フテ之ニ逼ル千百三十六七年ノ頃カラキタイ丹黑契  
 又東方ヨリ來リ侵ス、カル、ルウク救テ、サンヂヤル、コ求ム、サ  
 ンヂヤル、ノ酋長十萬ノ兵ヲ率テ之ニ赴キ、サマルカンド邊  
 ニ於テ與ニ戰ヒ大ニ敗レテ、バルク、ニ奔ル是ニ於テ、マ、ウヘ  
 レンナガル又カラキタイ、ノ押領スル所トナル  
 此時カリズミ、ハ獨立シ、ベルシヤ、ノ大半ヲ并セテ盛大ナル  
 國ヲ成セリ後ムハメツド||カリズミシヤ、ノ時ニ至テ遂ニ、  
 カラキタイ、ヲ撃テ之ヲ平ク然レ幾ハクモナクシテ亦蒙古  
 ノ畧スル所トナル  
 千二百十四年元ノ太祖チンギス汗ノ大軍破竹ノ勢ニ乗シ  
 テ至リ盡ク此地方ヲ蕩平ス爾來諸部酋長ノ權皆チンギス  
 一族ニ移リ中アシヤ全部ヲヤガタイ或ハ、ツアガタイ台察哈

ノ管轄ニ歸シテ莫大ナル蒙古一統ノ國成ル  
 チヤガタイ、ノ子孫數世相繼キ或ハ、サガタイ、ノ治所詳ナラス  
 或ハ、カシガル、トモト曰フ又千三百年ノ末ニ至テ有名ナル英主マ  
 メルラン一ニ、稱ス出テ、ベルシヤ及インド、ヲ略シテ大ニ其  
 疆土ヲ廣メ都ヲ、サマルカンド、ニ建テ此ヨリ號令ヲ四方ニ  
 傳ヘテ其威勢太々熾ナリシ  
 マメルラン、ノ死後千四百年代ノ半ハ頃ヨリ内亂起リ同族  
 相鬪キ應援ヲ、ウズベク、ニ求ムル者アルニ至ル  
 ウズベク、ハ、トルキ、ノ一族ナリ此時アラル海岸ヨリ、シルダ  
 リヤ及ウラル河邊ニ連ナリテ牧シ其酋長アブル||ハイル  
 汗盡ク近鄰ノ同族ヲ并セテ大ニ威勢アリ然レ猶未マ、マ、ウ  
 ヘレンナガル、ヲ窺ハ、ス其孫セイバニ汗ノ時ニ至テ、マメル



ラン一族ノ争ヒ益甚シ、セイバニ乃チ先ツ、ヘルカナ、チ襲フ  
テ之ヲ取り率ヘルカナ、奔リ、領主バベル、入テ又一國ヲ成ス其衆ヲ  
大モゴク五百年進ンテ、サマルカンド、チ略シ遂ニ全マ、ウレ  
ンナガル、チ押領シテ新ニ、セイバニ家一統ノ國ヲ建ツ是ニ  
於テ各地方ウズベク跋扈ノ勢ヒ成ルヲ略イセバニ又欲シルシヤ、  
イニ過リ千五百十年其王死シヤ、  
セイバニ汗ノ後ウズベク領主中最モ英名ヲ以テ著ハレシ  
者チ、アブドラク汗トス千五百八十三年アブドラク汗位ニ  
即ク此時カリズミ既ニ分立シ、ヘルガナ亦カイサク、キルギ  
諸部ノ據ル所トナル、アブドラク汗前後兵ヲ用ヒテ盡ク之  
チ蕩平シ且バダクシヤン及コラサン西部ノ土地ヲ畧シテ、  
セイバニ、ノ遺業ヲ擴メ又精ヲ勵マシテ治ヲ圖リ大ニ功德

チ立ツイアブサトラクバ汗(井屋)等今ニ係ル、カラワンニ存ス  
アブドラク、ノ子アブドルム、イミン死スルニ及テ其系統  
絶ヘ新領主更立ノ際國內多事ナリ初メ、セイバニ家ノ元祖  
インギス、ノ長子、アブドチ、ノ後裔ト數ヘリ傳テ、アブド  
ドク更ニ、チ妹ナギス、偶別家シテ後裔位ニ即カシホム  
ノカ系統ト稱元祖ト現ス今、ベルシヤ其機會ニ乘シテ、コ  
部ノ土地ヲ恢復シ、カイサク諸豪酋亦タシケント地方ニ據  
リ千六百年代ノ半ハ頃ニハ、マ、ウヘレンナガル遂ニ、ブ  
ナ此頃テヨリ、ブカス、キワ、コ、イカン三汗國ノ分立ニ歸ス  
千七百年代ベルシヤ王ナタル、キワ及ブカラ、チ侵シテ、ア  
イダリヤ河左岸ノ土地ヲ畧ス、バルク亦其扼スル所ト爲ル  
而シテ諸汗國或ハ互ニ相攻伐シ或ハ各其近鄰トルクマン



及キルギース諸部ト兵ヲ搆ヘテ争鬪斷ヘス  
千八百年代ニ至テ、ブカラ王ナスルルウル大ニ、バルク恢  
復ヲ以テ事トス起シ且之ヲ恢復フセシト雖ガニクニスタ  
ズル所コイカン王モハメツドアリ亦頻リニ近鄰ヲ畧シ  
テ疆土ヲ廣ム千八百三十八九年ヨリ、コイカン及ブカラ、ノ  
戦争復タ始マル、ブカラ王ナスルルウル遂ニ、コイカン、ヲ  
破テ其王モハメツドアリ、ヲ斬ルフ元之ヲ以テ救軍亡コ  
イカン國民更ニ、シルアリ、ヲ奉シテ王トシ猶ブカラ、ニ抗  
ス是ヨリ兩國ノ兵燹連結シテ解ケス而シテ、ロシヤ兵遂ニ、  
コイカン、ニ逼ル

ペイトル  
南侵ヲ圖ル

中アシヤ紀事第二編卷之二

ロシヤ南侵畧記上

ロシヤ、ノ中アシヤ、ニ於ケルヤ舊來通商ノ線アリ時ニ其疎  
音ヲ得ルコアリシト雖モ第一世ペイトル帝ノ時ニ至ルマ  
テハ其地方ノ事猶未ダ詳ナラサリシカ初メ、ペイトル軍用  
ノ不足ヲ憂ヘ且既ニ志ヲ南方ニ逞ラスルヲ得ス黒海及ア  
ヅ、フ海ハ遂ニ復タ、トルコ、ニ讓ラサルヲ得サリシ以來思ヒ  
チ東南ニ運ラシ、カス、ピ、海ニ由テ利チ東方ニ需メント欲  
シテ中アシヤ及イント地方ノ事ニ心ヲ留メ居シニ千七百  
十三年一ノ、トルクマン、ホツシヤ、ヲ、フ、エ、ス、ト云フ者至リ、  
アム、ダリヤ河口大ニ沙金ニ富メルヲ傳ヘ且曰ク若シ、ロ  
シヤ之ヲ得ント欲セハ我一族トルクマン、ノ助力ニ依テ容



易ニ其地方ヲ収ムヘシ、アムイダリヤ河ハ舊ト、カスピ海  
 ニ注キシニ此地方ヲ領スル、ウズベク、ロシヤ、チ畏レ其河身  
 ナ塞テ水流ヲ他方ニ轉セリ然レモ今其障堤ヲ決シテ之ヲ  
 舊流ニ復ヘスハ難キニ非スト又此頃シベリヤ鎮將ガガ  
 リン零、之ト相似タルヲ奏セリ曰ク小ブカラ東ト、ノルキス  
 ノ内ダリヤ河邊ノ、エルケン、ニ莫大ナル沙金アリトダリヤ、  
 ルキ語ニテ河ノ、義ナルニ當時、地理、明シト云フ、ペ  
 トル語ニテ河ノ、義ナルニ當時、地理、明シト云フ、ペ  
 是ニ於テ遂ニ意ヲ遠征ニ決シ千七百十四年探討ノ兵ヲ兩  
 道ヨリ出ス其一ハ陸軍中尉チエル、カスキー||ベコーウヒ  
 ナ連姓ヲナリ以下ニ任シテ、カスピ海ヨリ、キワ、ニ向ハシメ  
 一ハ大尉ブ、フゴリツ、ニ任シテ、シベリヤ、ヨリ小ブカラ、ニ  
 向ハシム

ペートル帝ベコーウヒチ、チ派スルニ因リ千七百十四年  
 五月廿九日セナート當時行政官ニ令セシ文中ニ使節チ、  
 キワ、ニ遣シテ國王ノ即位ヲ賀セシメ夫ヨリ、ブカラ、ニ遣  
 リ彼地ノ商況ヲ觀察セシムヘシ然レモ最モ緊要トスヘキ  
 ハ、エルケン城下ニシテ右ハ、カスピ海ヨリ何程ノ距離  
 ニ在リ又其近傍ニ、カスピ海ニ注ク河アルヤ否等ヲ委  
 シク穿鑿セシムヘシトノ語アリ  
 帝又別ニ親ラ訓狀ヲ裁シテ使命奉行ノ策ヲ授ケ又カザ  
 ン鎮將サルテコー、フ、ニ命シテ、ベコーウヒチ、ニ兵千五百  
 銀五千ルーブル、ヲ與ヘ且他日ベコーウヒチ、ノ請求スル  
 コアル時ハ速ニ之ニ應セシメタリ  
 同年ベコーウヒチ、アスマラカン、ヨリ船ニ搭シ兵ヲ率ヒテ、



カスピ海ニ出ツ然ルニ時既ニ冬季ニ際シ船流氷ニ妨ケ  
 ラレテ進ムヲ得サリシニヨリ兵ヲ回ヘシ其翌千七百十  
 五年再ヒ海ニ航シテ、チユブ||カラガン岬ニ至リ土民トル  
 クマン、ニ就テ、アムイダリヤ河ノ舊流及障堤等ノ事ヲ問ヒ  
 シニ其答フル所畧、チ、フエス、ノ説ト同シ因テ其實ヲ證スル  
 爲メ、チ、フエス、ニ、ロシヤ人二名ヲ附シ其處ニ就テ之ヲ視セ  
 シム

此一行東北ニ向テ進ミ駱駝路十七日ヲ經八一日ノ内駱駝路トス  
 土堤長行シ其後ニ一條ノ壕アル所ニ達ス、トルクマン曰ク  
 是レ即チ、アムイダリヤ河ノ舊流ナリト其壕ニ傍フテ行ク  
 一猶三日兩側ニ村落溝渠ノ遺址アルヲ見ル、チ、フエス曰ク  
 此壕ハ遠ク、カスピ海ニ連ナレリ然レ前途盜賊多シ行ク

ヘカラスト、ロシヤ人此ニ至テ其虚言ナラサルヲ信シ一同  
 引返ヘシテ之ヲ、ベコウヒチ、ニ報ス

ベコウヒチ此報告ヲ以テ、アスタラカン、ニ歸リ、ペートル  
 帝ニ、リバワ、ニ講シテ貝サニ事ノ始末ヲ奏セシニ帝大ニ之  
 チ嘉ミシ、ベコウヒチ、ヲ賞シテ大尉ニ進メ新ニ左ノ訓令  
 チ與ヘテ再發セシム

- 一 アムイダリヤ河舊流ノ近傍ニ凡ソ一千ノ兵ヲ容ル  
 ヘキ野堡ヲ構ユル事
- 一 詳ニ、アムイダリヤ、ノ舊河道ヲ巡視シ若シ成ルヘク  
 ハ之ニ本流ノ水ヲ注シ事
- 一 右ノ河邊ニ就キ、キワ人ノ知ラサル様密カニ一村ヲ  
 設クル事



一 キワ、ニ赴テ國王汗ニ説キ其繼統ヲ永久ニ傳フルヲ  
 ヲ約シテ、ロシヤ、ニ臣服セシメ且之ヲ勸ムルニ我親  
 兵ヲ備ヘ置クヲ以テスヘシ唯汗ヲシテ自ラ其費用  
 ヲ辨スルヲ承諾セシムル事

一 キワ、ニ於テ事定マリシ後ハ沙金場點檢ノ爲メ汗ニ  
 請フテ土人ヲ出サシメ其中ニ、ロシヤ人二名ヲ加ヘ、  
 ダリヤ、ニ溯テ、エルケン、ニ至ラシムヘシ

一 汗ノ助力ニ因リ商人ヲ、インド、ニ派シ之ニ命シテ具  
 サニ行路ヲ記セシメ且カスビ一海ヨリ、インド、ニ通  
 スルニ最モ近クシテ便利ナル路ヲ探索セシムル事

一 キワ、ヨリ、ブカラ、ニ赴キ其國王ニ説ヒテ、ロシヤ、ニ臣  
 服セシムルヲ要ス若シ其議諧ハサレハ之ト親睦ヲ

厚フスルヲ務ムヘシ彼王常ニ其臣民制馭ノカラ足  
 ラサルヲ憂ルト云フ故ニ、キワ、ト同ク我親兵ヲ備ル  
 ヲ勸ムヘシ

此ノ爲ニ歩兵四千カザク騎兵二千近衛騎兵一百ヲ、ベコ  
 ーウヒチ、ニ與ヘ又海軍少尉コーション、ヲ附シテ其水路ニ  
 由テ、インド、ニ派スル使者ニ充テシム此費用ハ總ア、カザ  
 出、ニ其高ニ十萬云フ

ベコーウヒチ更ニ遠征ノ軍備ヲ整ヘ千七百十六年九月ア  
 スタラカン、ヲ發シテ前年上陸ノ、チユブ||カラガン脚ニ航  
 シ此ヨリ使者ヲ、キワ及ブカラ、ニ分遣シ此ニ兵一聯隊ヲ駐  
 メテ堡ヲ築カシメ自ラ餘兵ヲ率井再ヒ海ニ航シテ、カラス  
 ノ、ウチツ、スツ灣ニ至リ其岸ニ就テ又一堡ヲ構フ然ルニ其



翌年ニ至テ、キワ、ロシヤ兵ヲ遊撃セシト欲シテ大ニ兵ヲ集ムルノ警報諸方ヨリ至リ且前ニ、キワ、ニ派セシ使者モ其地ニ禁錮セラレシ狀ヲ具シテ、キワ兵將ニ出陣セントスルヲ報ス因テ、ベコーウヒナ急ニ、アスマラカン、ニ赴キ新ニ兵ヲ集メ遠征隊ヲ整ヘテ、グリエン、ニ直航シ此ヨリ援兵ヲ分派シテ新築ノ諸堡ヲ警備シベコーウヒナ、雖モ彼等利ヲクマリ、ヲ招致シテ欲セシテ中立ヲ持フシ其千七百十七年六月ノ初メ遂ニ、キワ、ニ向テ出陣ス

初メ、ベコーウヒナ水草ノ利ニ就キ路ヲ、キワ、カラワシノ右ニ取り行ク一八日ニシテ、エムバ河ニ達シ夫ヨリ二日ニシテ、カラワシ道ニ出テ此ニ由テ進ム一又五日ニシテ、ウスチ||ウルトチカ隔テシ、高起ナル兩原ニ出ツ後其路アラル海

ノ西岸ヲ繞リ至ル所石原或ハ砂漠ニシテ兵士共ニ多少ノ艱苦ヲ嘗メ七週間ノ行軍凡ソ二百五十四五里ノ路ヲ經過シテ遂ニ、カラガナ、ト稱スル牧場ニ達シ此ニ野營ヲ設ケ暫ク兵ヲ休息セシメテ、キワ、ノ動靜ヲ伺フ此ヨリ、キワ、チ距ル此計ニ一岩セリ

ベコーウヒナ未ダ此處ニ達セサル前數日新ニ使者ヲ、キワ、ニ遣ハシテ告ルニ此舉ノ主意本ト和親ニ在ルヲ以テセシム、キワ國王大ニ怒リ其使者ヲ捕ヘ直ニ兵ヲ發シテ之ヲ遊撃セシメ尋テ自ラ出陣ス此ニ至テ其兵ベコーウヒナ、チ、カラガナ、ニ襲フ兩軍相戦フ一ニ日キワ兵屢敗ヲ取ル、キワ王野戰ノ利ナキヲ見テ詐術ヲ設ケ使テ遣シテ、ベコーウヒナ、ニ言ハシメテ曰ク我兵命ヲ奉ヒスニ事此ニ至ル我甚ダ



之ヲ惜ム我ハ本ト貴國ト和親ヲ保ダント欲スル者ナリ君  
 疑フヲ勿レト、ベコーウヒチ之ヲ信シテ戰爭忽チ和議ニ變  
 シ遂ニ假條約ヲ結ヒ王及ベコーウヒチ互ニ其陣營ヲ訪フ  
 ニ至ル護衛兵七百餘人ヲ從ヘ初ノ陣地ニ赴キ時ハ其親近及  
遣ナ（經文）ヲ接吻シ和親條約盛ヲ破ナルヲ察アリシト云フ  
 王乃チ其兵ヲ率テ前發シ、ベコーウヒチヲ導ヒテ其都城キ  
 ワ、ニ赴ク行ク一日ポルスンクン河畔ニ此ニ程キ、ニ至テ  
 止リ、ベコーウヒチ、ニ請フテ曰ク貴國ノ兵ヲ旅宿ニ分配ス  
 ルノ便チ圖リ宜ク之ヲ數部ニ分ツヘシト、ベコーウヒチ其  
 異志アルヲ覺ラスシテ之ニ從ヒ總軍ヲ五部ニ分ツ是ニ於  
 テ、キワ、ノ官吏各其一部ヲ諸方ニ誘ヒ去ル而シテ其相距ル  
 稍遠キニ及ンテ、キワ兵忽チ起リ一齊掩撃シテ、ベコーウヒ

チ、チ始メトシテ盡ク、ロシヤ兵ヲ殺ス

トルクマン等ベコーウヒチ、ノ全軍覆没セシト聞キ爭フテ  
 其新ニ構ヘシ、カスピ海沿岸ノ諸城ヲ圍ム城中救援至ラ  
 ス糧食缺乏死亡甚々多シ因テ鎮守長官等各其城ヲ毀テ殘  
 兵ヲ率井圍ヲ突テ退ク其中カラスノ、ウチツ、スリ、ヲ保チシ  
 殘兵ハ船ニ飛乘リシニ海上大風ニ遇ヒ諸方ニ漂泊シテ途  
 中多クハ窮死シ、アスマラカン、ニ歸ルヲ得シ者僅ニ數人ノミ  
 前ニ、インド、ノ使者ニ充テラレシ海軍少尉コーシン、ハ、ベ  
 コーウヒチ、ト合ハス後爭論ヲ生シテ自ラ去ル因テ、ベ  
 トル之ヲ軍法裁判ニ付シテ罪ニ處シ更ニ、ベコーウヒチ、  
 ニ命シテ後任ノ人ヲ撰ハシム、ベコーウヒチ其親近ヲ、ウ  
 ケレーフ、ニ命シ、カスピ海ヨリ、シエマク、ニ至リ、イスバ



シベリヤ  
道進軍

ハン、ヲ經テ、インド、ニ赴カシメリ然ルニ此使者海上暴風ニ遇フテ、アストラバツド、ニ漂流シ此處ニ於テ、ベルシヤ地方官ノ捕フル所トナル後テヘラン駐節ノ、ロシヤ公使之ヲ贖フテ始テ本國ニ歸ヘスヲ得タリ之ヲ、ペートル、インド路討究ノ始末トス

シベリヤ道ノ遠征隊長陸軍大尉フゴリツ、ニハ大要左ノ訓令ヲ與ヘタリ

一 ヤムイセ、フ湖ライルテシク、河ノ右岸ニ在リ、北岸ニ在リ、巴ノ岸ニ城ヲ築ヒテ此ニ冬ヲ經過シ來春進ンテ、エルゲン、ニ向ヒ其城ヲ押領スル事

一 エルゲン、ヲ押領セシ後ハ其守備ヲ固フシテ左ノ事ヲ討究スヘシ

ダリヤ河中如何シテ金ヲ探ルヤ且此河水ハ何處ニ注クヤ

右討究ノ爲メ當時虜トナリテ、シベリヤ、ノ、ドボリスク、ニ在リシ、ス、ウエデン士官中ヨリ礦山學ニ達スル者若干名ヲ撰ンテ、隨行セシム

フゴリツ右ノ委任ヲ受ケ千七百十五年十一月トボリスク、ニ抵リテ出陣ノ準備ヲ爲ス其翌年七月ノ始ニ至テ事纔ニ整フ因テ三千ノ兵ヲ率井舟筏ニ乗シテ、イルテシ河ニ溯リ、メラ、ニ至テ別路出發ノ騎兵ト合シ十月一日ヤムイセ、フ湖邊ニ上陸シテ直ニ築城ニ着手シテ冬宿ノ計ヲ爲ス然ルニ此地ハ當時カルムイノ或ハ、シユンガル部落ノ牧場タリシニヨリ彼等之ヲ見テ警戒シ大兵相集マリテ來リ攻ム、



シヤ兵防キ戰フテ之ヲ却ク、カルムイク乃チ長圍ヲ設ケ飢  
 渴ヲ以テ之ヲ降サントス圍中ノ、ロシヤ兵大ニ窮シテ死ス  
 ル者甚々多シ人幾チ失フ七百其翌千七百十六年四月フ、ゴリ  
 ツ遂ニ殘兵ヲ督シ圍ミヲ破テ、イルテシ河ニ出テ水ニ泛ヒ  
 流レニ順テ遁レ、ナム河ノ會スル所ニ至テ止マリ右ノ顛末  
 ナ當時トボリスク、ニ治セシ、シマリヤ鎮將ガガリーソン、ニ報  
 シ且此處ニ一城ヲ築カンヲ請フ、ガガリーソン之ヲ許シテ  
 役夫千五百人ヲ送ル、フ、ゴリツ之ヲ用ヒ建築ニ從事シテ  
 同年其城遂ニ成ル今ノ、ナムスク是ナリ後フ、ゴリツ、ガガ  
 ーリン、ト爭論ヲ生シテ召還セラレ後事ハ總テ、ガガリーソン、  
 ノ負擔スル所トナル  
 千七百十七年ノ始メ、ガガリーソン新ニ、ヤムイセ、フ湖邊ニ一

城ヲ築ク又此處ト、ナム城ト交通ノ路ヲ護スル爲メ其中間  
 イルテシ河岸ニ就テ野堡ヲ構ヘヌリ之ヲ、ゼレーソンスク、  
 トス其翌千八百十八年又進ンテ、セミパラチンスク、ニ城キ  
 進取ノ事業旺盛ノ際忽チ召シ還ヘサル職ニ坐シニ絞罪ニノ  
 處セラルル其罪案中亦過聞ヲ以テ帝ヲ惑ハ少將リハ、リヨ、フ  
 シ無益ナル遠征隊長ノ任ニ就ク  
 千七百二十年リハ、リヨ、フ四百餘ノ兵ヲ率キ、トボリスク、チ  
 發シテ、イルテシ河ニ溯リ沿路新築ノ諸城ヲ經テ、ノルザイ  
 サン湖ニ出ツ此時カルムイク部衆ハ力ヲチ東方ニ傾ケテ  
 清國ト争ヒシニヨリ此邊皆空虚タリ因テ、リハ、リヨ、フ湖水  
 チ東ニ渡リ、カラ||イルテシ清國ハ黒ノイ所謂額爾濟斯ナリ即チ  
 河口ニ入り又之ニ溯ラントス然レ此處既ニ、カルムイク、ア



リ之ニ抗ス因テ進ムヲ得ス歸路アルタイ谷峽ノ要害ナル處ニ就テ一城ヲ築キ以テ、イルタシ河流ヲ固ム、ウステハカイメノ、ゴルスク是レナリ後リハ、リヨ、フ病ニ罹リ、ペートルブルグ、ニ歸リシヲ以テ、ペートル、ノ名高キ、エルケン沙金場探討ノ業モ止メリ

ペートル、ノ中アジア金礦ニ惑ヒ遠征ノ利アラサリシニモ拘ハラズ其志ヲ遂ケント欲シテ探索ノ事等ニ注意セシハ猶左ノ類ヲ以テ之ヲ推スヘシ

ペートル、ス、ウエデン、ト戰フテ凱旋セシ時ブカラ王ヨリ使者至リ其勝利ヲ賀シ且ス、ウエデン、ノ女子等ヲ請ヘリ、ペートル之ヲ好機會トシ學識アル、イタリヤ人ノ、ベチ、ウエニ、ト云フ者ヲ撰メテ使節トシ之ニ任スルニ、ロシヤ、ノ

威徳ヲ布及シ且沙金場穿鑿等ノ事ヲ以テシテ、ブカラ、ノ使者ニ伴フテ其國ニ赴カシメタリ

千七百十八年使節ベチ、ウエニ、モスコフ、ヲ發シテ、ブカラ、ノ使者ニ、アスタラカン、ニ退ヒ及ヒ與ニ前路ノ方向ヲ議シテ再發シ翌年六月ベルシヤ領ノ、セマク、ニ着ス然ルニ當時ベルシヤ、ブカラ、ト隙アリ兩使共ニ長ク、ベルシヤ、ノ拘留スル所トナル後其都城テヘラン、ニ至リ再ヒ前進ヲ禁セラレ途中亦多少ノ妨礙ニ遇ヒ千七百二十一年ニ至テ僅ニ、ブカラ、ニ達スルヲ得タリ

此時ブカラ亂レ國內兵戈ニ苦ミ、ウズベク暴黨政權ヲ扼シテ國王エミル、ハ僅ニ其位ヲ保テリ故ニ王ベチ、ウエニ、ノ説ニ服セシト雖モ其下ヲ懼レテ之ニ從フ能ハス、ベチ



ウエニ、ブカラ、ニ在ルコ三年ノ久シキニ及ヒシト雖正遂  
 コ其意ヲ達セスシテ去レリ歸路アムイダリヤ河邊ニ於  
 テ、トルクマン、ノ劫掠スル所トナリ再ヒ、ブカラ、ニ奔リ其  
 レヨリ、キワ、ニ赴キシコ、キワ又之ヲ留メテ去ルヲ許サス、  
 ベチウエニ竊カニ、キワ、ヨリ出奔シ西北へ沙漠ヲ度リ多  
 少ノ困苦ヲ嘗メテ纔ニ、ロシヤ、ニ歸ルコト得シカ此時ベ  
 イトル帝ハ既ニ死セシ後タリ  
 右ノ次第ニテ此使節モ政畧ノ趣意ハ一モ達スルコト能ハ  
 サリシト雖正沙金ノ事ニハ善ク注意セシモノト見ヘ其  
 初メ、ブカラ、ニ赴ク時アムイダリヤ河岸ニ於テ金石混合  
 ノ沙ヲ發見シ見本ノ爲メ少シク之ヲ取り、ブカラ、ヨリ書  
 チ附シテ、ペイトル、ニ贈レリ其書ノ畧ニ、アムイダリヤ河

ノ水源ハ金礦ヨリ發スルニ非ス然正之ニ注ク所ノ、ギチ  
 クチヤ、ト稱スル河アリ此河ハダクシヤン近傍ニ流レ其  
 上流ニ於テ無盡藏ノ沙金ヲ帶ヘリ其山谷ニ住スル土民  
 ノ之ヲ採ルヤ始メ羊毛ヲ刈テ之ヲ河底ニ埋メ時ヲ經テ  
 河岸ニ揚ケ之ヲ乾カシテ純金ヲ振り出スト云フ  
 又同使節ノ、ブカラ及キワ領内ノ礦物ニ關セシ報告ニ、サ  
 マルカンド近傍ノ諸山ニモ亦金礦アリ、ブカラ地方ニ至  
 テハ其他ノ礦物銅、明礬、鉛、鐵ノ類亦多シ其中鐵ハ質最モ  
 善シ又アラル海ノ東キワ領内セツゼリ山中ニ銀礦アリ  
 臣之ヲ長ク囚レトナリ居シ一ノ、ロシヤ老人ニ聞ケリ曰  
 ク今ヨリ三十年前キワ國王アラン、ノ世ニ當テ一ノ、ベル  
 シヤ人アリ王ニ奏スルニ若シ此山中所藏ノ銀礦採掘ニ



着手セハ大ニ銀ヲ得ヘキヲ以テセリ王乃チ役夫ヲ遣ハシテ之ヲ掘ラシム果シテ銀礦大ニ出テ之ヲ鎔化セシニ正銀其半ハニ過ク然ルニ土民之ヲ聞テ群集シ王ニ迫ツテ云フ此銀ハ本ト争ヒノ種ニシテ近鄰トノ兵燹亦由テ生シ易シ故ニ管之ヲ採ルヘカラサルノミナラス之ヲ人ニ知ラスルモ亦不可ナリト王懼レ直ニ其銀ヲ礦夫ト與ニ舊地ニ埋メヌリト

右ノ外ベチ、ウエニ金礦ノ事ニ就キ尙ホ精確ノ報告ヲ爲サント欲シテ其ノ從僕ミチル、ト稱スル者ヲ、ブカラ、ヨリ、バルク及バダクシヤン、ニ遣リ土地ノ狀景ヲ視セシム其歸ルニ及ンテ之ヲ急使トシテ、モスコフヤ、當時都府ニ發遣セリ

此ミチル、ロシヤ、ノ外務役所ニ出テ途中見聞セシヲ傳ヘリ曰ク、ブカラ、ヨリ、バルク、ニ驛駄路十二日バルク、ヨリ、バダクシヤン、ニ八日程トス此兩城皆獨立シテ各自ラ其地方ヲ支配シ其人民ハ土地產物ノ沙金ヲ以テ、ブカラ及ロシヤ、ノ物品ト交易ス是ノ沙金ハ、アム、ダリヤ河ヨリ出ルモノニシテ凡ソ夏際水ノ減セシ時土民河ニ就テ金沙ヲ採リ始メ之ヲ鍋中ニ洗ヒ後獸皮上ニ乾カシ木枝ヲ以テ之ヲ打ツ然ル時ハ沙ハ飛散シテ唯、金其跡ニ留マル金中ニ沙ノ雜ハリ残りシ分ハ鎔化スル時ニ至テ至ク燒ヘ盡ルト又ブカラ、ノ事ヲ談シテ曰ク此地方ニハ種々ノ園菜家畜善ク生ス且曠野ノ小樹ニ一種ノ虫生シ此ヨリ高價ノ染具ヲ製ス、ケルメス是レナリ右ハ、ロシヤ、ニ於テ



一斤八ル一ブル、ニテモ買ヒ難キモノタリ此虫多ク彼地ニ産スト雖モ、ブカラ人ハ其製法ヲ知ラス故ニ唯、之ヲ取リ集メテ、シユイフ、ニ賣ル、シユイフ之ヲ調合シテ諸方ニ販賣ス此染具ハ最モ絹及羅紗ニ宜シト

ベテ、ウエニ又アムーダリヤ河舊流ノ事ニ關シテ報シテ曰ク此河昔ハ實ニ、カスピ海ニ注ケリ然レ是レ唯一條ノ支流ニシテ其本流ハ元ヨリ、アラル海ニ落チシモノトス其支流ノ乾涸セシユヘンハ、ブカラ、ニ於テ誰モ確説ヲ吐ク者ナカリシカ一説ニ其河岸ニ住セシ人民ノ絶ユルニ隨テ水流亦涸レシト又一説ニ嘗テ其水流ニ傍フテ勇猛ナル人民住シ常ニ、ブカラ及キワ、ヲ惱マシ害ヲ爲スリ甚シカリシニヨリ此兩國共ニカラテ協セテ之ヲ滅サン

ロシヤ東  
南ノ邊境  
ノ事

ト欲シ堤坊ヲ築ヒテ其上流ヲ塞キシニ河水忽チ涸レテ沿岸皆荒蕪セリト未ダ孰カ真ナルヲ知ラス

又政畧ノ事ニ關シテ奏シテ曰ク今中アシヤ諸汗國互ニ相爭鬪シテ各地大ニ亂ル故ニ與ミシ易シ陛下若シ國庫ヲ富マサント欲セハ此地方ヲ押領スルニ若クハナシト以テ其報告ヲ結ヘリ

ペートル帝ノ死後ロシヤ内外多事ニシテ暫ク中アシヤ、ヲ以テ意トセサリシカ當時其中アシヤ方面邊境ノ景況ハ凡ソ東南ウラル山外ノ曠野ニ、キルギース小部落及カラカルバク部落牧シ之ト、ウラル河ヲ以テ界トセリ又シベリヤ西南ノ地方ニハ、キルギース中部落及カルムイク部落牧シ之ト、イルテシ河ヲ以テ界トセリ而シテ、ロシヤ、ニ於テハ西北



兩方ヨリ右ノ兩河ニ沿フテ、カザク兵民ヲ土著セシメ處々  
 ニ堡障ヲ設ケテ游牧野民ノ入寇ニ備ヘタリ  
 右諸部ノ游牧野民時々ロシヤ、ノ邊境ヲ侵暴セシノミナラ  
 ス亦自ラ相噬搏々テ爭亂常ニ斷ヘサリシカ千七百三十二  
 年キルギース小部落他部ノ窘スル所トナリ其酋長所部ヲ  
 率テ、ロシヤ、ニ歸服セシメテ請フ、ロシヤ、之ヲ幸トシテ保護  
 ナ約シ并セテ、カラカルバク、ヲ招撫ス續ヒテ、キルギース中  
 部落ノ中亦同シク歸服スル者アリ因テ、ロシヤ、ニ於テ前兩  
 河ノ境界線ヲ次第ニ東南ヘ張り出シ處々ノ戍兵ヲ増シテ、  
 ナムスク、ウラルスク、チレンブルグ等ノ兵村戍兵内ヲ集メマリシ  
 フ云漸ク成リ千七百八十二年ニハ、ロシヤ、ノ、カタリナ女帝  
 チレンブルグ、ニ邊境事務所ヲ設ケ專ラ游牧野民ノ管轄ニ

邊患

從事セシムルニ至ル  
 然ルニ此野民等既ニ、ロシヤ、ニ服從ノ名アリシト雖モ其實  
 ハ舊ニ依リ不羈放慢ノ所業ヲナシ凡ソ他部ト相争フトハ、  
 ロシヤ、ニ臣ト稱シテ應援ヲ請ヒ無事ノ時ニハ其邊ヲ侵シ  
 テ人ヲ奪ヒ財ヲ掠メ或ハ曠野通行ノ商隊ヲ劫カシ又或ハ  
 旅人ヲ捕ヘシニヨリ、ロシヤ、ニ於テハ時々追討ノ兵ヲ派セ  
 シト雖モ野民ノ曠野ニ隱見スルヲ迅速ニシテ其跡追フヘ  
 カラス且彼等之ヲ見テ却テ激シ剽掠スルヲ益甚シ其例ヲ  
 舉レハ千八百二十五年ロシヤ、ヨリ中アシヤ、ニ赴キシ一商  
 隊六百二十五人ノ護衛兵大砲二門ヲ備ヘテ、ヤヌイダリヤ  
 河ヲ渡ル時キルギース、キワ人ト合シテ之ヲ襲ヒ商隊十三  
 日間防戦セシト雖モ勢ヒ敵セス遂ニ悉ク其商品ヲ奪テ敗



レ歸リシカ其損失大約五十四萬八千ルーブル、ニ及ヒシト云フ是等ノ事獨リ曠野ニ止マラス亦カスピ海ニ於テ野民ノ、ロシヤ、ノ漁船ヲ劫掠スルコト甚シカリシハ此頃此海上ニ於テ、ロシヤ人ノ捕獲セラル、者年ニ殆ント二百人ニ達セシヲ以テ知ルヘシ而シテ其人々多クハ、キワ、ノ市場ニ拘致セラレテ賣買物トナリ之ヲ収還スルニハ唯納贖ノ一術アリ邊境事務所ハ別ニ之ニ充ツル金額ヲ備ヘサルヲ得ザリシカ千八百二十六年ニハ其額二萬千二百八十九ルーブル、ニ上リシト云フ

百ヲ以テ守ルヘキ城ヲ築ケリ之ヲ、ノイウチ||アレクサン  
ドルス始メ、トベトコ、トス而シテ其岸ニ沿ヒ處々ニ斥候  
所ヲ設ケテ、グリニ、フ城ト連絡ヲ通シ又エムバ河ニ就キ兵  
民ヲ土着セシメテ新ニ境線ヲ西南ニ擴メヌリ然ルニ是ノ  
土地ハ往々人ノ住居ニ便ナラスシテ戍兵土着ノ業行ハレ  
ス就中ノイウチ||アレクサンドルスク、ノ土地氣候甚々惡  
ク病死共ニ斷ヘスシテ其城所望ノ用ヲ爲サス而シテ海上  
ノ人身劫掠ハ益劇シク千八百三十六年ノ春エムバ河道ノ  
監察長モ野民ノ捕フル所トナリ又其秋カスピ海海上ニ於  
テ大砲四門ヲ備ヘタル運送艦々長ヲ始メ乗組人全ク海賊  
ノ俘獲スル所トナル此時ロシヤ人ノ四千トナリテ、シト云フ  
又曠野ニ於テモ、キルギース數族相集リテ亂ヲナシ他ノ



野民之ニ加ハル者亦多クシテ諸方紛擾幾ント制馭スヘカ  
ラサル勢タリ長官ベロー、フスキー以爲ラク野民ソ猖獗チ  
擯、ニスルハ本ト彼等ニ、キワ、ノ應援アルニ因ル故ニ此地方  
ノ平定ハ遂ニ、キワ、ノ巢窟チ覆ヘシ其威勢チ挫クニ若クハ  
ナシト因テ再ヒ、キワ遠征ノ議チ起ス

キワ遠征

初メ、ロシヤ、ニ於テ、キワ、ノ、ロシヤ人民チ拏獄トシテ賣買ス  
ルチ止メシメシメシ計リ屢、使チ遣ハシテ其事チ談セシメ  
シト雖、ロシヤ、ノ遠征其意チ達セサリシ以來キワ、ロシ  
ヤ、チ輕ンシテ其請求ニ應セス然ルニ此間ロシヤ、ニ於テモ  
稍、キワ、ノ事情チ審カニシ且時勢ノ推ス所其國威チ東南ニ  
布及スルノ企圖亦自ラ生セシハ當時エフロツパ、ノ形勢チ  
推シテ知ルヘシス、イラノス、アルゼンチン、ノ領地チ廣メ、イギ  
ス、ノ威勢チ、ア、フ、ガ、ニ、ス、メ、イ、ギ、ス、ニ

及ホ此ニ至テ遂ニ、ベロー、フスキー、ニ命シテ、キワ遠征ノ準  
備チ爲サシム

此間ロシヤ人ノ、キワ、ニ赴キ詳カニ其事情チ傳ヘシ者チ  
左ノ二氏トス

千七百年ノ末キワ國王ノ伯父眠疾ニ罹リ醫チ、ロシヤ、ニ  
請ヘリ、ロシヤ乃チ博學ニシテ觀察ニ敏ナル、プランケナ  
ゲ、ト云フ醫士チ撰ンテ其請ニ應ス此醫士キワ、ニ至リ  
患者チ察シ其眼病治シ難キ者ト斷シテ去ラント欲ス、キ  
ワ人之チ危ンテ放ヤス且其歸テ目撃スル所チ傳播セン  
トチ懼レテ途上ニ就テ之チ掩殺セントス、プランケナゲ  
リ之チ同國人ノ囚トナリ居シ者ニ聞キ筋カニ脱走シテ、  
トルクマン、ニ投シ其救助ニ依テ僅ニ歸ルコト得タリ後



紀行ヲ著ハシテ大ニ、キワ、ノ富饒ヲ賞シ金銀多ク商賈盛  
 ンナルヲ傳ヘ且ツ曰ク、ロシヤ宣ク此地方ヲ収ムヘシ其  
 意ヲ達スルニハ五千ノ兵ヲ以テ足レリトスト其他アム  
 トダリヤ河ヲ舊流ニ復シ此ニ由テ、カスビー、アラル兩海  
 ノ水路ヲ通スヘキヲ證セリ  
 千八百十九年カフカス、ノ總督エルモイロ、フ參謀大佐ム  
 ラウヒョー、フ及少佐ボノマリヨ、フ、ヲ派シテ、カスビー海  
 東岸ノ地ヲ巡廻シ運送物品ノ儲藏ヲ設ケ堡ヲ築クニ便  
 ナル地ヲ撰ミ夫ヨリ、キワ、ニ赴テ土地ノ事情ヲ察シ且通  
 商ノ事等ヲ談セシメタリ  
 此一行總テ、カスビー海ノ東南部ヲ測量シ、ヒユルヘン河  
 及口バルハン灣ノニケ所ヲ城堡建築ノ要處ト定メ其レ

ヨリ、トルクマン、ノ嚮導ニ由テ、キワ、ニ赴キ國王ニ見ヘシ  
 ト雖何ノ協議モ爲シ得サリシノミナラス空ク四十八  
 日間拘留スル所トナル、ムラウヒョー、フ歸テ書ヲ著シ前  
 ノ醫士フランケナゲリ、ノ説ニ反シテ、キワ汗國ノ貧窮ヲ  
 説キ其地ニ囚虜トナリ居シ同國人ノ愍然タル状態ヲ痛  
 論セリ

千八百三十六年先ツ、キワ、ヲシテ、ロシヤ四人ヲ放メシメン  
 ト欲シ悉ク、キワ人ノ、ロシヤ領内ニ在ル者ヲ捕フ然ルニ其  
 翌年ニ至テ、キワ、ヨリ、ロシヤ人ノ老衰シテ既ニ使役ニ堪ヘ  
 サル者二十五名ヲ還ヘス因テ、キワ人五名ヲ放チ猶總テ、ロ  
 シヤ人ヲ放還スヘシト要求セシニ其翌年チレンブルグ、ニ  
 拘留セラレシ、キワ人ノ親戚ヨリ、ロシヤ人五名ヲ還シ又其



翌年ニ至テ、キワ、ノ使者ロシヤ人八十名ヲ率ヒテ、チレンプ  
 ルグ、ニ至ル然レ言辭甚々驕リ悉ク、ロシヤ、ノ要求ニ應スル  
 ノ色ナシ此時海ニ於テ一十八名ノ内三十名ハ當春中カス  
 リ、キワ國王ノ書ヲ還ヘス海城ヨリ貢納ニ悉ク表セリ  
 千八百三十九年ロシヤ遂ニ、キワ征討ノ令ヲ發ス其畧ニ曰  
 ク此舉タル兵力ヲ以テ、キワ國王ヲ要シ悉ク、ロシヤ囚人ヲ  
 放ダシメ貿易商隊ノ妨碍ヲ除クニ在リト同年十一月十四  
 日總督ペロー、フスキ一兵五千二百七十大砲二十門火箭  
 砲四臺ノ遠征隊ヲ率ヒテ、チレンプアルグ、ヲ發ス  
 此時ロシヤ、ニ於テハ、イギリス、ノ難問ヲ避クル爲メ其ア、  
 フガニスタン、ノ事ヲ終ルヲ待ツ積リナリシニ、イギリス  
 彼方ヨリ人ヲ、キワ、ニ出シタル報達ニ且曠野ノ出陣ハ冬

ヲ以テ善トスル説ニ歸シテ之ヲ急ケリ  
 此役紙幣百七十萬金貨三萬六千ルーブル、ヲ以テ軍費ニ  
 充テタリ

此地方運送ノ法ハ獨リ駱駝ノ背ニ存スルヲ以テ其獸最  
 モ行軍ニ必要ナリトス故ニ初メ近鄰ノ諸部酋長ニ依頼  
 シテ之ヲ集メシト雖レ、キワ人ノ妨クル所トナリ所要ノ  
 頭數ヲ得ルヲ能ハス遂ニ兵ヲ出シテ之ヲ搜索シ一頭十  
 ルーブル、ノ價ヲ以テ一萬以上ノ駱駝ヲ拘致シ始テ出陣  
 スルヲ得タリ然ルニ途中塞ニ傷ヒテ其駱駝多ク斃レ又  
 前日ノ術ヲ用ヒテ之ヲ求メサルヲ得サルニ至リ且雇役  
 スル所ノ、キルギース駱駝夫二千餘人アリシ者漸次遁逃  
 シカラテ用ヒテ之ヲ留ムル等頗ル多事ヲ致セリ



初メ曠野中兵食ヲ畜ヘ行軍ヲシテ容易ナラシムル爲メ  
 野堡ヲ、エムバ河ノ上流アタイ||ヤクシ河交會ノ處ニ構  
 ヘテ戍兵六百餘人ヲ置キ又一塞ヲ其南ニ方リシ、チウシ  
 カ||クル湖邊ニ設ケ戍兵四百人ヲ置テ行軍ノ休息所ト  
 ス  
 兵ノ出ルニ及ンテ會、大雪降リ嚴寒之ニ續キ曠野薪炭ノ煖  
 ナ取ルモノナクシテ征師大ニ窮ス然レ雪ヲ掘リ路ヲ開ヒ  
 テ進ミ非常ノ困難ヲ經漸ク十二月十九日ヲ以テ、エムバ堡  
 ニ達シテ一時此ニ休息セシニ其間此處及チウシカ||クル、  
 ノ兵營中ニ敗血病及痘病大ニ流行シテ死亡相續キ其傳染  
 防クニ術ナシ而シテ、キワ兵二三千チウシカ||クル、ニ押シ  
 ヨセテ襲撃ヲ始メ又エムバ、ヨリ病人轉運ノ爲メニ出テシ

數隊ノ兵モ途中敵兵ノ爲ニ遮ラレ内外ノ危急茲ニ迫リ遂  
 ニ全軍ノ進退ヲ決セサル可ラサルニ至ル總督ペロ、フス  
 キ一乃チ進軍ニ決シ十二月三十日エムバ、ヲ發シテ、チウシ  
 カ||クル、ニ向フ覺レシト見ヘ此日外務卿ニ贈リ難事タルヲ  
 カ||クル、ニ向フ覺レシト見ヘ此日外務卿ニ贈リ難事タルヲ  
 計リ得テサリニ依祈シニ我帝ヒ遠征ノ功ヲ達スルニ決シテ前  
 生等事ヲ天ニ依祈シニ我帝ヒ遠征ノ功ヲ達スルニ決シテ前  
 語アリト然ルニ進ムニ隨テ雪ハ益、深ク寒威風雪亦益、烈シ  
 クシテ兵士ノ凍死病歿相續キ、エムバ、ヨリ、チウシカ||クル、  
 マテ凡ソ四十五六里ノ路ニ一月間ノ時ヲ費シテ僅ニ達ス  
 ルヲ得シト雖レ途中失亡甚ク多クシテ現兵既ニ千八百五  
 十六人ニ過キス而シテ、キワ猶遠シ因テ千八百四十年二月  
 遂ニ軍ヲ回ヘシ再ヒ前ノ艱難ヲ經テ其六月纔ニ、チレン  
 ルグ、ニ抵リ八ヶ月間徒ニ曠野ノ往復ヲナシ六百九人ノ患



者ヲ病院ニ入レシヲ以テ第二ノ、キワ遠征ヲ畢レリ  
ロシヤ、ハ此失策ニ懲リテ事ヲ止ムルハ弱キヲ示スノ木ト  
シテ幾モナク新ニ遠征準備ノ命ヲ下シタリト雖也後キワ、  
ヨリ使者至リ、ロシヤ囚人四百十八名ヲ還ヘシ且キワ國王  
ノ既ニ、ロシヤ人ヲ捕ヘ或ハ賈買スルヲ禁セシヲ報セシ  
ニヨリ、ロシヤ之ヲ幸トシテ遂ニ軍備ヲ講和ニ變ヘ、ペロー、  
フスキー、ノ建議ニ基ヒテ、キワ、ニ參謀大佐ニキホロフ、ブカ  
ラ、ニ礦山學士少佐ブチエ、ニエ、フ、ヲ分派スルヲニ決セリ  
千八百三十六年ブカラ王エミル使者ヲ、ロシヤ、ニ遣シテ  
交際條約ヲ結ハシヲ請フ同三十八年使者又至リ前意  
ヲ復シ且金銀礦及寶石穿鑿ノ爲メ礦山學士ヲ請フ因テ、  
ロシヤ、ヨリ其事ニ達セシ士官二名及カワレ、フスキ、ロ、ス、チ撰

ミ之ニ商賣ノ景況及諸物數調査ノ事ヲ托シテ發遣セシ  
ニ途中キルギース、ノ劫掠スル所トナリ兩人共ニ其地ニ  
達スルヲ得ス千八百四十年又ブカラ、ノ使者至リ、キワ人  
所作ノ不平ヲ鳴ラシテ、ロシヤ、ニ商隊通路ノ保護ヲ仰キ  
且ブカラ國人ノ、メツク、ニ參詣スル者ヲシテ路ヲ、ロシヤ、  
ニ取ルヲ得セシメシメシヲ請フ因テ其返答トシテ、ブチエ、  
ニエ、フ、ヲ遣ルヲトセリ  
キワ、ニ派出ノ、ニキホロフ、ニ與ヘシ訓令ノ大略左ノ如シ  
第一 キワ汗國ヲシテ奴隸ノ業ヲ廢シ、ロシヤ人民ヲ捕  
フルヲ禁セシメ且其國內ニ在ル、ロシヤ人并ニ  
其所有物ヲ保護セシムル事  
第二 キワ汗國ヲシテ舊來ロシヤ、ニ服屬スル近鄰ノ游



牧人民ヲ擅ニ左右セシメサル事

第三 キワ汗國ヲシテ其國內若クハ其鄰國ニ於ケル、ロシヤ商賣ノ事業ヲ保護セシムル事

右ノ外訓令中ニ、ロシヤ、ノ爲メ至要トスルハ眼前ノ利益ニ在ラスシテ信チ中アシヤ諸汗國ニ布クニ在リ善ク此意ヲ體任シテ從事スヘシ等ノ語アリ

千八百四十一年五月ニキホロフ、チレンブルグ、ヲ發シテ同年九月上旬キワ、ニ抵リ三ヶ月間談判ニ時ヲ費ヤセシト雖モ議論合ハス遂ニ其意ヲ達セスシテ去ル其翌千八百四十二年八月參謀大佐ダヨリヨ、フスキ一更ニ前ノ訓令ヲ帶テ、キワ、ニ赴キ當時新ニ位ニ即キシ國王ト前事相談ノ後キワ、ニ於テ負擔スヘキ左ノ條約案ヲ草シテ和議遂ニ整フ

カリゾミ、シヤノキワ王ヲ、ヒム||クリ汗至誠ヲ以テ光位有

カノ、ロシヤ帝國ト親睦ヲ厚フシ固ク鄰國ノ好ミヲ保タント欲シ子々孫々屬僚衆民ニ代テ左ノ條々ヲ約ス

第一 今ヨリ、ロシヤ、ニ向テ公然又ハ陰ニ敵對ノ舉動ヲ爲サ、ル事

第二 曠野又ハ、カスピ海ニ於テ強盜若クハ人身劫掠ノ所業ヲナス者アルキハ直ニ之ヲ捕ヘテ罪ニ處シ其品物ハ所有主ニ返還スル事

第三 ロシヤ人ノ囚トナリシ者ヲ奴隸トセス且キワ國內ニ在ル、ロシヤ人ノ所有物ハ凡テ安全ニ之ヲ保護スル事

第四 キワ領内ニ於テ、ロシヤ人ノ死者アル時ハ其遺物



ハ之ヲ其相續者ニ交付スル爲メ全ク、ロシヤ、ノ邊境事務長官ニ送ル事

第五

ロシヤ臣屬ノ人々或ハ脱走シ或ハ謀叛シテ、キワ國內ニ遁避スル者アルハ之ヲ庇セス速カニ、ロシヤ邊境事務長官ニ交付スル事

第六

ロシヤ商人キワ國內ニ輸入スル物品ノ稅ハ一年一回ニシテ其稅則ハ物品現價ノ五分ヨリ上ラサル事

第七

ロシヤ商人ニ屬セシ物品ノ、シルダリヤ河ヲ經テ、ブカラ又ハ其他ノ、アシヤ諸國ニ向ヒ或ハ此道ニ由テ他方ヨリ輸入スルモノニハ一切稅ヲ課セサル事

第八

アシヤ諸國ノ、ロシヤ、ニ於ケル通商貿易ニハ唯、定則ノ稅ヲ課シテ妨礙ヲナサ、ル事

第九

益、ロシヤ帝國ト親睦ヲ厚フスル爲メ善キ鄰國ノ好ニ則トリ百事信義ヲ以テ之ニ接スル事

右ノ條々決定ノ爲メ原案ニ金印ヲ捺シテ之ヲ、ロシヤ帝國ノ使臣ダニリヨ、フスキー、ニ交付スル者ナリ

又此條約書ノ寫ニ、ダニリヨ、フスキー左ノ填註ヲ加ヘリ

キワ國王ヨリ、ロシヤ帝ニ贈ル所ノ條約書ヲ領受シ我カ政府ヨリ拙者ニ委任ノ全權ニ依テ互ニ相約セシ此條約取締ニ就キ、ロシヤ帝國ニ於テハ左ノ事ヲ保證スヘシ  
第一 舊來キワ國王等ノ、ロシヤ、ニ對シテ快カラサル舉動ヲナセシハ全ク之ヲ忘却ニ付スル事



第二 現今ノ時ニ至ルマテ、ロシヤ商隊ノ劫掠セラレシ  
物品ノ償金ハ一切之ヲ謝絶スル事

第三 キワ國民ノ、ロシヤニ來ル者ニハ至ク安心ヲ得至  
當ノ保護ヲ受ケシムル事

第四 キワ、ノ商人ハ、ロシヤ領内ニ於テ他ノ、アジヤ諸國  
ノ商人ト同様ナル待遇ヲ受ケシムル事

右拙者ノ保證スル所ハ他日我執政大臣ヨリ帝ノ名ヲ奉  
シ書面ヲ以テ之ヲ確定スヘシ又キワ國王ノ上文約スル  
所ハ、ロシヤ領内ニ在ル、キワ國民及其財產ヲ以テ之ヲ保  
證セララルヘシ

ダニリヨ、フスキ、ハ右條約ノ決判ヲ交換スル爲メ、キワ國  
王ノロシヤニ派セシ使節ト與ニ歸路ニ就キ千八百四十三

年二月ペートルブルグニ抵リ復命セシニ、ロシヤ政府ハ多  
年所望ノ事成レリト大ニ之ヲ喜ヒ直ニ其條約ヲ決定シ且  
厚ク、キワ使節ヲ待遇シ重寶ヲ齎ラサシメテ之ヲ返ヘセリ  
ブカラニ向ヒシ少佐ブチエ、ニエ、フ、モ、キワニ赴キシ使者同  
様當時ブカラニ於テ使役セラレシ、ロシヤ囚人ヲ放メシメ、  
ロシヤ商人ヨリ収税ノ定額ヲ減セシメ且此時ブカラニ拘  
留セラレシ、イギリス人ストツダルト、チ放ダシムル等ノ訓  
令ヲ受ケ此時中エフジョツ、ニ入り右ノストツダルト、ハ、ブ  
カラ、ニ、コ  
ン、リ、モ、ブ、カ、ラ、ニ、定、リ、此、地、ニ、留、テ、於、テ、兩、人、共、ニ、殺、サ、ル、ノ、千、八、百、四  
十、一、年、五、月、チ、レ、ン、ブ、ル、グ、チ、發、シ、テ、同、年、八、月、ブ、カ、ラ、ニ、達、シ  
直ニ國王ニ見ユルヲ得シト雖モ談判日ヲ延キ其中ブカラ、  
コ、カ、ン、ト、戰、ヲ、始、メ、國、王、ハ、事、ヲ、其、大、臣、ニ、托、シ、テ、親、ヲ、出、征



セシニヨリ、ブチエ、ニエ、フ、ロシヤ所望ノ事ヲ條記シテ其大臣ニ懸合ヒシニ國王ノ命令タリト稱シテ答書ヲ致ス左ノ如シ

- 一 和親條約ノ事ハ此方ヨリ使節ヲ遣ハスニヨリ先ツ、ロシヤ帝兩國間ノ條約書ニ記名シテ之ヲ右ノ使者ニ附贈セラレ然ル後ブカラ國王之ニ決判スヘシ
- 一 ロシヤ囚人ノ事ニ至テハ此條約決定次第皆之ヲ放還スヘシ
- 一 税額減少ノ一件ハ若シ、ロシヤニ於テ、ブカラ商人ノ税ヲ減セハ此方ニ於テモ、ロシヤ商人ノ税ヲ減スヘシ
- 一 イギリス人ノ事ニ就テハ彼國ノ女王、ブカラ、ト親睦

チ望ムノ書ヲ呈セシニヨリ、ブカラ王既ニ其女王ニ答書セリ故ニ其復書ヲ得ルノ後イギリス人ハ直ニ其國ニ還スヘシ

ブチエ、ニエ、フ之ヲ得テ、ブカラ王ノ、ロシヤ、ト和親條約ヲ結ブノ意ナキヲ知リテ直ニ去ル然ルニ、ブカラ、ヨリ使者ヲ發シテ其跡ヲ追ハシム、ブチエ、ニエ、フ、チレンブルグ、ニ抵リシ後幾モナク其使者亦至ル然レ、ロシヤ、ニ於テハ、ブカラ王ノ、ロシヤ使節ニ遇スル其道ヲ得サリシヲ以テ、ロシヤ帝ハ甚ク不平ナリトノ趣旨ヲ傳ヘ且若シ、ブカラ王ロシヤ帝ノ殊遇ヲ得ント欲セハ、速カニ、ロシヤ囚人及イギリス人等ヲ放ツヘント詭責シテ之ヲ追ヒ還セリ  
此時凡ソ、アラル海岸ヨリ、シムダリヤ河下流ノ土地ハ一面



ス  
キ  
ル  
ギ  
ー  
ス  
ノ  
管  
轄

キヲ領分ニシテ其中流以東ハ、コーン領分タリ其地ニ牧ス  
 ル、キルギース諸部ニ至テハ或ハ、キワ或ハ、コーカン、ニ屬ス  
 ル者ト數ヘ而シテ、ロシヤ其西北チレンブルグ、ニ根據シ東  
 南曠野ニ向テ右兩汗國領トノ中間ニ不羈放牧セシ諸部ノ  
 野民ヲ制馭スルヲ以テ事トセリ然ルニ前ニ整ヒシ、ロシヤ  
 及キワ、ノ條約ニ全ク國境ノ定メナク定メサヤ意アリテ之ヲ  
 由シテ知而シテ、ロシヤ兵次第ニ曠野ノ與ニ進ムノ勢ヒ始マ  
 リシニヨリ、キワ亦自ラ豫謀ノ計ヲナシテ間モナク敵視ノ  
 舉動ヲ見ハシ和親條約ハ遂ニ其用ヲナサス四千八百三十三年  
 授モ、フ、ト稱スル、ロシヤ、ノ謀叛人アリ曠野ヲ兵擾ノ南侵ヲ妨ケ應  
 センリト  
 初メ、ロシヤ、ノ、キルギース、ニ於ケルヤ其曠野ノ北部ニ牧シ

ヲ早ク歸服セシ分ハ中部部落之ヲ西シベリヤ管轄ニ付シ其  
 西部ニ牧セシ分ハ中部部落之ヲ、チレンブルグ管轄ニ付シ各、  
 其長官ノ所見ヲ以テ之ヲ緩撫セシメシニ西シベリヤ、ノ方  
 ハ早ク新制ヲ設ケテ部ヲ族ニ分チ舊來ノ豪酋ヲシテ部長  
 族長トナリ各汗號ヲ保ツテ其部下ヲ支配セシメ、ロシヤ、ノ  
 方ニ於テハ唯其監督ヲ嚴ニシ始メハ兵ヲ曠野ニ派出シテ  
 之ヲ巡察シ後便利ナル地位ヲ撰ミ其牧場ニ接シテ處々堡  
 壘ヲ設ケ漸々兵ヲ土著セシメテ之ヲ押ヘシニヨリ其部衆  
 ノ暴動スルヲモ尠ナカリシト雖モチレンブルグ管轄ノ、キ  
 ルギース、ニ至テハ制馭ノ法始メヨリ其宜ヲ得スシテ騷亂  
 常ニ斷ヘサリシカ本ト此野民等一般夏ハ曠野ノ北ニ向テ  
 游牧シ冬ハ南ニ移リ亦キワ及コーカン領ノ土地ニモ牧セ



シニヨリ其己ニ久シク、ロシヤ、ニ歸服ノ名アリシ者ト雖モ  
實ハ同時ニ諸汗國ニモ服従シ唯、遊徙ノ便ニ從ヒ去就ノ利  
ニ應シテ一方ニ臣ト稱シ其保護ヲ仰テ他方ノ邊境ヲ侵ス  
ヲ以テ常トセリ故ニ諸方同シク其禍ヲ蒙リ同シク其制馭  
ニ苦ミシト云フ

千八百四十二年チブル、チエ、フ、ペロ、フスキ、ニ代テ、チレ  
ンブルグ、ノ長官トナリ以爲ラク舊來時々兵ヲ曠野ニ出シ  
此野民ヲ鎮撫シテ其功ナカリシハ彼等ニ、キワ、コ、イ、カン、ノ  
後援アリテ我ニ曠野中兵力ノ據ル所ナキニ在リ故ニ此野  
民ヲ羈縻スルハ深ク其牧場ノ與ニ入り、シルダリヤ河口ニ  
出テ彼等冬宿ノ地ヲ占メ此ニ據テ、キワ、コ、イ、カン、ノ勢力ヲ  
挫クニ如カスト因テ其方畧ヲ建言シ千八百四十五年ヨリ

境線ヲ東南ノ曠野ニ擴張シ始ハ、トルガイ及イルギース河  
ニ就テ堡壘ヲ築キ第一チ、チレンブルグ、ト稱シグロトハ  
異ナ第二チ、ウラル、ト稱シテ曠野行軍ノ據ル所トシ其翌年  
カスピ、海賊抑壓ノ爲メ、ノ、イ、ウ、チ、||、アレクサンドルスク  
堡ヲ、マンギ、シリヤク半島ノ端ニ押シ出シ改メテ、アレクサ  
ンドルスク城ヲ築クト始メハ之ヲ、フ、ス、ク、ト、謂、フ、ヘ、リ、  
曠野中チレンブルグ及ウラル、ノ二堡壘既ニ成リ、ロシヤ兵  
此ニ據テ漸々南ニ進ム、キルギース、之ニ抗スルコト能ハス千  
八百四十七年ニ至テ、ロシヤ兵遂ニ、シルダリヤ河口ニ出テ、  
ライム堡ヲ築ク、キワ兵キルギース、ト合シテ來リ攻メ之ヲ  
追ヒ退ケント欲ス然モ力ヲ足ラスシテ退キ後復タ之ヲ攬  
サス因テ、チブル、チエ、フ、此ニ根據ヲ定ムルヲ得二三年間ニ、



ロシア兵  
コーカン  
國ヲ侵カ  
ス

カザク騎兵ヲ土著セシメ、アラル海ニ軍艦ヲ泛ヘ以テ其守  
備ヲ固フスルガ八百四十九年ラウラム堡ニ二十五戸カラブ  
クク堡ニ十四戸アラレ移住セシムル  
軍艦ハ初メ二橋ノ帆船二艘ヲ泛ヘ千八百四十八年ヨリ同  
九年ノ間ニ詳ニ此海ヲ測量シ五十年ニ至テ此ニ備フル爲  
メ、ス、ウエデン、ニ汽船二艘ヲ注文セリ  
ロシア兵ノ入テ據リシ、シルダリヤ河口ノ土地ハ四方不毛  
ノ沙漠タリト雖モ其近傍ニ耕種スヘキ沃土帯布シ且河ノ  
兩岸ハ葦草善シ生シテ常ニ野民等ノ冬宿スル所トス其地  
ニ就キ凡ソ河口ヨリ上流ノ方ニ百八九里ハカリノ距離ニ、  
アク||メチエチ、ト稱スル、コーカン、ノ堅城アリ舊來コーカ  
シ人此ニ根據シ其前ニ、クムイシ||クルガン、ナム||クルガ

ン、ノ二小堡ヲ設ケテ野民ヲ制シ亦以テ、ロシア、ニ備ヘリ  
此間ロシア及コーカン、ノ關係ハ詳ナラス唯、ロシア兵シル  
ダリヤ河口ニ據ルニ及ンテ、コーカン亦警戒シ守兵ヲ増シ  
テ其備ヲ固フス而シテ野民其間ニ在リ去就ニ迷フテ兩端  
ヲ持スル者亦多シ此時ロシア、チレンブルグ、ノ前長官ペロ  
ー、フスキー再ヒ其任ニ就キ早ク、アク||メチエチ、ヲ取テ、ロ  
シヤ、ノ威勢ヲ固メノヲ計リ千八百五十二年參謀大佐ブ  
ラムベルグ、ヲシテ兵五百ヲ率テ之ヲ襲ハシム、ブラムベル  
グ河岸ニ沿フテ進ミ前ニ備ヘシ二小堡ハ難ナク之ヲ攻取  
リシト雖モ、アク||メチエチ、ニ至テハ其守備甚タ固ク有後名ニ  
ナルベク之ヲ守レヤク却テ、コーカン兵ノ敗ル所トナリ僅ニ  
退クヲ得タリ因テ其翌千八百五十三年ペロー、フスキー



自ラ兵二千二百大砲十二門ヲ率テ、チレンブルグ、ヨリ發シ再ヒ、アク||メチエチ、ヲ襲フテ遂ニ之ヲ取ル此ニ至テ、コ|カソ、ノ威勢漸々挫ケ、シルダリヤ河方面ノ、キルギース全ク、ロシヤ、ノ羈糜スル所トナル

初メ、ペロ|、フスキ|進軍ノ路次シルダリヤ、ノ下流ニ於テカザル支流ノ分ル、所ト、カラ、ウシヤク河ノ、シルダリヤ、ニ會スル所トニ就テ各野堡ヲ構ヘシメリ其成ルニ及ンテ始ノ者ヲ第一堡ト稱シ後カザライム堡ヲ此ニ移シ、次ノ者ヲ第二堡ト稱シ新ニ畧セシ、コ|カソ、ノ、シムイシ||クルガン堡ヲ復シテ第三堡ト稱シ又更ニ、アク||メチエチ、ニ城ク之ヲ其長官ノ名ニ因テ、ペロ|、フスキ|、ト稱ス而シテ此諸堡ニ兵ヲ分配シ、チレンブルグ、ヨリ連絡ヲ通シテ曠野派出ノ一軍

ロシヤ兵  
中アシヤ  
ニ侵入ノ  
形勢

ヲ成ス之ヲ、シルダリヤ兵線ト稱セリ

此間シベリヤ、ノ方ヨリモ、ロシヤ、ノ一軍シベリヤ兵線ト稱シテ、セ|パラチンスク、ヨリ發シ同シク野民鎮撫ノ舉ニ乘シテ漸々南ニ進ミ千八百四十六年遂ニ、キルギース大部落ヲ屈服セシメ翌千八百四十七年ニ至テハ其牧場ニ就テ、カ|パル堡ヲ設ケ是ヨリ西南ニ轉シテ、イ|伊河ヲ渡リ天山西部ノ北麓ニ達シ、アルマツト、ト稱スル、コ|カソ、ノ一村ヲ畧シ堡ヲ構ヘテ此ニ據リ改メテ、ウエルヌイ、ト稱ス

右ノ次第ニテ千八百五十三四年ノ頃ロシヤ兵ノ中アシヤ、ニ侵入ノ形勢ハ凡ソ西北チレンブルグ、ヨリ出テシ、シルダリヤ兵線ノ根據ペロ|、フスキ|城ヲ以テ中央トシ東ハ、シベリヤ兵線ウエルヌイ、ニ出テ西ハ、チレンブルグ、ヨリ分レ



シ一軍カスピ海ノ東岸マンギシリヤク半島ノ、アレクサ  
 ンドルスク城ニ據リ三方ヨリ曠野ノ奥ニ派出シテ各其方  
 面ヲ守リ暫時其所ニ止レリ  
 ロマノ一、フスキ一後キスタムル州ニヤ長官トナリシ、トルノ説ニ  
 當時チレンブルグ及西シベリヤ兩總督府ニテ此三方ニ用  
 ヒシ總兵ハ土著騎兵及運送衛兵ヲ除ヒテ六万三千餘ニ達  
 シ隨分大ナル兵タリ然レ諸方猶其不足ヲ覺ヘ一時ハ甚タ  
 困難ヲ極メタリ何トナレハ、マンギシリヤク半島ノ、アレク  
 サンドルスク、ヨリ、シルダリヤ河邊ノ、ペロー、フスキ一、マテ  
 直徑凡ソ百四五十里アリ、ウスチウルト、ノ沙漠之ヲ隔テ  
 其中間當時一野堡ナカリシニヨリ、アレクサンドルスク城  
 ニ於テ海賊制抑ノ外其間ニ放牧セシ野民ノ剽掠ニモ備ヘ

政中ロ  
アア  
シヤ  
シヤ  
ノ

カリシヲ得ス又ペロー、フスキ一、ヨリ東ウエルヌイ、マテ凡  
 ソ二百七八十里アリ、コーカン汗國之ヲ隔テ中間トルキス  
 タント及チムケント、ノ兩城下アリ其東西ニハ又別ニ數重  
 ノ城堡アリ、コーカン兵之ニ據テ防禦ノ術ヲ盡シ又北方  
 ノ曠野ニハ野民馳突ノ警虞斷ヘス且東方ハ既ニ清國領ノ、  
 イリ地方ニ接シテ先鋒亦此ト事ヲ生シ境線大ニ廣マリ兵  
 カ分離シ加ルニ諸方多クハ不毛ノ土地ニシテ運送ノ不便  
 ナルヲ甚シク攻守共ニ莫大ナル費用ヲ要シ幾ント其成形  
 ヲ保チ難キ勢ニ至リシト  
 此間ロシヤ、ニ於テモ中アシヤ、ノ地理事情漸ク明カニ夫ノ、  
 ペートル帝沙金場攫取ノ企圖モ基ツク所事實ニ遠クシテ  
 其遠征ハ一時夢想ノ擧タルニ過キサリシヲ知リ復々之ヲ



以テ意トセサリト雖其地方ノ物産ニ富ミ且清國及イ  
 ノド地方ト交通ノ地位ニ居ルヲ以テ將來通商ノ利ヲ期シ  
 諸汗國ヲ諭シテ、ロシヤ人ノ買賣ヲ禁シ通商ノ障碍ヲ除カ  
 シメ自然威徳ヲ布及シテ遂ニ其保護者トナル政畧ヲ持セ  
 シモノト見ヘ邊境ノ事ハ其長官ニ委任シテ野民ヲ鎮撫セ  
 シメシニ歲ヲ經ルニ從ヒ邊境ノ事情漸ク變シ、ロシヤ兵舉  
 ニ乘シテ中アシヤ、ノ與ニ入り遂ニ西北兩方ヨリ、コーカン  
 汗國ニ臨ミ猶其所ニ止マルヲ得サル勢ヒトナリシハ前ロ  
 マノ一、フスキ、ノ説ニ由テ之ヲ知ルヘシ此時ロシヤ、ニ於  
 テモ進取退守ノ兩説アリ其進取ヲ主張スル者以爲ラク中  
 アシヤ諸汗國ノ、ロシヤ、ニ於ケル仇視ノ情深ク狐疑ノ心固  
 フシテ信ヲ置クニ處ナシ故ニ其鄰好保ヲ難シ今若シ因循

時ヲ過サハ彼等ノ我ヲ敵視スルヲ益甚シカルヘシ若シ、イ  
 ギリス、インダ、ヨリ其機ニ投シテ之ヲ鼓動シ且之ニ假スニ  
 利器ヲ以テセハ諸汗國復々與ミシ易カラス遂ニ、カフカス、  
 ノ勢ヒヲ馴致スル亦未タ知ルヘカラス平定ニヤ、ノ、カフカス  
 除<sup>二十</sup>年<sup>二十</sup>故ニ今宜シク此勢ヒニ乘シテ長驅シ直チニ、コーカ  
 ソ、ヲ扼スヘシト又其退守ヲ主張スル者以爲ラク此地方ノ  
 事情未タ善ク明カナラサルニ因リ進取ノ計其要領ヲ得難  
 シ且ツ假令ヒ之ヲ取ルトモ得失相償ハス到底無益ノ財ヲ  
 費シ無窮ノ略取ニ惑フニ過キス故ニ今ノ計ヲ爲ス軍口境  
 線ヲ既ニ略取ノ地ニ畫シカラチ其要處ニ據メテ經營ニ從  
 事シ全ク進取ノ念ヲ斷チ諸汗國ヲシテ其疆域ニ安ンセシ  
 ムルニ如ス若シ彼等我ニ土地ヲ貪ルノ心ナキチ信セハ敵



視ノ情自ラ消ヘ我ト通商ノ利ニ關スル土民ハ勿論國王等ニ至テモ信ヲ尊ヒ威ヲ敬スルノ心亦或ハ生シ我年來此地方ニ企望ノ目的亦未ダ失ヘリトセスト千八百五十四年ベ  
 ートルブルグ、ノ邊境事務取調所ニ於テ之ヲ討論セシ後政府此兩説ヲ折衷シ遂ニ、シルダリヤ兵線ト、シベリヤ兵線トヲ兩方ヨリ進メ之ヲ土著ノ地方ニ聯テテ新境ヲ畫定スル  
 一ニ決セリ  
 然ルニ、クリメ、ノ戰爭ニ因リ其議變シテ一時又退守ノ説ニ歸シ同年シベリヤ、ノ方ヨリ零取セシ地所ヲ東テテ、セヨパ  
 ラチンスク州ヲ設ケ殖民地ノ經營ニ從事シ千八百六十年ニ至ルマテ事ヲ其所ニ止メタリ其間シルダリヤ、ノ方ハ此河邊ニ就テ、キルギース、ヲ土著セシメゾヲ圖リ開墾ニ便

ナル地所ノ測量等ニ着手ス而シテ元來企望ノ中アシヤ通商論復タ起リ商隊ヲシテ、カスピ海海道ニ由ラシメント欲シ  
 參謀大佐ダンデウヒリ、ニ任シテ海岸ヲ測量シ其東岸ニ就テ港泊ヲ搜求セシメ又參謀大佐イグナ、エフ方今内務卿務ヲ  
 使節トシテ、キワ及アカラ、ニ派シ更ニ和親ヲ議セシム然ル右使節ノ談判ハ前使節ト同シク其意ヲ達セスシテ諸汗國  
 トノ關係ハ依舊變セス  
 千八百五十九年ダンデウヒリ、カスピ海ノ東岸ヲ測量シ、カラスノ、ウチツ、スク灣中ハルクイ水密ト稱スル井水アル所ヲ撰ンテ築港場ト定ム數十年經過ノ後其事始テ行ハル  
 ロシヤ、ノ、カスピ海東南ノ岸ニ據ラント欲シテ航海ノ



事ニ着手セシハ、ペートル帝ヨリ始マリシカ今其沿歴ヲ  
 案スルニ、キワ遠征ノ任ニ當リシ、ペコーウヒチ、チ除クノ  
 外ペートル又其方ノ人々ヲ遣シテフ、タエラウン、ロンイ、ウモル、  
 諸氏、ソ此海ヲ測量セシメ海圖及地誌始テ成ル  
 後イギリス、ノ貿易商會ニ此海ノ通運ヲ許シ千七百四十  
 年カピタイン、エリトノ、ノ嚮導ニテ其社ノ開業始マリ四  
 十五年マテ行ハレタリ  
 千七百八十一年ペルシヤ、ニ屬セシ南岸ノ地ヲ求ント欲  
 シ、ウナイノ、ウヒチ、チ長トシテ一征隊ヲ派セリ然レ其領  
 主アスタラ、パツド、ノ汗之ニ抗シテ其事行ハレヌ  
 千八百十九年オノマリヨ、フ及ムラウヒヨ、フ、カフガス、  
 ヨリ出テ細カニ其南岸ヲ測量セリ

ロシヤ、ペルシヤ、ト戦争ノ結末千八百二十八年トルクマ  
 ンチヤイ、ノ條約ニ依テ、カスビー海所領ノ權全ク、ロシヤ、  
 ニ歸シ幾モナク、アスタラパツド灣内ノ小島アシウル、  
 アテ港ヲ設ク  
 千八百三十五年カレーリン、チ長トシテ海岸ノ調査委員  
 ナ發遣ス此一行始テ、カラブガズ、ニ漁獵ノ法ヲ定メ且石  
 油ノ出ツル、チエレナン小島ヲ獲ルノ考案ヲ立テタリ  
 千八百三十八年通商試ミノ事ヲ、エリウソンド、フ、ニ托シ物  
 品ヲ積ンテ、アスタラ、パツト、ニ赴カシソタリ然レ其得ル  
 所當時ノ、ロシヤ製造物ハ土人ノ嗜好ニ適セサルヲ知ル  
 ニ過キサリシ  
 千八百三十八年カスビー海上ニ於テ劫掠ヲ擅ニセシ、ト



事ニ着手セシハ、ペートル帝ヨリ始マリシカ今其沿革ヲ案スルニ、キウ遠征ノ任ニ當リシ、ペーコーウヒチ、チ除クノ外ペートル又其方ノ人々ヲ遣シテフ、タエヂウン、ソイモル、諸氏、此海ヲ測量セシメ海圖及地誌始テ成ル後イギリス、ノ貿易商會ニ此海ノ通運ヲ許シ千七百四十年カピターン、エリトソ、ノ嚮導ニテ其社ノ開業始マリ四十五年マテ行ハレタリ

千七百八十一年ペルシヤ、ニ属セシ南岸ノ地ヲ求ント欲シ、ウナイイノ、ウヒチ、チ長トシテ一征隊ヲ派セリ然レ其領主アスタラ、パツド、ノ汗之ニ抗シテ其事行ハロス

千八百十九年ボノマリヨ、フ及ムラウヒヨ、フ、カフガス、ヨリ出テ細カニ其南岸ヲ測量セリ

ロシヤ、ペルシヤ、ト戦争ノ結末千八百二十八年トルクマシチヤイ、ノ條約ニ依テ、カスピ海所領ノ權全ク、ロシヤ、ニ歸シ幾モナク、アスタラパツド灣内ノ小島アシウル、アデ港ヲ設ク

千八百三十五年カレーリン、チ長トシテ海岸ノ調査委員ヲ發遣ス此一行始テ、カラブガズ、ニ漁獵ノ法ヲ定メ且石油ノ出ツル、チエレナン小島ヲ獲ルノ考案ヲ立テタリ

千八百三十八年通商試ミノ事ヲ、エリワソンド、フ、ニ托シ物品ヲ積ンテ、アスタラ、パツト、ニ赴カシメタリ然レ其得ル所當時ノ、ロシヤ製造物ハ土人ノ嗜好ニ適セサルヲ知ルニ過キサリシ

千八百三十八年カスピ海上ニ於テ劫掠ヲ擅ニセシト



ルクマン抑制ノ爲メ海軍大佐アチヤーチン始テ田日本於  
 今條ハ海軍結大將シ人チ長トシテ遠征隊ヲ出タス其結果ハ、ト  
 ルクマン、ノ船コトニ其部衆酋長ノ誼印ヲ携帶シテ之チ、  
 ロシヤ、ノ、アシウル|| アテ出張所ニ示スコニ定マリ且ッ  
 此海ニ常ニ、ロシヤ、ノ巡邏艦ヲ備フル事トセリハ、コスチク  
 シエンコ、ノ、ロシヤ兵南侵ヘシノ概略ヲナリ

ロシヤ兵  
新ニ進ム

ロシヤ南侵畧記下

コイカン汗國ハ西北兩方ヨリ、ロシヤ兵ノ逼マル所トナリ  
 自ラ、カラチ防禦ノ術ニ盡サ、ルチ得サリシカ此時キルギ  
 ース大部落ハ既ニ、ロシヤ、ニ屈伏セシト雖也其中或ハ猶獨  
 立シ或ハ、コイカン、ノ勢威ニ服セシ者アリ、コイカン乃チ之  
 ニ陷ハシムルニ利チ以テシテ、ロシヤ兵營ヲ擾亂セシム、キ  
 ルギース漸々之カ用チ爲シ諸方ニ馳突シテ、ロシヤ兵線ヲ  
 斷チ其芻料ヲ奪フ因テ、ロシヤ兵之ヲ挫カント欲シ千八百  
 六十年シベリヤ兵線ヨリ探討兵ヲ出シ進ンテ、コイカン、ノ、  
 トクマク及ビシベク兩城ヲ襲ヒ盡ク其壘壁ヲ毀ツ又シル  
 ダリヤ兵線ヨリモ進ンテ、チウレク、ニ城キ兩方ヨリ進軍ノ  
 勢ヒ復タ始マル其翌千八百六十一年チレンブルグ總督ハ



ハルニ機シ以セノ護ラリツ洗到ア先セ右モタルタドリ  
 得ヲ屬會制テシ千ス控ノ底シノサノ辨ルナシ諸ヤ  
 易確セ去シ此文八ルニ事無ヤ狀ル目シシリケ城河  
 シレシラ易地ヲ百事私於非ニ益諸態への的得ルシニ水  
 請ナキ、ンシ方案五業利テス至ノ國ヲカチルダトト通運  
 フラルコ若ノス十ヲチ疑シテ事ト視ラ達ニリ云一スノ  
 之スギ一シ經ル九妨營權ヲハタノ善スス庶ヤフ部ル便  
 ナタ一カ他略ニ年クミヲシ今ル交ク彼ル幾方カ面野税得由  
 忍シス、ン日ニ我八ル而抱ル我ニ際此方ニカ面野税得由  
 セケチノイ從政月ノシクダ兵歸ハ地ノハラノ民額千來我  
 ニン劫命リセハ以ナ我理ヤムル力ノ督ヨ用幕八商通  
 スト掠命リセハ以ナ我理ヤムル力ノ督ヨ用幕八商通  
 ル押シ令スサ帝アシ已ナ河一ヤヲ事ヂリ稅百業商  
 ヲ領威ヲ之ルニロ然ノシニダ疑以情ニ西チガシメベ  
 忍ノハ守ニニイン臣且溯リナヤ容之察チセリリモヤ、  
 レ名我ル精非ギド此民彼リ等東河レニス持ハ、スコ、若ノ  
 千兵固利ルリン事タ方ニ今向溯夫リ、イニカ近トク力我ヲ  
 八百掠カノヲス割ニル方ニ今向溯夫リ、イニカ近トク力我ヲ  
 百内ラ砲信ノ駐就キテル清フ、イニカ近トク力我ヲ  
 六入シヲ方マ大ハギ國ニヨンギド、リ、ニス、レ他兵チ  
 十二年ヲテ與今サ使我、外ス、務ヲ、タイ、ニス、レ他兵チ  
 西擊ハハ、故書務ヲ、タイ、ニス、レ他兵チ  
 シス我其カヲ送卿保自ギ近關ハ中出協

三百三十一

ノル商職ル若シルリシク貨何ヲルチリヨニスンベザ  
 ミスノ業鉛シヤ争シ以サ甚ト占一得土リ追ルトザ  
 ナト、要最山此鉛關後テウタナムプヘ地應ルニヲク  
 ラニ衝モヲ地山亦ハ我ル貴レハハノ然物ヲモリ領略  
 ス過タ監領方フ自我瀛ヲシハハノ然物ヲモリ領略  
 亦キリンスヲ有ラニ松用方此亦費ル産待我防セ取  
 我ス又ナへ収セ止歸ヲユ今河ア亦トチ守禦シノ  
 威我此ルシメスミ服持然此下ラ省ハ以得兵ノ後要  
 勢既ヨ一〇ハ、シ野セス此河流ルク方アハ常術ハヲ  
 ヲニリ大第トテ民シル其ヲノ艦ヲ今此シニ亦ハ、  
 プ此コ部五ル軍ノキヲ材上地隊得年沿〇シ施シ陳  
 カニ一會キタス困稅ギヘキス石雜シ此ニニダ易此ル  
 ラ據カニシタケンナ當ス〇シニノスシ方ケンヤ假方左  
 布ハ城アケンルニ諸第部三ニ河ルニダ兵諸タシヘ於如  
 及獨ニブントルニ諸第部三ニ河ルニダ兵諸タシヘ於如  
 シリ至カト近場増部三ニ河ルニダ兵諸タシヘ於如  
 易コルラハ傍合スニヘ間タ上ニ流生ク最河ニ兵河  
 シ一慎清此ニ至シ始ケ終ン炭所テ要ノ十充運  
 而カニ國地於アル〇第終ン炭所テ要ノ十充運  
 シン百及方アニ此丁第終ン炭所テ要ノ十充運  
 ヲ制五口ニ此丁第終ン炭所テ要ノ十充運  
 シシ十シ於緊多四斷、ヘニ資サ運ス地万ル由壘之  
 ル易ウヤヲ要シ今口サ據資サ運ス地万ル由壘之  
 ダキヨ通工ナ今口サ據資サ運ス地万ル由壘之

三百三十



ベリヤ總督ヂユガメリ亦兵ヲナリ河以西ニ進メテ、コーカ  
 ノ人根據ノ、アウリエ||アタ城ヲ零シテ兩端ヲ持スル、キル  
 ギース、ヲ招撫シ且此邊ニ一城ヲ築ヒテ、ナウ河地方ヲ固メ  
 ンヲ奏ス唯タジケント、ニ至テハ之ヲ取ル易カラス又之  
 ナ取ルニハ多クカラテ費サ、ルヲ得サルヲ以テ別ニ一汗  
 國ヲ立テ其自治ニ任シ我唯國王廢立ノ權ヲ持シ此ニ領事  
 ナ置テ兵食ノ用ヲ辨セシムル事トスヘシト然レ政府ノ議  
 舊ニ依テ前進ヲ禁シ且アウリエ||アタヲ取ルヲ許サス  
 此頃イギリス、ニ於テ中アジヤ論ヲ起シ、ロシヤ、ノ南校ヲ退  
 止セント欲スル勢ヒ盛ンナリシニヨリ蓋シ其難問ヲ避ケ  
 ナシモノ

兵線聯合

然ルニ其間兩方出先ノ、ロシヤ兵機ニ乘シテ進ミ千八百六  
 十二年シベリヤ、ノ方ニテ、コーカン、ノ、メルク堡ヲ取リ其翌

年シルダリヤ、ノ方ニテ、ヤヌイ||クルガン堡ヲ取リ、ロシヤ  
 兵東西兩方ヨリ進ンテ次第ニ相近ツキ兩軍自ラ相會スル  
 勢ヒトナル因テ遂ニ定メシ兩兵線ヲ聯合スルコトニ決  
 シ、シベリヤ、ノ方ハ參謀大佐チエルニヤイエ、フ現今陸軍中將シル  
 ダリヤ、ノ方ハ大佐ウエリヨ、フキン、ニ命シテ之ヲ執行セシ  
 ム  
 千八百六十四年チエルニヤイエ、フ凡ソ二千五百ノ兵ヲ率  
 井、ウエリヨ、フキン千二百ノ兵ヲ率テ各、東西ヨリ進ム  
 初メ兩軍會合ノ線路ハ、タラス河ノ上流ニ臨ミシ、アウリエ  
 ||アタ、ヨリ、カラタ、ウ山ノ北脚ニ並ヒ、スウザク、チウレン、ニ  
 引クノ定メナリシニ、シルダリヤ方ノ長官ウエリヨ、フキン、  
 ノ説ニ依リ其方線轉シテ、トルキヌダント、ニ向ヒ後又シマ



リヤ方ノ長官チエルニヤイエフ之ヲ、チムケント、ニ振り向  
 ケ其線路漸々南へ擴張シテ遂ニ、チムケント、ヲ包ムニ至ル  
 同年六月チエルニヤイエフ、アウリエ || アタ、ヲ取り、ウエリ  
 ヨ、フキン、トルキスタント、ヲ取り両方ノ兵此ニ相會シ、チエ  
 ルニヤイエフ其長トナリテ之ヲ總へ九月ニ至リ又チムケ  
 ント、ヲ攻テ之ヲ取ル此ニ至テ兩兵線聯合ノ事成ル  
 チムケント、ヨリ南ニ去ル三十二三里ニシテ、タシケント城  
 アリ當時相傳フ其城壁ノ周廻凡ソ十里人口十四五萬アリ  
 此方面最モ重要ナル所ニシテ、チムケント、ヨリ潰走ノ兵半  
 ハ此ニ止マリシト、チエルニヤイエフ既ニチムケント、ヲ取  
 リ、コーカーン兵ノ與ミシ易キヲ見テ擧ニ乗シテ直ニ、タシケ  
 ント、ニ逼ル而シテ其備へ固カラサルヲ僥倖シ輕兵ヲ以テ

タシケ  
トニ逼  
ル

城ノ一方ヲ突ク然レモ守備固フシテ孤軍之ニ入ルヲ能ハ  
 ス多ク損亡ヲ負フテ退ク  
 此時コーカーン王ノ輔相アリム || シル、ト稱スル者稍、膽力ヲ  
 以テ著ハレシカ諸城ノ陷ルニ及ンテ之ヲ恢復セント欲シ  
 其年ノ十二月ニ至リ自ラ大軍ヲ率テ出陣シ、ロシヤ兵ノ守  
 リシ、チリク、イカン、ノ諸堡ヲ拔キザイカン、ニ於テロシヤ、カ  
 ノ後退ニ所、トルキスタ長セト、ニ退クニ苦戦シテ三日間、チエ  
 ロカン、ノ役ト稱シテ此地ヲ進ンテ、トルキスタント、ヲ圍ミ攻  
 撃甚タ急ナリ、ロシヤ兵死守ス、アリム || シル遂ニ之ヲ取ル  
 ヲ能ハス  
 初メ、チエルニヤイエフ兵線聯合ノ事成リシヲ報シ、タシケ  
 ント、ノ急ニ取ラサルヘカラサル事情ヲ陳ス唯、其ロシヤ、ニ

トルキ  
スタ  
州  
ヲ  
設ク



於テ土地ヲ廣メサル政畧ニ反スルヲ以テ之ヲ取シ後ハ獨  
立ノ、タシケント汗國ヲ立テ之ヲ我勢威ニ服セシメン  
テ奏セリ然レ政府ニ於テハ兵線聯合ノ事成ルヲ以テ既ニ足  
レリトシテ之ヲ許サス且彌事ヲ其所ニ止ムルニ決シ千八  
百六十五年ノ始メ新ニ畧取ノ土地ヲ併セテ、トルキスタン  
州ヲ設ケ軍鎮ノ制ニ依テ吏治ヲ立テ、チエルニヤ  
フ、チ  
少將ニ進メテ其長官トシ文武ノ任ヲ兼帶シテ新地方ノ施  
設ニ從事セシメ軍務ニ關シテハ、チレンブルグ總督ニ隸シ  
テ其節制ヲ受ケシム又西北兩方ヨリ援兵ヲ發シ且チレン  
ブルグ總督ヨリシヤノ、フスキ、ニ命シテ新地ヲ巡廻シ  
出先ノ事情ヲ審カニシテ其意見ヲ陳セシム  
ブカラ王セイドムザフアル、ロシヤ兵ノ、コーガン、ニ逼リ、

タシケント亦危急ナルヲ聞テ之ヲ救ハント欲シ自ラ出陣  
ノ準備ヲナス千八百六十五年四月ニ至テ其兵漸々ウラチ  
ユベ、ニ集ル、チエルニヤ  
フ、チ  
ラノ  
用  
其  
兵  
テ  
井  
リ  
チ  
シ  
タ  
シ  
ケ  
ン  
ト  
、  
チ  
圍  
ン  
テ  
其  
動  
靜  
ヲ  
伺  
フ  
然  
ル  
ニ  
住  
民  
カ  
ラ  
チ  
防  
禦



ニ盡シテ降ル色ナシ六月初旬ニ至テ、コトガシ、ノ援兵漸々  
 諸方ヨリ馳セ集マル是ニ於テ、チエルニヤイエフ遂ニ力取  
 ニ決シ兵二千大砲十二門ヲ以テ之ヲ襲ヒ城壁内外ニ於テ、  
 攻撃三日遂ニ之ニ克ツ、タシケント降ル  
 ナエルニヤイエフ、既ニ、タシケント、チ取り近ク府下ノ情實  
 ナ察シ此ニ一汗國ヲ立ツル考案ヲ變シテ全ク之ヲ兼併セ  
 ソフチ奏ス其其地奏問チ大略シニ臣立昨ノ年一タ汗國ケ  
 ナテ此陳ノ實ト施シ難今其地ノ抑景況ニト此人ノ性ヲ察シ  
 人タ口ニケ十ノ萬ニ及府ヲ大都會ナシ以テ人ノ持方スル  
 ナ想重ニ因ルヤリ然ルニ最モ高キ外ニ出テ此而シテノ難集  
 僅設ニ其週チ一ニ過盗キ且我ヨスリテ更ニ著手スル所ナ  
 治安ニ業今既若シ我ヨリ就汗キ目下府中住民ノ見亦所ク  
 リ然ルニ業今既若シ我ヨリ就汗キ目下府中住民ノ見亦所ク

テ人ニ威勢アリトス雖其汗異ハ其勢ハ有セシ故ニ役人ハ力ニ  
 府事ハ全ク空位民却テ自擾ニ任シトハハハハハハハハハハハ  
 テテハ外ニ督一城ヲ設クハ一隊ヲ保ニ百ヲ備ヘテ事ニ足  
 トレリ會、チレンブルグ總督リシヤノ、フスキ、ダシケン  
 ト、ニ來着シ土地ノ情實ヲ見聞シテ、チエルニヤイエフ、ノ説  
 ニ同セズ猶舊來ノ方畧ニ因リ固ク其兼併スヘカラサル説  
 ナ執テ議論遂ニ決セズ是ニ於テ總督ハ、チレンブルグ、ニ歸  
 リ具サニ出先ノ事情ヲ報シ且チエルニヤイエフ、ノ説ト己  
 ノ意見トチ陳シテ參考ニ供セシニ政府ニ於テハ其事既ニ  
 政畧ノ變更ニ關シテ決議重大ナルヲ以テ疑問ヲ推明シ後  
 事ヲ熟議スル爲メ此兩將ヲ召ス事ニ決ス  
 タシケント、チ取リシ後ハ境線益弘マリ援兵少シク達セシ



ト雖ニ直チニ諸方ニ分遣セサルヲ得スシテカラ猶足ラサ  
 リシニ因リ、チエルニヤ、エ、フ早ク、ブカラ、ト和親ヲ結ハシ  
 ト欲シ其歲十月修好使節ヲ、ブカラ、ニ派ス使方今シロヤ、ノ東  
 ニ駐スル、ストル長、ニ列セリ官ヲブカラ王ロシヤ、ノ所爲ヲ怒テ  
 以テ此一行ノ長、ニ列セリ官ヲブカラ王ロシヤ、ノ所爲ヲ怒テ  
 其使節ヲ拘留ス、チエルニヤ、エ、フ威勢ヲ以テ王ヲ脅嚇シ  
 其難ヲ解カシテ計リ千八百六十六年一月一軍ヲ率テ、チ  
 ナズ、チ發シ、シルダリヤ河此當時コイカ境トセリカラチ渡リ東  
 ニ進ンテ、ブカラ、ノ、チザシ城ニ迫リ其使節放還ヲ要シテ少  
 シク城外チ鈔掠ス然レハ懸軍兵馬ノ藪料ニ窮シ遂ニ其意  
 チ達セスシテ還ル  
 右ノ報ベイトルブルグ、ニ達スルヤ、ロシヤ政府ハ直チニ、チ  
 エルニヤ、エ、フ、チ呼還シ少將ロマノ、フスキ、チ以テ之

ニ代へ且新ニ、チレンブルグ總督ニ訓令ヲ授ケ進取ヲ戒メ  
 テ後事ヲ善クセシム  
 右訓令ノ大畧ニ曰ク最後ノ報告ニ據レハ我領地ノ平穩  
 ナ保ツニ最モ急ナル中ア、チヤ諸汗國ト親睦ノ一事管、其  
 目的ヲ達セサルノ、チナラス頃日ノ所業反テ彼等ヲ激怒  
 セシメ久來我親友ト數ヘシ、ブカラ王ノ如キモ亦變シテ  
 仇敵トナルニ至ル是レ我政府ノ大ニ惜ム所ナリ然レ今  
 我所領ノ地ニ接シテ別ニ一汗國ヲ立ツルハ實際行ハレ  
 難キ事情多シトス故ニ、チシケント、ノ事ハ暫ク時勢ヲ待  
 テ彼我兩方ノ便宜ニ應シテ之カ處分ヲ成スニ如カス唯、  
 長官ノ最モ注意スヘキハ我直轄ノ領地チ中ア、チヤ、ニ弘  
 メサルニ在リ善ク此意ヲ體認スヘシ然レ、ロシヤ、ノ爲メ



實ニ爲サ、ルヘカラサル有益ノ所業ニ至テハ亦之ヲ苟  
且スヘカラス、ブカラ、ノ事ニ、至テハ早ク和親通商ノ交際  
ヲ復スルヲ以テ至要トス凡ソ長官ノ服膺スヘキハ、ブカ  
ラ王ヲシテ我其土地ヲ畧スルヲ欲セス又彼ヲシテ其領  
地ヲ我方ニ廣ムルヲ許サ、ルヲ覺ラシムルニ在リト  
チエルニヤ、エ、フ、ヂザク、ニ逼マリシ後ブカラ王ロシヤ、ノ  
使節ヲ放タサリシノミナラス、ロシヤ兵攘却ヲ唱ヘ親征ノ  
令ヲ發シテ大ニ兵ヲ集ム時ニ、ブカラ王ノ威勢猶強ク四方  
其徵ニ應スル者甚ク多クシテ同年三月下旬ロマノ、フス  
キ、ダシケント、ニ普セシ時ハ其威令亦漸々ロシヤ畧取ノ  
地方ニ及ヒ人々危懼ヲ抱キ雌雄ノ決戦免レサル勢ヒトナ  
リ、チエルニヤ、エ、フ、將ニ出陣セントスル所タリシト云フ

イルツシ  
ヤル、ノ役

因テ、ロマノ、フスキ、直ニ其後任ヲ受ケテ陣營ニ出ツ  
ロマノ、フスキ、政府ノ訓令ニ基ヒテ猶和議ヲ試ム然レ、  
ブカラ王ノ要求スル所甚ク大ナリシヲ以テ彌、一戦セサル  
ヘカラサルヲ知リ進軍ノ備ヲ爲ス此時ロシヤ、ノ方ニ於テ  
モ援兵追々來着シ總兵既ニ一萬四千ニ達ス其内運用兵  
三千チナズ、ニ屯シテ中軍ヲ成シ千餘ケレウチ、ニ屯シテ翼  
軍ヲ成セリ五月初旬ブカラ王進ンテ、イルツ、シヤル、ニ陣ス、  
ロマノ、フスキ、之ヲ邀撃セント欲シ、チナズ及ケレウチ、  
ノ兩軍ヲ發シ河ノ兩岸ニ傍フテ並ヒ進ム、イルツ、シヤル、近  
傍ニ至テ、ブカラ、ノ兵ト會シ撃テ大ニ之ヲ敗ル、ブカラ王走  
リ其兵皆潰ユ、ロマノ、フスキ、勝ニ乘シテ東南ニ進ミ、ナ、  
ウ及ホツセント、ノ兩城ヲ畧シ、ブカラ領ト、コ、イ、カン領ト交



接ノ地方ヲ収メテ全ク兩汗國ノ境界ヲ分隔ス  
 此後プカラ王拘留ノ使節ヲ釋回シテ和議ヲ求ム、ホツセン  
 ト陷ルニ及ンテ、コイカン王亦辭ヲ卑フシテ和ヲ講セシ  
 ヲ請フ土地人民ノ向背此ニ至テ定マル然レ、プカラ、トノ和  
 議猶長ク整ハス其間ニ、ウラチエベ及チザク、ノ兩城亦ロシ  
 ヤ兵ノ扼スル所トナリ兵事暫ク休メリ  
 ロマノ一、フスキ一右土地畧取ノ事ヲ辨シテ曰ク凡ソ、ア  
 シヤ人民ニ接シテ事ニ因リ一步ヲ讓ルハ弱キヲ示スノ  
 端トナリ其端一タヒ開ケハ万求之ニ乘シ向後ノ關係上  
 大ニ不利ナル影響ヲ及ホスハ多年經驗ノ實ニシテ我政  
 府ニ於テモ亦屢之ヲ以テ出先ノ長官ヲ戒メタリ且一旦  
 既ニ畧シ或ハ其人民ノ歸服セシ土地ヲ返ヘスルハ其土

トルキスタ  
 ン道ヲ  
 設ク

民舊主ノ怒ニ觸レ不幸ニ陥ルコト多カリシニ因リ既ニ此  
 處ヲ取テ退クコトヲ得サレハ軍務ノ要スル所或ハ疆域ノ  
 經畫ニ於テ又彼處ヲ取ラサルヲ得サル勢ヒトナリ兼併  
 ノ土地自然ニ廣マリシハ、カフカス同様ナリシト  
 ロシヤ政府ニ於テハ右事情ノ變遷亦意外タリシト見ヘ  
 可起リシ論説復タ大新ニ委員ヲ設ケテ其方畧ヲ議セシメ遂  
 ニ其成形ニ應シテ此地方ヲ經畧スルコトニ決シ千八百六十  
 七年盡ク中アシヤ方面ニ於テ畧取ノ土地ヲ併セ且西シベ  
 リヤ管轄セシバラチンズ州ノ土地ヲ割ヒテ之ニ加ヘ別  
 ニ、トルキスタン道ト稱スル一部ノ軍管ヲ設ク而シテ全道  
 ヲ、セミレ、チンズ州ヲ以テ治府トシ、フシヤ、チンズ州ヲ以テ治府ト  
 ストノ二州ニ分チ、タシケント、ヲ以テ總督府トシ陸軍大將ガ、



ウ、フマン、ヲ其總督ニ任シテ全道ヲ管セシム  
 大將カ、ウ、フマン、トルキスタン道總督ノ任ニ就テ管内新領  
 地ノ施設ニ從事ス此時近隣諸汗國トノ關係猶未々定ラス、  
 カ、ウ、フマン既ニ之ヲ屬國同一ニ認メテ平和ノ局ヲ結ハシ  
 ト欲シ先ツ其意ヲ、コーカソ王ホドヤル汗ニ諭ス、コーカソ、  
 ハ、ロシヤ、ト連戰敗ヲ取リ多ク將士ヲ失ヒ既ニ事ノ爲スヘ  
 キ無キヲ知リ運命ニ服シテ全ク、ロシヤ、ノ意ニ從フ是ニ於  
 テ其翌千八百六十八年ノ始總督カ、ウ、フマン兩國間通商ノ  
 規則ヲ設ケテ、コーカソ王ト左ノ五ヶ條ヲ約ス

第一 コーカソ商人ノ、ロシヤ國內各市場ニ於テ其業ヲ  
 營ムヲ得ルト同シク、ロシヤ商人モ、コーカソ國內  
 城邑ヲ論セス各地ニ到ルヲ得ヘシ

第二 ロシヤ商人ハ、コーカソ汗國中隨意ノ城邑ニ其物

品ヲ貯藏スル館庫ヲ有スルヲ得ヘシ又コーカソ  
 商人モ、ロシヤ、ノ諸城ニ於テ同様ナル權ヲ有スル  
 モノトス

第三 商業ノ正シク行ハレ課税ノ其宜ニ適フヲ監察ス

ル爲メ、ロシヤ商民ノ望ニ應ジテ、コーカソ汗國中  
 都會ノ地ニ自己ノ商業理事役ヲ置クヲ得ヘシ、コ  
 ーカソ商モ之ヲ、ロシヤ、ノ、トルキスタン領地内ノ  
 諸城ニ置クヲ得ヘシ

第四 ロシヤ領内ヨリ、コーカソ領内又ハ、コーカソ、ヨリ、  
 ロシヤ、ヘ輸入物品ノ税ハ總テ原價二分半ノ利ヲ  
 以テ定規トスル事



第五

ロシア商ハ其商隊ト與ニ自在ニ、コーカン領内ヲ  
經過シテ危險ナク近鄰ノ諸邦ニ通行スルヲ得ヘ  
シ、コーカン商隊モ亦ロシア領内ヲ經テ他國ニ赴  
クヲ得ル事

プカラ、ニモ此ト同一ノ約束ヲ要セシニ、プカラ王ハ、イルツ、  
シヤル、ノ敗軍後ロシア兵ノ其近鄰諸國ノ兵ト異ナリ稍與  
ミシ難キヲ知リシト雖モ未タ、コーカン、ノ如キ挫折ニ至ラ  
ス且ホツセント、ウラチユベ、チザク、ノ三城ヲ奪ハレ之ト與  
ニ其土地人民ヲ失フテ常ニ遺憾ニ堪ヘス國民亦宗教家ノ  
鼓動スル所トナリ憤激シテ、ハザートノ宗人等ノ異征スル他國  
ト云フテ猶更ニ要シ敵愾ノ勢ヒ漸盛ナリシニ因リ、プカラ  
王此機會ニ乘シテ其失亡ノ地ヲ恢復センヲ圖リ事ニ托

サマルカ  
ンド、チ畧  
ス

シテ右要求ノ答ヲ緩フシ密カニ軍備ヲ修ム千八百六十八  
年四月下旬總督カ、ウ、フマン將サニ事ヲ以テ、ペートルブル  
グ、ニ赴カントス、プカラ王之ヲ偵知シ其虛ニ乘シテ軍ヲ進  
メント欲シ出テ、サマルカンド、ニ陣ス、カ、ウ、フマン之ヲ聞テ  
遽カニ發途ノ方向ヲ轉シ急ニ兵ヲ勸シテ東サマルカンド、  
ニ向フ未タ達セサルコト二里セラ、フシヤン河ニ至テ、プカラ、  
ノ兵ト會シ河ヲ隔テ交戦ス五月一日ロシア兵遂ニ河ヲ渡  
リ、プカラ王ヲ前岸チウパン||アマ、ト稱スル高邱ニ擊テ之  
ヲ走ラス、サマルカンド戰ハスシテ降ル因テ、カ、ウ、フマン此  
ニ守兵ヲ留メ自ラ、プカラ、ノ兵ヲ窮追シテ西カタイ||グル  
ガン、ニ至ル會シヤ、フリシヤプス山南ノ、シアール及キタプ  
人等プカラ王ヲ救ヒ山ヲ越ヘテ、ロシア兵ノ後ニ出テ、カア



イリシカガ、ノ往還ヲ斷ツテ、サマルカンド、ヲ攻撃ス、カ、ウ、  
 フマン乃チ軍ヲ旋ヘス而シテ城遂ニ陥ルニ及ハス  
 プカラ王此ニ至テ勢ヒ遂ニ敵スヘカラサルヲ知リ盡ク、ロ  
 シヤ、ノ要求ニ應シテ和約ヲ結フ其和約ニ因テ、シヤ、フリシ  
 ヤプス山以北ノ土地一面及永久國威保護ノ聖都ト稱セシ、  
 サマルカンド、ト與ニ之チ、ロシヤ、ニ讓リ外ニ五十萬ルー  
 ル、ノ償金ヲ出シテ僅ニ其國ヲ保ツコトヲ得タリ  
 ロシヤ、ニ於テハ右プカラ、ヨリ讓リ受ケシ土地ヲ、セラ、フシ  
 ヤ州トシテ之チ、トルキスタン道ニ合併シ後其償金ヲ以  
 テ内地ヨリ電信線ヲ、タシケント其他ノ諸城ニ架シテ大ニ  
 中アシヤ領地ノ便ヲ通セリ  
 此後プカラ大ニ衰ヘ國事既ニ、ロシヤ、ニ頼ラサルヲ得サ

ル勢ヒトナル同年ノ末國王ノ長子亂ヲ爲ス王之ヲ制ス  
 ル能ハス救ヲ、ロシヤ、ニ求メ其應援ニ依テ之ヲ鎮定スル  
 ヲ得タリ又千八百七十年シアール及キタフ地方離叛シ、  
 プカラ王兵ヲ用ヒテ戰ヒ屢、利アラズ是ニ於テ、ロシヤ又  
 兵ヲ出シ、シアール、キタフ、ヲ襲フテ之ヲ取り再ヒ、プカラ  
 領ニ歸セシメタリ

右ハ、ロシヤ、ニ於テ素ヨリ爲ニスル所アリシモノニテ第  
 一此住民等二年前プカラ王ヲ救フテ、サマルカンド、ヲ圍  
 ミシヲ以テ之ヲ討シ、ロシヤ、ノ威嚴犯スヘカラサルヲ示  
 ス第二プカラ王サマルカンド、ヲ復スルノ情切ニシテ之  
 チ、ロシヤ、ニ乞ヒ懇願已マス故ニ是等ノ助力ヲナシ思  
 施シテ其請求ヲ避ケシモノタリ然レ思威交布ノ方畧亦



漸々其意ヲ達シ、フカラ遂ニ、ロシヤ、ハ馴服ノ附庸國ニ變  
セリ

キワ遠征

千八百七十年代ノ始メ猶ロシヤ、ノ威勢ニ服セサル者ハ獨  
リ、キワ汗國アリ此汗國沙漠ノ西隅ニ偏依シ且以前同度ロ  
シヤ征隊ノ途中ニ於テ挫敗セシアルヲ以テ其兵ハ近ツ  
ク能ハサルモノトシ依然一方ニ雄視シテ復タ、ロシヤ、ノ要  
求ヲ以テ意トセス故ニ其偏強自ラ中アシヤ、ノ人氣ニ關シ  
テ、ロシヤ、ノ威勢ヲ妨ケ所謂臥榻ノ傍ラニ他人ノ鼾睡ヲ容  
レサル勢トナリ、ロシヤ、又一戰シテ之ヲ挫カサルヲ得サリ  
シカ此時ロシヤ兵ノ、キワ、ニ進軍スル難易昔日ト大ニ變シ  
既ニ、タシケント、ノ根據成リ又アラル、カスビ一兩海運送ノ  
便アリ且舊ハ、キワ、ト同盟タリシ、フカラ、モ當日ニ至テハ變

シテ、ロシヤ、ノ同盟トナリ其他既往ノ經驗及地理ノ講究等  
大ニ兵器ヲ易フシ遠征ノ功既ニ期スヘカリシ因テ、キワ汗  
國ノ、ロシヤ、商隊ヲ劫掠シ野民ヲ煽動シテ亂チ爲サシムル  
ヲ以テ名トシ千八百七十三年ロシヤ總督カ、ウ、フマン、ニ命  
ジ、トルキスタン道ノ兵ヲ以テ之ヲ伐タシム又チレンブル  
グ及カフカズ兩道ノ總督ニ命シ各其兵ヲ分遣シテ、カ、ウ、フ  
マン、ヲ助ケシメリ

同年春キワ遠征ノ兵マシケント、チレンブルグ及カフカズ、  
ノ三方ヨリ發シ各沙漠行軍ノ艱苦ヲ嘗メ類チワ人腐敗ノ密  
之ヲ水ヲ爲メ大ニ窮セリ兵諸道キワ兵ト交戦シテ進ミ五月末ロ  
シヤ、ノ全軍遂ニ、キワ、城壁ノ下ニ會ス、キワ兵支フルヲ能ハ  
ス國王出奔シ其弟世チ嗣キ而シテ降ル總督カ、ウ、フマン、乃



ナ威儀ヲ整ヘテ、キワ城ニ入リ五月三、舊國王ヲ迎ヘテ其位ニ復セシメ之ト向後ノ條約ヲ定ム條約書ハ附其結局キワ國王ハ今ヨリ、ロシヤ帝ノ臣屬トナリ復タ他國ト隨意ニ交際スルヲ得ス其所領タル、アムーダリヤ河右岸ノ土地ハ盡ク、ロシヤ、ニ讓リ奴隸賣買ヲ禁シ四萬ノ、ベルシヤ囚人ヲ釋シ二百二十萬ルーブル、ノ償金ヲ出シテ依舊キワ、ノ土地ヲ領スルヲニ歸セリ

ロシヤ第三ノ、キワ遠征此ニ至テ始テ其功ヲ奏シ其新ニ獲シ、アムーダリヤ河右岸ノ土地ヲ少シク割テ之ヲ、ブカラ、ニ與ヘ其此役ニ與カリシ功ニ酬ヒ多ク送略ヲ助ケリ其餘ヲ、アムーダリヤ州トシテ之ヲ、トルキスタン道ニ合併シ全ク、アムーダリヤ河道水運ノ利ヲ占メ又此河流ニ臨ンテ、ペトロ

コイカン、ヲ兼併ス

咽喉ヲ扼ス  
諸汗國獨立ノ勢ヒ此ニ至テ皆去リ、ロシヤ帝ノ中アシヤ、ニ君長タル地位全ク成ル然ルニ二年ヲ過キテ又コイカン、ノ變起ル

コイカン汗國ハ既ニ、ロシヤ、ニ屈伏セシト雖モ國內政黨ノ争ヒ常ニ斷ヘス其中最モ、ロシヤ、ヲ敵視セシ、キアチヤン黨漸々勢ヒテ得千八百七十五年ノ秋人民國王ニ不服ノ事アリシ機會ニ乘シテ遂ニ其政府ヲ覆ヘシ王ヲ逐ヒ、ロシヤ人攘却ヲ唱ヘテ急ニ兵ヲ徵シ烏合ノ衆相率ヒテ直ニ、タシケント、ニ逼リ四方ヨリ襲撃ス總督カ、ウ、フマン警ヲ聞キ兵ヲ整ヘテ出拒ク、コイカン、ノ兵退テ、マ、フラム、ニ據ル、ロシヤ兵



進ミ擊テ大ニ之ヲ敗リ退フテ、コーカン城ニ至ル城下ノ住民門ヲ開ヒテ、ロシヤ兵ヲ納ル是ニ於テ前國王ホドヤル汗ノ子ナシル<sub>ル</sub>ユエチン、チシテ汗位ニ即カシメ其亂一特定マリ、ロシヤ兵皆引去ル然レ幾ハクモナクシテ、キプチャク黨復タ事ヲ執リ新國王ヲ逐フ他黨續ヒテ起リ或ハ一方ニ割據シ或ハ別ニ兵ヲ起シテ汗位ヲ争ヒ國內紛裂シテ政權統フル所ナシ而シテ、ロシヤ人各地多クハ害ニ遭フ因テ、ロシヤ又兵ヲ發シテ之ヲ伐ツ<sub>此夫ノ有名ナル、ステコ<sub>一</sub>ベレ、フ將軍</sub>ハ千八百七十六年遂ニ、コトカン汗國ヲ滅シ其土地ヲ古名ニ復シテ、ヘルガナ州ト稱シ又之ヲ、トルキスタン道ニ合併ス  
 ロシヤ、ノ中アシヤ領地此ニ至テ東ハ天山ニ接シ西ハ、カス

トルクマ  
 ン、チ制馭  
 ス

ビ<sub>一</sub>海ニ連ナル然レ其中間南部ノ地方ニ、トルクマン部落アリ猶其獨立ヲ保テリ  
 トルクマン地方ハ不毛ノ漠野多シ然レ其都城タル、メル、フ、ハ、ブカラ、キワ、タシケント諸城ノ、ベルシヤ及ア、フガニスダ<sub>ノ</sub>地方ト交通ノ要衝ニ當リ又其迤西カスビ<sub>一</sub>海ヨリ大沙漠ノ西端ニ並ヒ一帶ノ沃土ア<sub>ハ</sub>スル、チ<sub>ナ</sub>横布シテ、メセツド及ヘラツド、ト交通ノ便ヲ供ヘシニ因リ其地方中アシヤ全部ニ於テ最モ重要ナル所トス故ニ、ロシヤ、ニ於テ其中アシヤ領地ノ事業廣マルニ從ヒ遂ニ又トルクマン、ヲ制馭シテ其地位ヲ固メント欲シ、カスビ<sub>一</sub>海ノ方ヨリ早ク既ニ其事ニ着手シテ之ヲ招撫セシト雖レ其衆稍慄悍ヲ以テ著ハレ容



易ニ羈縻ニ就カス會其間イギリス及ア、フガニスタン關係ノ事情迫リ千八百七十九年春ロシヤ密カニ中將ラザリヨ、フニ命シ、カフカス道ノ兵ヲ發シテ、トルクマン中最モ倔強ナル、アハル<sub>||</sub>ヲケ、ヲ伐タシム

中將ラザリヨ、フ、カスピ海ノ南岸ヲキシリヤル、ニ就テ遠征隊ヲ整ヘ、火砲六隊、騎兵五隊、砲兵一隊、半隊、同年七月末ヘ總軍ヲ二陣ニ分チ、アハル沃野ニ由テ、テケ、ノ根據ゲヲク<sub>||</sub>テペ、ニ向テ進ム途、中隊長ラザリヨ、フ病死シテ少將ロマ<sub>||</sub>キン之レニ代ル八月末ゲヲク<sub>||</sub>テペ、ニ達シテ其城ヲ攻ム、トルクマン死ヲ決シテ拒戦ス、ロシヤ兵克タス遂ニ敗歸ス此役ロシヤノ損七千八百人、死傷幾シト是ニ於テ、ロシヤノ威勢稍挫ケ、トルクマン益々猖獗ロシヤ更ニ中將スコ<sub>||</sub>ベレ、フ、

結

ニ命シテ新ニ、トルクマン征伐ノ準備ヲ爲サシメ又トルキスタン道總督ニ命シテ援軍ヲ出シ兩方ヨリ之ヲ夾撃シシム

千八百八十年秋中將スコ<sub>||</sub>ベレ、フ大舉シテ、ゲヲク<sub>||</sub>テペ、ニ迫リ隧道ヲ設ケ地雷火ヲ放チ四方ヨリ攻撃シテ遂ニ其城ヲ陥ル、アハル<sub>||</sub>ヲケ全部皆降ル是ニ於テ、ロシヤノ威勢大ニ、トルクマン地方ニ震フ

ロシヤ、ノ南侵或ハ中アシヤ押領ノ概畧此ノ如シ此ニ由テ之ヲ考フルニ夫ノ、ペ<sub>||</sub>トル帝ノ遠征以來千八百年代ノ半マテノ事ハ邊將功ヲ競フテ疆域自然ニ廣マリシモノニ過キズ而シテ、ロシヤ政府ノ意ヲ中アシヤ經畧ニ決シテ之カ計ヲ爲シタルハ蓋シ千八百六十七年トルキスタン道ヲ設



シルヲ以テ始トス其方畧タル先ツ兵力ヲ、タシケント、ニ畜  
ヘ一ハ此ヨリ其威勢ヲ東南ニ及ホシ一ハ、カフカス道ノ兵  
力ヲ以テ、カスピ海ヨリ東北ニ及ホシ兩方ヨリ漸次ニ諸  
汗國及游牧野民ノ其間ニ分立セシモノヲ蕩平シテ東ハ天  
山ニ至リ直ニ清國領ニ接シ東南ハ、ア、フガニスタン及ペル  
シヤ、ニ接シテ其境域ヲ畫シ水陸交通ノ便ヲ開キ治安ノ基  
ヲ固フシ無事ノ時ハ各地産業ノ増進ヲ計リ、ペルシヤ、ア、フ  
ガニスタン、インド及清國新疆ト通商ノ利ニ就キ事アル時  
ハ直ニ其國境ニ臨ミ内外攻守ノ便ヲ保ツテ得ルヲ以テ主  
トセリ然レ其業固ヨリ大ニシテ多ク費用ヲ要シ且イギリ  
ス常ニ之ニ抵抗セシヨリ、ブカラ既ニ挫ケ、キワ平定ノ後  
ハ兵ヲ用ヒスシテ漸次ニ其威徳ヲ廣メント欲セシ者ト見

ヘシニ事情變遷遂ニ又トルクマシ、テ伐ツニ至ル、トルクマ  
シ既ニ羈縻ニ就クニ及ントハ其業畧既ニ成リシモノト云  
フヘシ唯、其未タ成ラサルハ直ニ、ア、フガニスタン、ニ接シテ  
所望ノ境界ヲ畫スルノ一事タリ夫ノ、ブカラ及キワ、ノ如キ  
ハ之ヲ兼併シテモ得失相償ハサルコト多シ故ニ害ヲ爲スニ  
非レハ寧ロ國王ヲ存シテ其疆土ヲ保タシメ荷モ之ヲ取ラ  
ント欲セハ常ニ取ルヘキ威權ヲ持シ、之ヲ取ルヲ欲セサル  
情愛ヲ以テ王ヲ懷ケ命ヲ聽カシムル方ロシヤ、ニ於テハ便  
タリ利タリ故ニ此ヲ以テ其政畧トス



附録

千八百七十三年ロシア、トルキスタン道ノ總督カ、ウ、フ  
マン、キワ國王セイド、ト締結ノ條約

第一條

セイド || ムハメツド || ラヒム || ボガドル汗ロシア帝ノ  
藩臣タルヲ承諾シ自今近鄰ノ諸國ト直接ノ交際ヲ爲シ  
若シハ通商其他ノ條約ヲ締結スルヲ得ヌ又ロシア中  
ア  
シヤ長官ノ認可ヲ經ヌシテ自ラ近鄰ト兵ヲ交ユルヲ得  
ス

第二條

アムーダリヤ河ヲ以テ、ロシア領及キワ領地ノ境トス其  
境線ハ、クケルテリ、ヨリ始マリ河筋ニ由テ末流ニ至リ



其分派中極西ノ支流ニ沿フテ、アラル海ニ出テ此海岸ニ就テ西方ウルガ岬ニ至リ其ヨリ、ウシチルツルト沙邱ノ下ヲ廻リ、アムールダリヤ舊流ト稱スル河跡ニ循フ

第三條

舊來キワ領分タリシ、アムールダリヤ河右岸ノ地ハ土著者ト游牧者トヲ問ハス其人民ト與ニ悉ク、ロシヤ領分ニ歸ス

右ノ區域内ニ在ル、キワ王ノ所有地及重臣等ノ封土トモニ舊主ノ苦情ヲ容レズ總ヘテ、ロシヤ政府ノ領分ニ歸スヘシ故ニ是等ノ地主ニハ其代リニ左岸中ノ地ヲ割キ與ヘテ損得相償ハシムルハ、キワ王ノ處分ニ任ス

第四條

若シ、ロシヤ帝ノ所望ニヨリ舊キワ領タリシ、アムールダリヤ河右岸ノ一部ヲ割テ、ブカラ王ノ所領ニ付スルヲアル時ハ、キワ王之ヲ其土地當然ノ領主ト認メテ其地ニ復タ自己舊時所領ノ威權ヲ及ホスヲ得ス

第五條

官私所屬ヲ問ハス唯ロシヤ、ノ汽船及帆船アムールダリ河自在航運ノ特權ヲ保ツモノトス、キワ及ブカラ、ノ船舶モ、ロシヤ中アシヤ長官ノ特許ニ依テ同シク航運スルヲ得ヘシ

第六條

アムールダリヤ河ノ航運ニ就キ其左岸ニ於テ必用且便利ナル場所ニハ、ロシヤ人船着場ヲ設クルヲ得ヘシ其場